

上塩治横穴墓群 第3支群

県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

上塩治横穴墓群 第3支群

2018年3月



調査地全景（東より）



12～18号横穴墓（北東より）



上塙治横穴墓群第3・40支群空撮合成写真（下が東：第3支群・上が西：第40支群）

県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

上塩治横穴墓群 第3支群

2018年3月

出雲市教育委員会

序

本書は、島根県出雲県土整備事務所から依頼を受けて、平成 27～28 年（2015～2016）度に実施した県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事予定地内に所在する上塩治横穴墓群第 3 支群の発掘調査の成果を記録したものです。

遺跡の所在する出雲市上塩治町は、市内でも有数の文化財の集中地域であり、数多くの歴史的文化遺産が眠っています。中でも、上塩治横穴墓群は総数 230 基を超える山陰地域最大級の横穴墓群であり、その文化財的な価値は非常に高いものです。

今回の調査の結果、第 3 支群は上塩治横穴墓群の中でも最も古くから築造された支群の一つであることが確認できました。また、武具や土器等多くの副葬品も発見されており、貴重な成果を得ることができました。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や、関係者の皆様に厚く御礼申しあげます。

平成 30 年（2018）3 月

出雲市教育委員会

教育長 横野信幸

例　　言

1. 本書は、平成 27 年（2015）度から平成 28 年（2016）度にかけて出雲市教育委員会が実施した、県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事に伴う上塩治横穴墓群（鳥根県遺跡番号 W138、出雲市遺跡番号 F20）、の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 調査は下記の体制、期間で実施した。

調査地及び調査面積　鳥根県出雲市上塩治町 2975 外 約 1,350 m²（対象事業地約 1,900 m²）

調査期間　平成 27 年 9 月 2 日～平成 28 年 4 月 22 日（現地）

調査体制　<平成 27 年度>　現地調査

　　事務局　　花谷 浩（出雲市市民文化部学芸調整官）

　　佐藤隆夫（同 文化財課課長）

　　宍道年弘（同 課長補佐兼埋蔵文化財 1 係係長）

　　調査員　　須賀照隆（同 主任・調査担当者）

　　調査補助員　伊藤貴夫、今若豊実、足立敏郎（同 臨時職員）

　　整理作業員　荒木恵理子、飯國陽子、鶴口令子

　　発掘作業員　安食浩好、伊藤貴敏、江角和樹、小野圭士、河合幸夫、高木敏男、

　　滝尻伸次、田邊宏行、土江勝正、福田勝利、福庭敏昭、三木英夫、

　　山本明盛、寄廣和人

　　発掘調査支援　株式会社トーワエンジニアリング（発掘作業員雇用等を業務委託）

<平成 28 年度>　現地調査・報告書作成

　　事務局　　花谷 浩（出雲市市民文化部学芸調整官）

　　佐藤隆夫（同 文化財課課長）

　　宍道年弘（同 課長補佐兼埋蔵文化財 1 係係長）

　　調査員　　須賀照隆（同 主任・調査担当者）

　　調査補助員　伊藤貴夫、今若豊実、足立敏郎、永見翼、山岡洋介（同 臨時職員）

　　整理作業員　荒木恵理子、飯國陽子、鶴口令子、田中麻理

<平成 29 年度>　報告書作成

　　事務局　　佐藤隆夫（出雲市市民文化部文化財課課長）

　　宍道年弘（同 課長補佐兼埋蔵文化財 1 係係長）

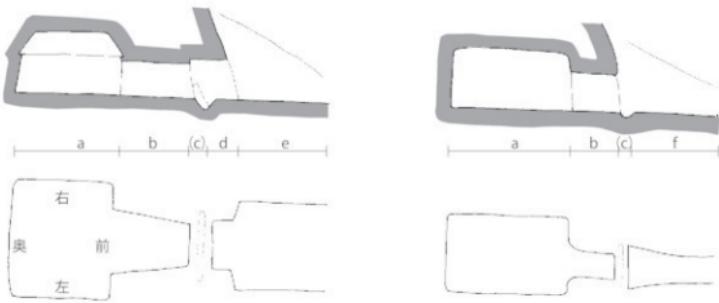
　　調査員　　須賀照隆（同 主任・調査担当者）

　　調査補助員　加藤章三、永見翼、小松原智明（同 臨時職員）

　　整理作業員　荒木恵理子、前島浩子

3. 本書の編集・執筆は職員の協力を得て、須賀が行った。

4. 本書に掲載した遺物及び実測図、写真は出雲市文化財課が保管している。
5. 出土品の内、金属製品はフジテクノ有限公司に保存処理を委託した。
6. 本書における須恵器編年は下記の文献による。横穴墓の時期標記もこれに基づくものとする。
- 大谷見二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第11集 鳥根考古学会
- 大谷見二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書 第8集 平田市教育委員会
7. 調査・整理にあたっては、以下の方々から指導、助言を得た。記して感謝申しあげます（敬称略）。
- 大谷見二（鳥根県立松江北高等学校）、西尾克己（大田市教育委員会石見銀山課）、原田敏照（鳥根県教育庁文化財課）
8. 本書で使用した方位は、座標北を示す。座標は、世界測地系第III系に基づくものである。標高は海拔高を示す。
9. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
- SK - 土坑
10. 上塙治横穴墓群第3支群の遺構名称を発掘調査概報時点から以下のとおり変更した。
- 横穴墓：1～9号横穴墓→11～19号横穴墓
- その他：SK 02→SK 1、SK 01→横坑2、横坑2→横坑3
11. 以下は、本書で使用する横穴墓の遺構内名称、形態名称である。
- 横穴墓における各部位の名称は、下図のとおりである。
- 天井形態については、奥壁と側壁の境界が明瞭で奥壁が垂直ぎみに立ち上がり、断面形が半円形を呈するものをアーチ形天井とする。玄室壁面に軒線があり、天井部を家形に加工するものを家形天井とする。



a 玄室 b 玄門 c 閉塞部 d 羨道 e 前庭部 f 墓道

横穴墓各部名称（模式図）

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境.....	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 過去の調査.....	7
第4章 調査の成果.....	11
第1節 調査の概要	11
第2節 横穴墓の調査	15
第3節 その他の遺構と遺物	45
第5章 総 括.....	52
第1節 上塙治横穴墓群第3支群の時期と特徴	52
第2節 上塙治横穴墓群における横穴墓築造の動向	55
第3節 結 語	59
遺物観察表.....	61

挿図目次

第1図	県道出雲三刀屋線上塙治工区に係る 調査地位置図	2
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡	4~5
第3図	上塙治横穴墓群と周辺の後期古墳分布図	9
第4図	調査区周辺図	11
第5図	遺構配置図1	12~13
第6図	遺構配置図2	14
第7図	横穴墓配置図	15
第8図	11号横穴墓遺構図	17
第9図	11号横穴墓遺物実測図	17
第10図	12号横穴墓遺構図	18
第11図	12号横穴墓遺物実測図	19
第12図	13号横穴墓遺構図1	20
第13図	13号横穴墓遺構図2	21
第14図	13号横穴墓遺物実測図1	22
第15図	13号横穴墓遺物実測図2	23
第16図	13号横穴墓遺物実測図3	24
第17図	14号横穴墓遺構図1	26
第18図	14号横穴墓遺構図2	27
第19図	14号横穴墓石棺復元図	29
第20図	14号横穴墓遺物実測図1	30
第21図	14号横穴墓遺物実測図2	31
第22図	15号横穴墓遺構図1	32
第23図	15号横穴墓遺構図2	33
第24図	15号横穴墓遺物実測図1	34
第25図	15号横穴墓遺物実測図2	35
第26図	15号横穴墓遺物実測図3	36
第27図	16号横穴墓遺構図	37
第28図	16号横穴墓遺物実測図	38
第29図	17号横穴墓遺構図	39
第30図	17号横穴墓遺物実測図1	39
第31図	17号横穴墓遺物実測図2	40
第32図	18号横穴墓遺構図	42
第33図	18号横穴墓遺物実測図	42
第34図	19号横穴墓遺構図	44
第35図	横坑群遺構図	46
第36図	SK1遺構実測図	47
第37図	遺構外出土遺物実測図1	48
第38図	遺構外出土遺物実測図2	49
第39図	円筒埴輪片出土位置図	50
第40図	横穴墓と小群の配置図	52
第41図	上塙治横穴墓群と周辺後期古墳の分布	56

挿表目次

表1	上塙治横穴墓群支群一覧	8
表2	第3支群横穴墓一覧表	53
表3	第3・40支群横穴墓主要要素一覧表	54
表4	上塙治横穴墓群と関連古墳の墓邊状況	57
表5	出土土器觀察表	62
表6	出土金属器觀察表	66

図版目次

カラー図版 1 調査地全景	国版 11 横坑群
12～18号横穴墓	横坑 1 開口部
カラー図版 2 上塙治横穴墓群第3・40支群空撮合成写真	横坑 1 断面
国版 1 上塙治横穴墓群第3支群全景	横坑 3 開口部
11号横穴墓	横坑 3 断面
11号横穴墓玄室	横坑 2
国版 2 12号横穴墓	S K 1
12号横穴墓玄室	国版 12 11号横穴墓出土土器
国版 3 13号横穴墓	12号横穴墓出土土器
13号横穴墓閉塞状況	13号横穴墓出土土器 - 1
13号横穴墓玄室	国版 13 13号横穴墓出土土器 - 2
国版 4 13号横穴墓遺物出土状況 - 1	国版 14 13号横穴墓出土土器 - 3
13号横穴墓遺物出土状況 - 2	14号横穴墓出土土器 - 1
国版 5 14号横穴墓	国版 15 14号横穴墓出土土器 - 2
14号横穴墓閉塞状況	15号横穴墓出土土器 - 1
14号横穴墓玄室完掘状況	国版 16 15号横穴墓出土土器 - 2
国版 6 14号横穴墓石棺	16号横穴墓出土土器
国版 7 14号横穴墓玄室内遺物出土状況 - 1	18号横穴墓出土土器
14号横穴墓玄室内遺物出土状況 - 2	17号横穴墓出土土器 - 1
国版 8 15号横穴墓	国版 17 17号横穴墓出土土器 - 2
15号横穴墓道上遺物出土状況	国版 18 遺構外出土土器・円筒埴輪
15号横穴墓玄室	国版 19 出土金属器 - 1
国版 9 16号横穴墓	国版 20 出土金属器 - 2
17号横穴墓	国版 21 出土金属器X線写真
国版 10 18号横穴墓	
19号横穴墓	
19号横穴墓玄室	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯（第1図）

県道出雲三刀屋線は出雲市と雲南市を結ぶ主要地方道であり、同上塩治工区道路改良工事は、島根県出雲県土整備事務所により計画されたものである。その事業地が、周知の埋蔵文化財包蔵地「上塩治横穴墓群」の範囲内に及ぶことから、事業主体である島根県出雲県土整備事務所と出雲市文化財課で協議を重ね、平成24年（2012）8月より本発掘調査を実施することが決定した。

調査は開発事業の進捗にあわせ、事業地の西方より断続的に実施することとなり、平成24～26年（2012～2014）度にかけては約2,650m²の事業地を対象に第40支群の発掘調査を、平成27・28年（2015～2016）度には約1,900m²の事業地を対象に第3支群の発掘調査を実施した。本報告書は、この内、平成27・28年度に実施した上塩治横穴墓群第3支群の発掘調査成果をまとめたものである。

第2節 経 過

前述のとおり、県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事に伴う上塩治横穴墓群の発掘調査は、平成24年（2012）より実施しており、平成24～26年度にかけて実施した第40支群の発掘調査については、平成26年（2014）5月30日に現地調査を完了し、平成28年（2016）9月に発掘調査報告書を刊行した。

本書掲載の平成27・28年度の発掘調査は、第40支群と同一丘陵の東側斜面に位置する第3支群を対象とし、平成27年9月2日～平成28年4月22日の期間で実施した。また、調査期間中の平成28年3月6日には発掘調査現地説明会を実施し、約120名の一般参加者に調査成果を公開した。

調査後に島根県教育委員会との協議を行った結果、調査の原因となった主要地方道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事は公共性が高く計画変更も困難であることから、遺跡を記録保存に留めることはやむを得ないとの判断に至った。

上塩治横穴墓群第3支群の調査に関連する主な文化財保護法上の文書

平成24年（2012）

7月19日 「埋蔵文化財発掘の通知について」事業者より市教委経由で県教委へ

7月30日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委より市教委経由で事業者へ

平成27年（2015）

9月1日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委より県教委へ

平成28年（2016）

4月22日 「埋蔵物発見届」市教委より出雲警察署へ

- 4月22日 「埋蔵文化財保管証」市教委より県教委へ
4月22日 「主要地方道出雲三刀屋線上塩冶工区社会資本整備事業総合交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（Ⅲ区）に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ
4月22日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ
7月13日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」県教委より市教委へ



第1図 県道出雲三刀屋線上塩冶工区に係る調査地位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

上塩治横穴墓群は出雲市上塩治町地内に所在する。JR 出雲市駅の南南東約 2km の丘陵上に位置し、東西約 1km、南北約 1.5km の範囲に約 230 穴の横穴墓が確認されている。

出雲平野は、南を中国山地と北を島根半島に挟まれた、日本海から宍道湖西岸まで東西約 20km にわたる県内最大の沖積平野である。出雲平野西側の日本海沿岸部には砂丘が南北に伸びている。平野を形成した二大河川、斐伊川と神戸川がそれぞれ中国山地から宍道湖と日本海に注いでいる。遺跡の位置は、神戸川が中国山地から出雲平野へ流れ込む出口の右岸にあたる丘陵地である。

上塩治横穴墓群が築かれた古墳時代後期から終末期頃の出雲平野は、斐伊川の本流と神戸川は共に西流して『出雲国風土記』に記す「神門水海」に注ぎ、宍道湖の西岸は現在より西にあって、湖面は大きく広がっていた。現在のように斐伊川本流が東流し、神戸川が直接日本海に注ぐようになったのは中世末期以降のことである。

第2節 歴史的環境（第2図）

1 繩文・弥生時代

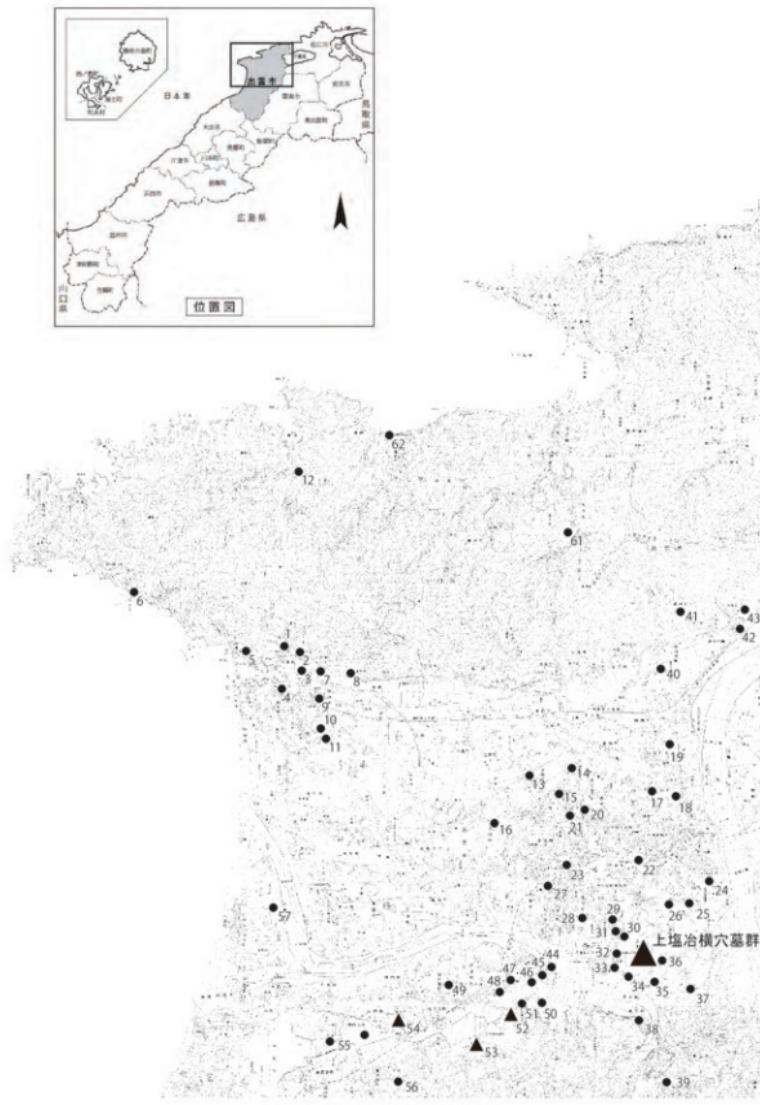
出雲平野における遺跡の初現は縄文時代早期である。平野北西端の山麓に所在する菱根遺跡（8）や平野西端の砂丘下に所在する上長浜貝塚（57）などが知られている。後期から晩期になると、三田谷 I 遺跡（34）や後谷遺跡（66）など、平野南部の丘陵下でも多くの遺跡が営まれ、平野中央部の矢野遺跡（13）などでも遺物が確認されるようになる。

弥生時代には、前期に平野部の拠点集落となる矢野遺跡（13）が成立し、中期から後期にかけて平野部の集落が急速に発達する。また、特に注目される遺跡として、中期に大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡（70）や加茂岩倉遺跡（73）が、後期に「王墓」とされる大規模な四隅突出型埴丘墓が築かれた西谷墳墓群（24）がある。

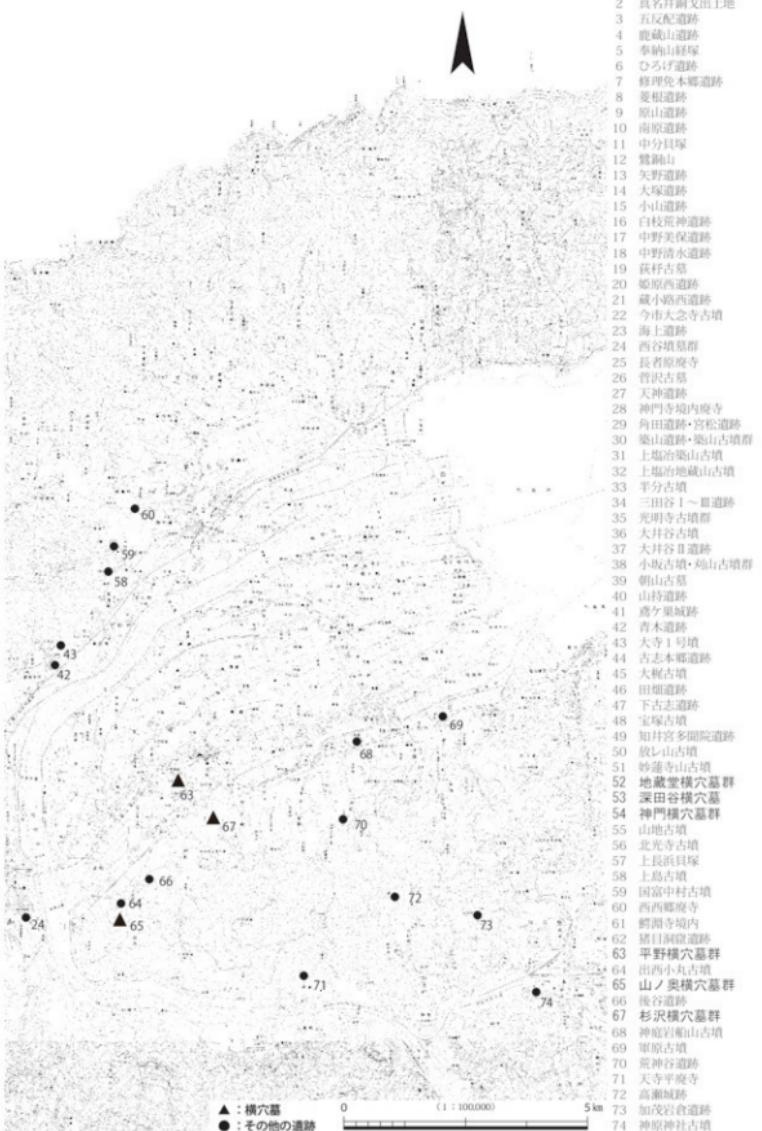
2 古墳時代

古墳時代に入ると、出雲平野の集落は神戸川流域の古志本郷遺跡（44）や下古志遺跡（47）などで集落の廃絶、縮小化が顕著となり、平野全体を見ても集落数の減少傾向が見られる。その後、中・後期には再び営まれる集落のほか、新たに集落が形成されるものも出現するが、弥生時代のような拠点的な集落の存在は明確でない。

古墳については、前期に西谷 7 号墳（24）、大寺 1 号墳（43）、山地古墳（55）などが、中期から後期初頭には北光寺古墳（56）、神庭岩船山古墳（68）などが知られるが、北光寺古墳を除き大型古墳は確認されていない。後期後半になると古墳の数が激増する。特に、神門川両岸の有力古墳群はその中



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡



でも際立つものである。神戸川右岸では今市大念寺古墳（22）、上塙治築山古墳（31）、上塙治地蔵山古墳（32）といった県内屈指の首長墳が継続して築かれ、神戸川左岸でも宝塚古墳（48）、放レ山古墳（50）、妙蓮寺山古墳（51）など、それらに次ぐ位置づけの古墳が築かれるようになった。

横穴墓については、後期後半以降に盛んに造られるようになり、出雲平野周辺の横穴墓群の数は、平野縁辺部を中心に50基を超える。平野東部の代表的な横穴墓群としては、斐伊川右岸の平野横穴墓群（63）、山ノ奥横穴墓群（65）、杉沢横穴墓群（65）などがあるが、いずれも横穴墓数30基に満たない。平野西部の代表的な横穴墓群としては、神戸川右岸の上塙治横穴墓群のほか、神戸川左岸の神門横穴墓群（54）がある。神門横穴墓群は横穴墓数123基以上で、上塙治横穴墓群に次ぐ規模を誇る。平野西部の横穴墓群も数基から20基程度の小規模な群をなすものがほとんどであり、横穴墓数100基を超える上塙治横穴墓群と神門横穴墓群は、その中でも傑出した規模の2大横穴墓群と言える。

また、上塙治横穴墓群が造営された後期後半以降、遺跡の立地する丘陵上及びその隣接地には、前述の上塙治築山古墳、上塙治地蔵山古墳といった傑出した首長墓のほか、築山古墳群（30）や三田谷古墳群（34）など、中小古墳も数多く築造されており、大型古墳、中小古墳、横穴墓が一体的に存在する広域な墓域を形成している点で注目される。

3 奈良時代

奈良時代の遺跡としては、特に『出雲国風土記』記載の官衙や寺院などの関連遺跡が注目される。官衙関連遺跡としては、神門郡家推定地とされる古志本郷遺跡（44）、出雲郡家に付属する正倉跡と考えられている後谷遺跡（66）などが知られる。寺院関連遺跡としては、朝山郷新造院の可能性が指摘される神門寺境内廃寺（28）、河内郷新造院の可能性が指摘される天寺平廃寺（71）、沼田郷新造院と考えられている西西郷廃寺（60）などがある。また、注目される墳墓として光明寺3号墓（35）、小坂古墳（38）、賀沢古墓（26）、朝山古墓（39）といった火葬骨を納める石製骨蔵器を持つ墳墓があげられ、神戸川両岸の丘陵地を中心に分布している。

以上のように、出雲平野周辺地域には縄文時代以降数多くの遺跡が築かれており、その中でも神戸川両岸には古墳時代後期以降、地域を代表する古墳、官衙跡、仏教関連遺跡など重要な遺跡が集中している。上塙治横穴墓群も神戸川右岸の丘陵地上に立地する遺跡であり、この地域最大規模の横穴墓群として歴史的に大きく位置づけられるものである。

〔参考文献〕

- 出雲市教育委員会 1995 「小浜山横穴墓群（神門横穴墓群第10支群）」十間川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 出雲市教育委員会 1997 「遺跡が語る古代の出雲」
- 出雲市教育委員会ほか 2009 「築山遺跡Ⅳ」県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市の文化財報告6
- 山陰横穴墓研究会 1997 「第7回山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓—その型式・変遷・地域別—」

第3章 過去の調査

上塩治横穴墓群における最初の調査は昭和 28～30 年（1953～1955）に門脇俊彦氏や池田満雄氏によって実施された分布調査である。遺跡が公に知られるようになったのは昭和 31 年（1956）のことである。門脇氏が『私たちの考古学』第 8 号にこれらの成果を「大井谷横穴群」（第 2・4～6・8・10・12・17 支群※現在の支群名、以下同じ）として紹介され（門脇 1956）、同年池田氏が『出雲市の文化財』第 1 集に「アオゴシ横穴群」（第 3 支群）、「膳ヶ谷横穴群計」（第 19 支群）を含めその概要を記された（池田 1956）。また、昭和 30 年（1955）には美多実氏によるエーゲ横穴群（第 6 支群）の発掘調査も実施されている（門脇 1980）。この時点では 10 カ所（支群）約 35 基が確認されていたのみである。

以後、昭和 37 年（1962）に近藤正氏による工業高校裏支群（第 32 支群）、昭和 53 年（1978）に島根県教育委員会による岸田裏支群（第 17 支群）、昭和 54 年（1979）に同教育委員会による第 22 支群、同年に出雲市教育委員会による半分城跡横穴群（第 27 支群）の発掘調査が実施された（門脇 1980、島根県教育委員会 1986、出雲市教育委員会 1979）。その他、この間に行われた県立出雲商業高校社会部の生徒、島根大学の学生による分布調査、昭和 47 年（1972）頃から島根県教育委員会が数度にわたって実施した分布調査、試掘調査等によって、昭和 55 年（1980）までには丘陵地一帯に 32 カ所 107 穴が知られるようになった。昭和 55 年、これらの調査成果の概要が島根県教育委員会によって『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財報告』に「上塩治横穴墓群」として紹介されたことにより、以後、現在の呼称が使用されることとなる（門脇 1980）。

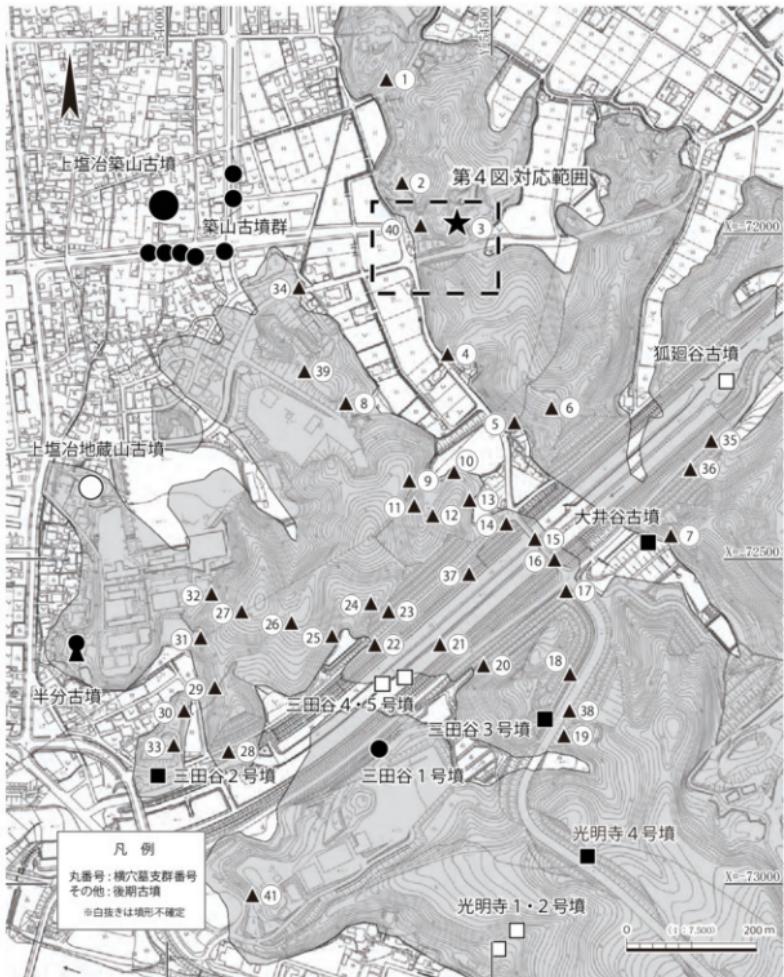
その後、斐伊川放水路建設を始めとする各種開発事業に伴い平成 2 年（1990）以降、平成 16 年（2004）までの 10 年余りの期間に島根県教育委員会と出雲市教育委員会によって第 7・8・12・14～23・28・30・33・35～39 支群の発掘調査が実施されてきた（島根県教育委員会ほか 1995・1997・1998・1999、出雲市教育委員会ほか 2000、出雲市教育委員会 1998・2003・2004・2005）。この時点で 39 カ所 188 基の横穴墓が確認され、神戸川左岸に 12 カ所 123 基が確認されている神門横穴墓群（出雲市教育委員会 1995）の規模を大きく超えることとなった。また、馬具、金銅装大刀、金糸、金製環等の優品も副葬品として出土しており、副葬品から見た階層性の上からも神門横穴墓群の上位に位置づけられることが明らかとなった。その他、横穴墓群の同一丘陵や隣接地より多くの後期古墳が確認されており、その関係性も注目されるところである。

近年においても、本報告の第 3 支群 9 基、同事業に伴う 24～26 年度調査で発見された第 40 支群 36 基（出雲市教育委員会 2016）、その他開発事業に伴う試掘調査で発見された第 41 支群 2 基の横穴墓が発見されており、上塩治横穴墓群は現在 41 カ所 235 基もの横穴墓数となっている（表 1、第 3 図）。

なお、第 3 支群については過去に 10 基の横穴墓が確認されていたが、1980 年までにそのほとんどが消失したとされている（門脇 1980）。消失した横穴墓個々の詳細については明らかでないが、多くが家形妻入天井で、アーチ形天井は少なかったようである（池田 1956）。今回の発掘調査で確認された横穴墓は、全て丘陵中腹以上に位置しており、その位置関係等から、全て新発見の横穴墓と思われる。

表1 上塙冶横穴墓群支群一覧

支群 番号	横穴 墓数	確認される玄室形態	主な埋葬施設	主な出土品	主な 文献等
1	1	整正家形妻入			③
2	2				③
3	19	アーチ形・アーチ系家形	組合式石棺(蓋無) 須恵器床	大刀・鏡・耳環・須恵器ほか	③ 本書
4	2				③
5	2	家形妻入		耳環・須恵器	③
6	5	ドーム形・家形		大刀・鏡・須恵器ほか	③
7	4			宝具状銅製品・須恵器	③⑩
8	7	ドーム形またはアーチ	簡易な石床	銀装大刀・耳環・須恵器ほか	③⑦⑧
9	1	整正家形妻入			③
10	5	平天井?・アーチ系家形?			③
11	2				③
12	11	アーチ形・ドーム形		須恵器	③⑩
13	4				③
14	10	アーチ形・家形妻入		大刀・耳環・玉類・須恵器ほか	③⑩
15	4	アーチ形・家形妻入・箱形?		ヘラ描き土器「各」・鉄製品片ほか	③⑩
16	3	家形妻入		須恵器	③⑩
17	14	整正家形妻入・整正家形平入・アーチ系家形		大刀・耳環・異形銅製品・須恵器ほか	③⑩
18	2	家形妻入・平天井?		玉類・須恵器	③⑩
19	4	アーチ形・アーチ系家形・整正家形妻入		須恵器・銅製品・鉄製品	③⑩
20	5	整正家形妻入・整正家形平入		大刀・須恵器ほか	③⑩
21	10	整正家形妻入		大刀・鏡・金糸・須恵器ほか	③⑩
22	21	整正家形妻入・整正家形平入・アーチ系家形・アーチ形・ドーム形	有縁石床	金銅装大刀・銀装大刀・馬具・金製環・金糸・玉類ほか	③⑩⑪
23	7	アーチ形・アーチ系家形		銀装大刀・鏡・馬具・耳環・銅鏡・玉類ほか	③⑩
24	1	整正家形妻入			③
25	2				③
26	1	整正家形妻入			③
27	4	アーチ形・アーチ系家形		耳環・須恵器	③④
28	2	整正家形妻入		刀子・鉄釘・須恵器	③⑩
29	2	整正家形妻入			③
30	1				③
31	2	家形妻入	組合式家形石棺		③
32	12	アーチ形・アーチ系家形・整正家形妻入	組合式家形石棺 有縁石床	銀装大刀?	③
33	8	アーチ形・アーチ系家形・整正家形妻入	組合式家形石棺 異形家形石棺	金銅装大刀・鉄鏡・耳環・玉類ほか	③⑩
34	6	アーチ形	柱状石材 襖床	耳環・鉄鍊・須恵器	⑥
35	1	整正家形妻入		耳環・玉類・須恵器・土師器ほか	⑩
36	3	整正家形平入・ドーム形		金銅装大刀・馬具・鉄鏡・耳環ほか	⑩
37	1	アーチ形		鉄釘はか	⑩
38	3	整正家形妻入		須恵器・銅製品・鉄製品土師器	⑩
39	3	アーチ形		須恵器・大刀	⑩
40	36	アーチ形・家形・平天井	削抜式小形家形石棺 組合式石棺(蓋無) 柱状石材 石製棺台 襖床 須恵器床	大刀・馬具・耳環・玉類・金銅製多様 ほか	⑪
41	2			須恵器	平成26年度 市試掘調査



第3図 上塙治横穴墓群と周辺の後期古墳分布図

〔参考文献〕

- ① 池田満雄 1956 「上塙治地区の横穴」『出雲市文化財調査報告』第1集 出雲市教育委員会
- ② 門脇俊彦 1956 「出雲国大井谷横穴群」『私たちの考古学』第8号 考古学研究会

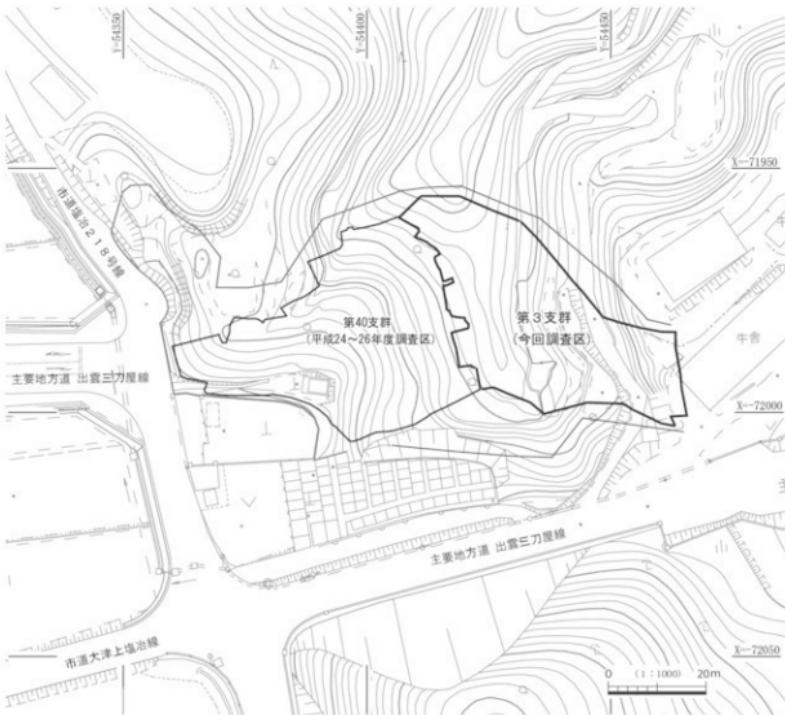
- ③ 門脇俊彦 1980「上塙治横穴墓群」「上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」鳥根県教育委員会ほか
- ④ 出雲市教育委員会 1979「中国電力高圧送電線鉄塔工事に伴う半分城跡横穴墓群発掘調査報告」
- ⑤ 出雲市教育委員会 1995「小浜山横穴墓群（神門横穴墓群第10支群）」十間川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- ⑥ 出雲市教育委員会 1998「上塙治横穴墓群第34支群発掘調査報告書」
- ⑦ 出雲市教育委員会 2003「上塙治横穴墓群第8支群」出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- ⑧ 出雲市教育委員会 2004「上塙治横穴墓群第33支群」出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- ⑨ 出雲市教育委員会 2005「中野美保遺跡 上塙治横穴墓群第39支群 保知石遺跡」出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
- ⑩ 出雲市教育委員会ほか 2000「上塙治横穴墓群第17・18・19・38支群 大井谷Ⅲ遺跡 石切場跡1・2 三田谷3号墳」斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書I
- ⑪ 出雲市教育委員会ほか 2016「上塙治横穴墓群第40支群」県道出雲三刀屋線上塙治工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I
- ⑫ 鳥根県教育委員会 1986「鳥根県埋蔵文化財調査報告書」第13集
- ⑬ 鳥根県教育委員会ほか 1995「上塙治横穴墓群第20・21支群」斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書II
- ⑭ 鳥根県教育委員会ほか 1997「大井谷石切場跡 上塙治横穴墓群第14支群 上塙治横穴墓群第15支群 上塙治横穴墓群第16支群」斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書III
- ⑮ 鳥根県教育委員会ほか 1998「上沢Ⅱ遺跡 狐廻谷古墳 大井谷城跡 上塙治横穴墓群（第7・12・22・23・33・35・36・37支群）」斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書IV
- ⑯ 鳥根県教育委員会ほか 1999「上塙治横穴墓群第28支群」斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書V

第4章 調査の成果

第1節 調査の概要

1 調査方法の概要（第4図）

調査地は、砂岩系の布志名層を基盤層とする丘陵地である。平成24～26年度に発掘調査を実施した上塙治横穴墓群第40支群の範囲を除く、丘陵尾根及び東側斜面を対象としている。対象事業地は約1,900 m²だが、事業地の南端は、調査時点で既に本来の地形が大きく破壊されていたため、地形の残存していた範囲約1,350 m²を全面調査の対象とした。



第4図 調査区周辺図



第5図 遺構配置図1



また、丘陵の尾根部分については上塩治横穴墓群第40支群と第3支群、両支群に係る調査地であるが、便宜上、第3支群として調査・報告を行うこととした。

調査は、基本的に重機と人力の併用による表土掘削を行い、その後は人力による遺構、遺物の確認を行って調査を進めた。

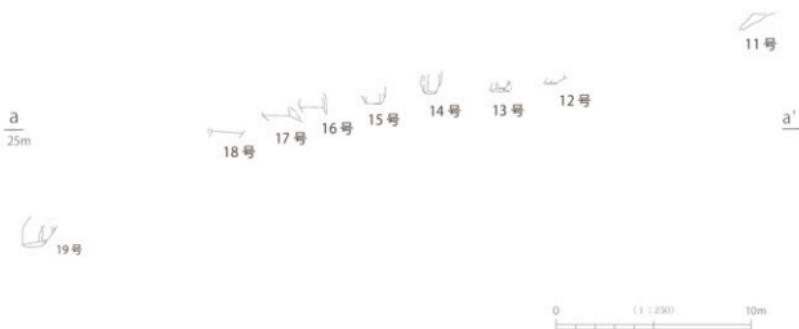
2 遺構の概要（第5・6図）

調査によって、古墳時代の横穴墓9基（11～19号横穴墓）、時期不明の土坑1基（SK1）、横坑群（横坑1～3）が確認された。なお、横穴墓の名称については、既に破壊されている横穴墓10基（第3章参照）から続く番号を付した。

3 遺物の概要

各横穴墓からは須恵器をはじめとした数多くの副葬品が出土した。須恵器以外の副葬品としては、3号横穴墓出土の土師器、耳環、鉄鎌、刀子、14号横穴墓出土の大刀、刀子、15号横穴墓出土の耳環、鉄鎌、刀子、鉄斧があげられる。

また、遺構外遺物として、弥生土器、古墳時代の須恵器、円筒埴輪等が確認されている。このうちの円筒埴輪については、平成24～26年度調査区（第40支群）を含め丘陵の広範囲から小片として出土している。残存していなかったが、本来は丘陵尾根上に後背墳丘もしくは古墳が存在した可能性がある。



第6図 遺構配置図2

第2節 横穴墓の調査

横穴墓は丘陵東側斜面に9基(11～19号横穴墓)が確認された。既に消失していると思われる10基の横穴墓(1～10号横穴墓・門脇1980)を含めると少なくとも19基の横穴墓が存在していたものと思われる。調査後の地形は、南西向き斜面と東北東向き斜面からなる小さな谷を形成するものであった。横穴墓が掘削された基盤層は、「布志名層」と呼ばれる海成堆積の細粒砂岩・シルト岩を主体とした地層である(鹿野・竹内1991)。

今回調査した横穴墓の多くは天井部が崩落していたが、残存部の状況からアーチ形を中心とする玄室形態であることが確認された。横穴墓の時期については、須恵器編年大谷4期を中心として大谷3期から5期までの遺物が確認された。上塙治横穴墓群の中でも最古段階から築造され、比較的早期にその築造を終えた支群であったようである。



第7図 横穴墓配置図

また、横穴墓群は、1つの谷に築造されていても更に数穴ごとの小支群から構成されることが多い。上塙治横穴墓群第3支群においても、その立地状況から少なくとも現状で3つの小単位に分けることが可能である。本書では、南東向き斜面標高約30mの高所に単独で立地する11号横穴墓をA群、東北東向き斜面標高24.5～27.5m前後に立地する12～18号横穴墓をB群、東向き斜面標高約19mに立地する19号横穴墓をC群として取り扱う（第7図）。すでに破壊された10基の横穴墓は丘陵南寄りの麓付近に立地していたとされ、19号横穴墓と一体的な小群（C群）、または更に南方にD群とすべき小群を形成していたものと思われる。

以下に個々の横穴墓についての詳細を述べる。

1 横穴墓群A群

調査区北部、南西向き斜面標高約30mに築かれた11号横穴墓である。現状では1基のみの単独築造として確認される。本来は北東方向に同一の群をなす横穴墓が存在していた可能性があるが、調査区内においては確認できず、調査区外も本来の地形が残存していないようである。

（1）11号横穴墓（第8・9図、図版1・12）

立 地 標高約30m（玄門を基準とする。以下同じ。）の南東に向く丘陵斜面に位置し、今回の発掘調査区内において、最も北寄りの高所で確認された横穴墓となる。

墓道・閉塞部（第8図）E-30°～S方向に開口し、床面幅0.35～0.65m、残存長1.75mを測る。閉塞部に幅15cm、深さ7cm前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。閉塞石は無かった。

玄 門（第8図）床面幅0.4～0.5m、長さ0.5m、残存高0.4mを測る。天井部は残存していない。

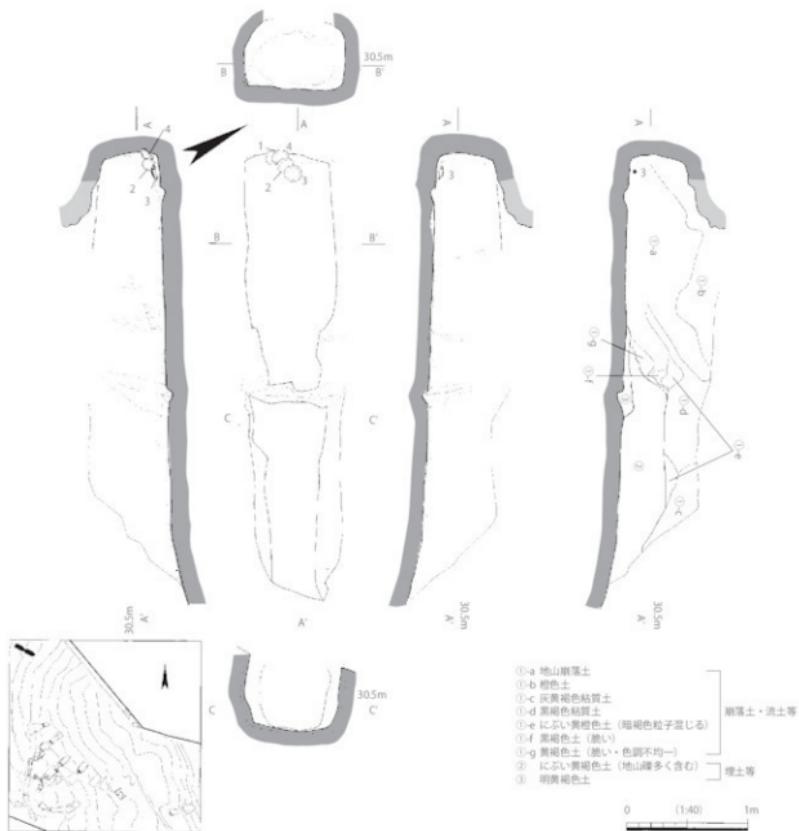
玄 室（第8図）平面形は幅0.7～0.75m、奥行1.45mの長方形である。墓道から玄室までの残存長は3.7mとなる。袖部は両袖とも非常に狭い。天井部の多くは残存していないが、残存部の状況から高さ0.5～0.6m程度のアーチ形の断面形だったものと考えられる。非常に小型の玄室形態である。また、玄室奥壁と側壁の一部には加工痕が残っており、基本的には側壁袖付近で奥から前方向、側壁中ほどで前から奥方向、奥壁下方で上から下方向に削った丸刃削痕（山陰横穴墓研究会1995）が残る。

土層堆積状況（第8図）①層は崩落土、流土等である。②層は閉塞埋土等、③層は閉塞板設置時の埋土等であろうか。初葬後の追葬や盜掘の痕跡は明確ではないが、②層下面において玄室内への再進入があった可能性が残る。

遺物出土状況（第8・9図）玄室内奥壁沿いの床面付近で須恵器蓋杯が2セット（1～4）まとまって出土した。2・3は天井部の崩落等によるものか若干の移動が認められるが、1・4は口縁を下に向けて重ね、床面上から奥壁に立てかけるように出土しており、埋葬時の配置を残しているものと思われる。いずれも土器枕として使用されたものだろう。

出土遺物（第9図、図版12）1～4は玄室内出土の須恵器蓋杯で、1・2が杯蓋、3・4が杯身である。

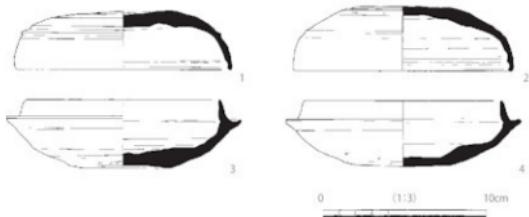
1・3は外面に丁寧なヘラケズリが、2・4は粗雑なヘラケズリが施される。杯蓋口縁はいずれも緩



第8図 11号横穴墓遺構図 ●は土器)

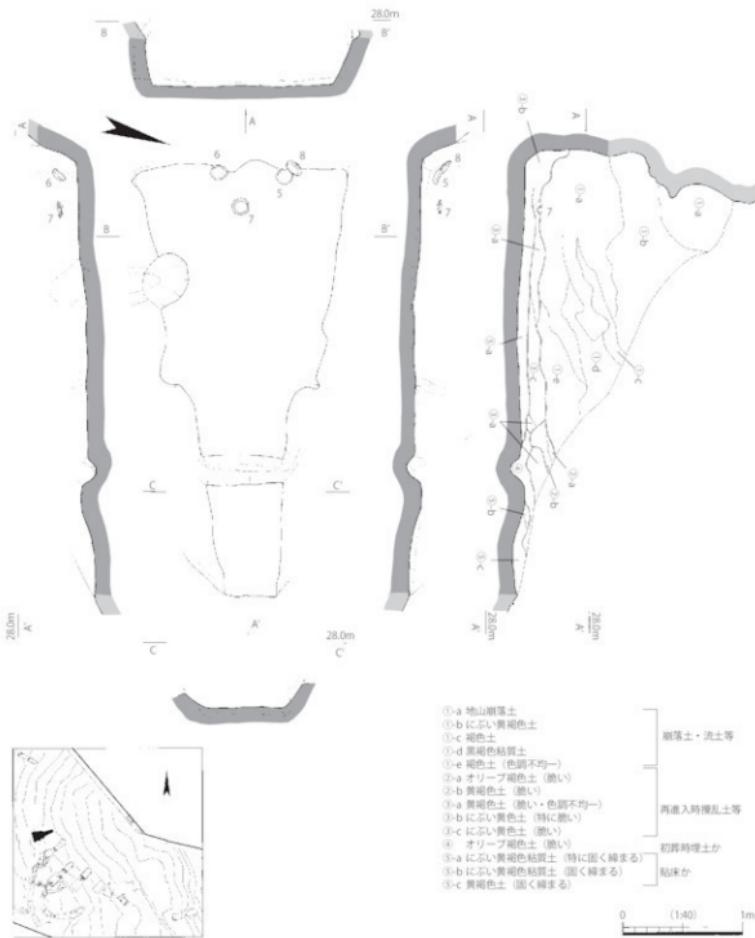
い段状に仕上げている。また、1と3は歪みも含めて正確に組み合う。出土状態とは合致しないが、1と3、2と4が本来のセット関係であると考えられる。

時期 玄室内出土の須恵器蓋杯は、2・4のヘラケズリにやや新しい特徴が見られる



第9図 11号横穴墓遺物実測図

ものの、基本的な形態は全て大谷3期の特徴を示す。よって、横穴墓の築造・埋葬も大谷3期の中で終了しているものと考えられる。今回の調査で確認された中で、最も古い横穴墓である。

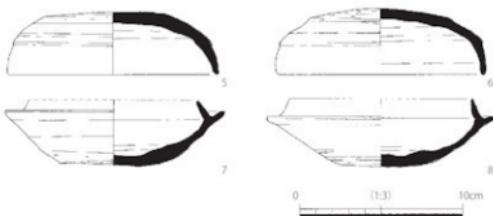


第10図 12号横穴墓遺構図

2 横穴墓群B群

A群（11号横穴墓）の南方、北北東向き斜面標高24.5～27.5m前後に築かれた12～18号横穴墓からなる一群である。相対的にA群より低い標高に位置する。18号横穴墓の南東は大きく地形が破壊

されており、確認した横穴墓は7基のみであるが、本来はさらに多くの横穴墓が存在した可能性がある。



第11図 12号横穴墓遺物実測図

（1）12号横穴墓（第10・11図、図版2・12）

立地 標高約27.5mの北北東に向く丘陵斜面、11号横穴墓の南方約12mに位置する。B群の北端にあたる横穴墓である。

墓道・閉塞部（第10図） N-72°-E方向に開口し、床面幅0.45～0.65m、残存長1.2mを測る。閉塞部には幅25cm、深さ10cm前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。閉塞石は無かった。

玄門（第10図） 床面幅0.7～0.9m、長さ0.55m、残存高0.45mを測る。天井部は残存していない。

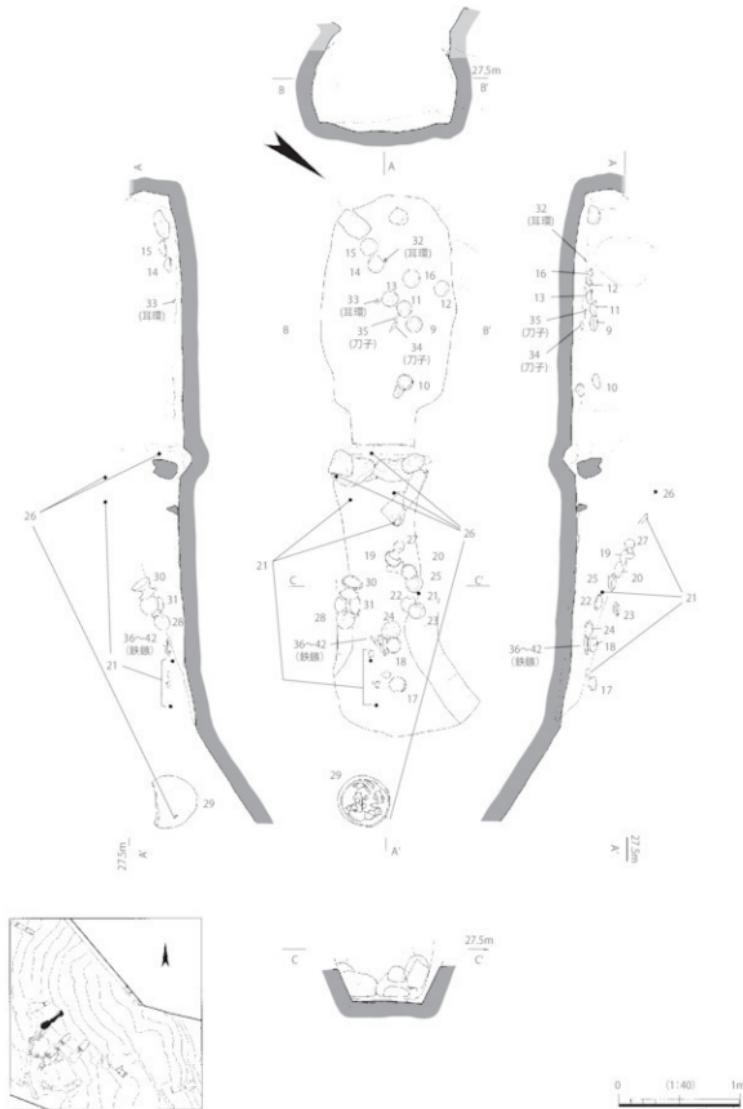
玄室（第10図） 平面形は幅1.3～1.8m、奥行1.85mの奥が広がる台形である。墓道から玄室までの残存長は3.6mとなる。天井部の多くは残存していないが、残存部の状況からアーチ形の断面だったと考えられる。残存高0.5m。また、左側壁に小穴が1カ所見られるが、横穴墓の埋葬に伴うものではないと思われる。13号横穴墓の小穴に繋がるようである。

土層堆積状況（第10図） ①層は地山崩落土・流土等、②・③層は再進入時の攪乱土等である。②層下面と③層下面においてそれぞれ再掘削面が確認できるが、②層下面については再閉塞時の閉塞板に伴う溝である可能性も考えられる。また、①層下面においても再進入が行われた可能性が残るが、明確でない。④層は初葬時の埋土等であろうか。⑤層は貼床と思われる。以上の状況から、初葬後、最低1回の追葬もしくは盜掘等に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。

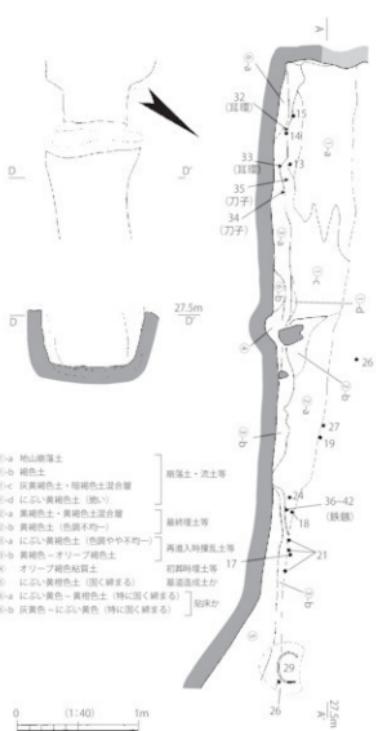
遺物出土状況（第10・11図） 玄室内奥壁付近の③層中より須恵器蓋杯が2セット（5～8）出土した。いずれも本来の副葬時の状態は留めていないが、土器枕として使用されていた可能性がある。

出土遺物（第11図、図版12） 5～8は玄室内出土の須恵器蓋杯で、5・6が杯蓋、7・8が杯身である。いずれも外面に粗雑なヘラケズリが施されるが、5・7は6・8よりも丁寧なケズリとなっている。5と7、6と8がセットとなるものであろうか。

時期 玄室内出土の須恵器蓋杯はいずれも大谷4期の特徴を示す。よって、横穴墓の築造・埋葬も大谷4期の中で終了しているものと考えられる。



第12図 13号横穴墓遺構図 1



第13図 13号横穴墓遺構図2
(●は土器 ▲は金属製品)

閉塞石（第12・13図）割石・自然石が閉塞部を中心に7点出土している。玄室の転石も含めると10点となる。石の移動も認められるが、基本的には最下段は閉塞部溝に平行して設置されており、閉塞板の押さえ石であったと思われる。

土層堆積状況（第13図）①層は地山崩落土・流土等である。②層は最終埋土で、大量の遺物が出土している。③層は再進入時の擾乱土等で、③層下面が再進入に伴う掘削面と思われる。④層は初葬時の埋土であろうか。⑤層は墓道前方の造成土と思われ、その上面において底部穿孔がなされた甕が据え置かれていた。初葬時の造成か追葬時の造成かは断定できない。⑥層は玄室の貼床と思われる固く締まった土層である。以上の状況から、最低1回の追葬等に伴う玄室への再進入があったものと考えられる。後世の盗掘等は受けていない。

遺物出土状況（第12～16図）玄室内③層上面付近の①層中から須恵器杯蓋5点（9～13）、杯身3点（14～16）、耳環2点（32・33）、刀子2点（34・35）が出土している。乱雑な出土状況であるが、須恵器蓋

（2） 13号横穴墓

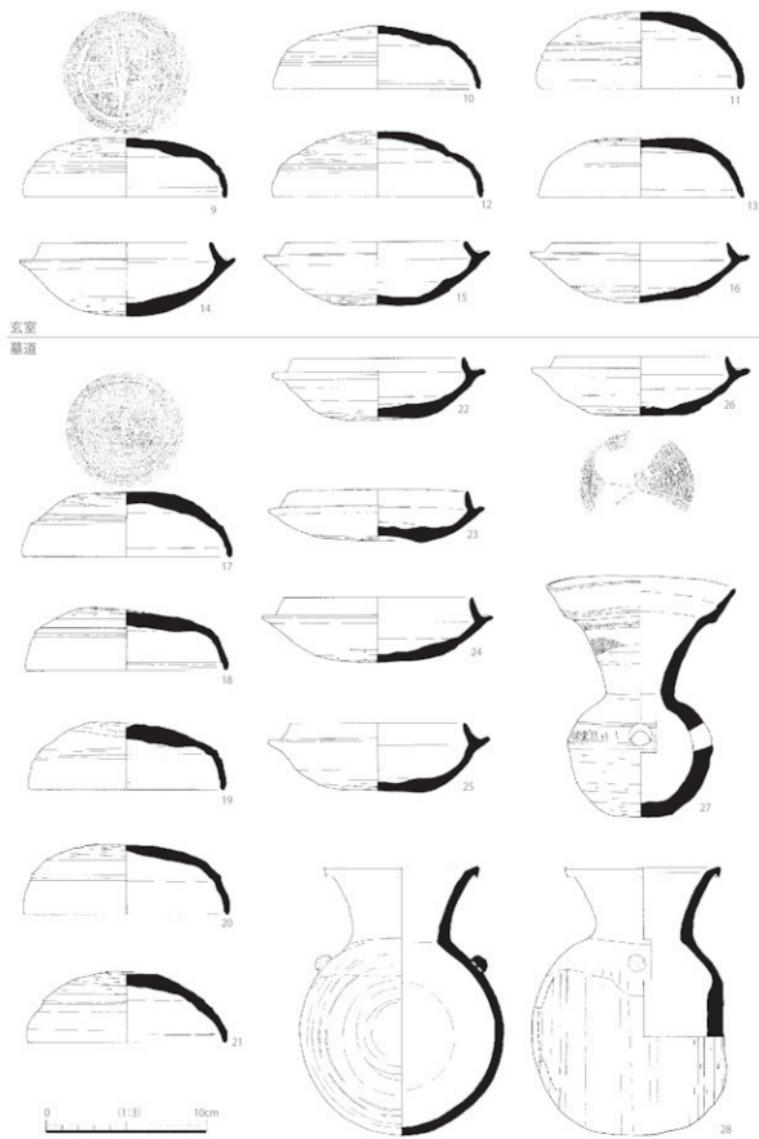
（第12～16図、図版3・4・12～14・19・20）

立地 12号横穴墓の南東に隣接して存在し、標高約27mと12号横穴墓よりやや低い。

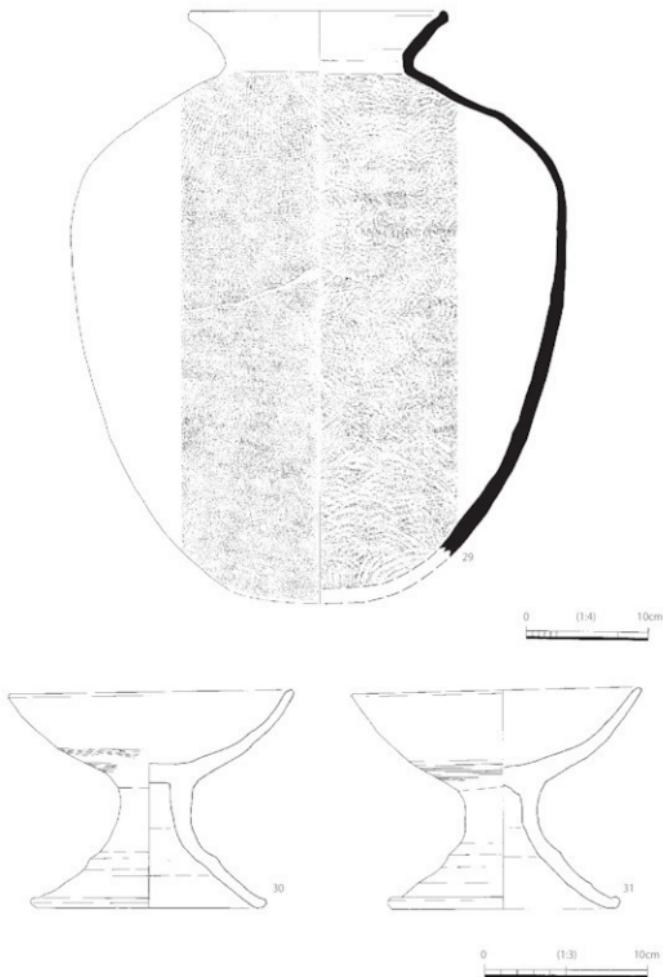
墓道・閉塞部（第12・13図）N-50°-E方向に開口し、現状で床面幅0.45m～0.8m、残存長2.4mを測る。墓道前方にはさらに0.6m以上の平坦面を形成する造成土が確認されており、少なくとも最終埋葬時には長さ3m以上の墓道となっていたものと思われる。閉塞部には幅20cm、深さ10cm前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。

玄門（第12・13図）床面幅0.5m、長さ0.3m、残存高0.45mを測る。天井部は残存していない。

玄室（第12・13図）平面形は幅0.8～1.05m、奥行1.75mのやや丸みを帯びた長方形である。墓道から玄室までの残存長は4.45mとなる。天井部の多くは残存していないが、残存部の状況から高さ0.8m前後のアーチ形の断面だったと考えられる。残存高0.65m。玄室内には数点の転石が見られるが、閉塞石の転石であろう。また、右側壁に小穴が1カ所見られるが、横穴墓の埋葬に伴うものではないと思われる。12号横穴墓の小穴に繋がるようである。



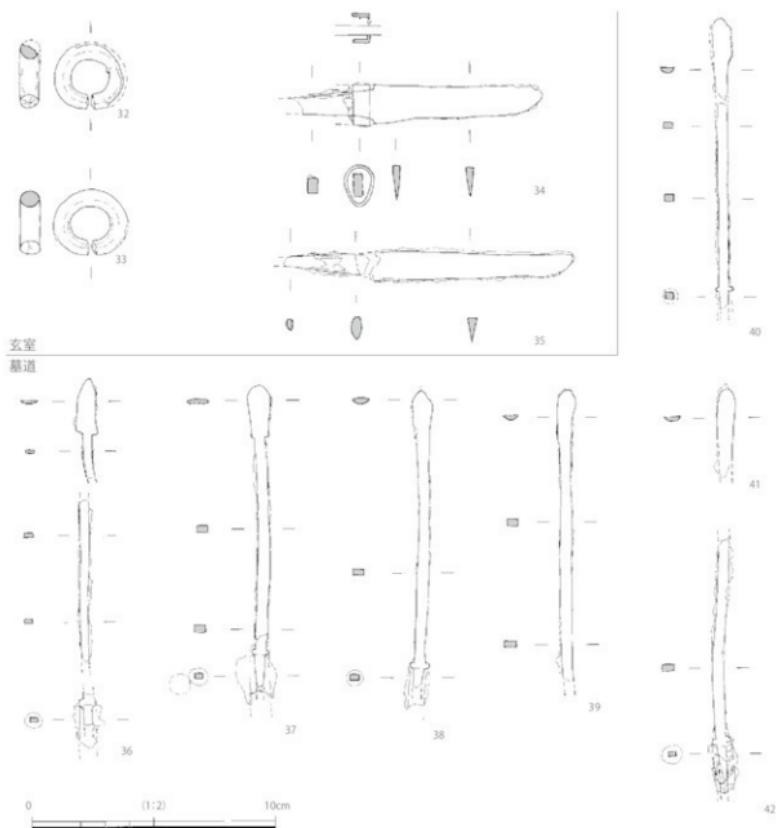
第14図 13号横穴墓遺物実測図1



第15図 13号横穴墓遺物実測図2

杯は全て③層上面付近で面的に出土しており、最終埋葬時の配置をある程度保っているものと思われる。一方、金属製品については、基本的に③層中に不規則に混入しており、全て最終埋葬以前の副葬品と考えられる。

幕道上からは、幕道前方造成土⑤層上面より底部穿孔された須恵器壺1点(29)が正位置に据え置



第16図 13号横穴墓遺物実測図3

かれた状態で出土したほか、②層を中心須恵器杯蓋5点(17~21)、杯身5点(22~25)、甌1点(27)、提瓶1点(28)、土師器高杯2点(30・31)、鉄鎌6点以上(36~42)が出土している。

墓道上②層中出土遺物群については、その大半がほぼ完形で面的な出土状況を示す。土層観察においては遺物出土面に対応する土層面は確認できなかったが、遺物出土面付近で最終埋土と最終埋土の流土とに分かれる可能性もある。また、遺物群中には閉塞石背面からの接合資料が確認される須恵器(26)があるほか、本来玄室内に副葬されていたであろう鉄鎌(36~42)も存在していることから、玄室内から抜き出された資料を含むことが想定できる。再進入時に副葬品の一部を抜き出し、最終埋土後または埋土途中において、抜き出した副葬品を含む遺物群を墓道上に集積したものであろう。な

お、墓道前方⑤層上面出土の須恵器壺（29）については、これらの遺物群の集積以前に配置されたものである。初葬時の埋葬に伴う可能性がある。

出土遺物（14～16図、図版12～14・19・20）9～16は玄室内出土の須恵器蓋杯である。いずれも外面に粗雑なヘラケズリが施される。杯蓋9の天井部には格子状のヘラ記号が確認できる。

32～35は玄室内出土の金属製品である。32・33は銅芯銀板貼の銀環で、断面円形に近く、開き端には銀板を折り込んだシワの痕跡が観察できる。34・35は刀子である。34は茎端部を欠くが、両側、鉄製の鍔、柄木の一部が確認できる。鍔は筒状の一方を塞ぎ、茎を挿入する孔を有するタイプのものである。35は茎端部と関部をわずかに欠き、鞘木と柄木の一部が確認できる。

17～29は墓道上出土の須恵器である。17～26は蓋杯で、基本的には外面に粗雑なヘラケズリが施されるものであるが、19・21・26以外は玄室内出土の蓋杯と比べやや丁寧なヘラケズリ。26は周辺ヘラケズリとなっている。杯蓋17の天井部には「|」のヘラ記号が、杯身26の底部には「×」のヘラ記号が確認される。27は趣で、頸部に波状文後ヨコナデを、体部に刺突文を施す。28は提瓶で、肩部に船状の把手を持ち、側面形態は背面（製作時の底）に明確な平坦面を持つ。また、体部外面の調整はナデを施し、背面にヘラケズリを施すやや特異な特徴を示す。29は壺で、底部穿孔が施されている。

30・31は墓道上出土の土師器杯である。いずれも脚部に段を持ち、杯部は内湾しながら大きく開くものである。脚部の段が特徴的であるが、近隣の築山古墳群4号墳の調査（出雲市教育委員会2009）において、大谷3～5期の須恵器とともに同様な形態の土師器高杯が出土している。

36～42は墓道上出土の鉄鎌で、全て長頭鎌である。36は直角闊で長三角形の鎌身部を持つもの、37は直角闊で柳葉形の刃部を持つもの、38～41は無闊で断面片丸造りの柳葉形鎌身部を持つもの、42は鎌身部を欠くものである。各形態において棘状闊、矢柄が確認できる。また、37には42に接合する矢柄の一部が付着し、40と41の鎌身部が向きをそろえて融着していた。本来これらの鉄鎌が東ねられて副葬されていたことが推察される。

時期 須恵器蓋杯は全て大谷4期の特徴を示し、その他の出土須恵器も大谷4期の範疇で捉えられる。よって、横穴墓の築造、埋葬も大谷4期の中で終了しているものと考えられる。

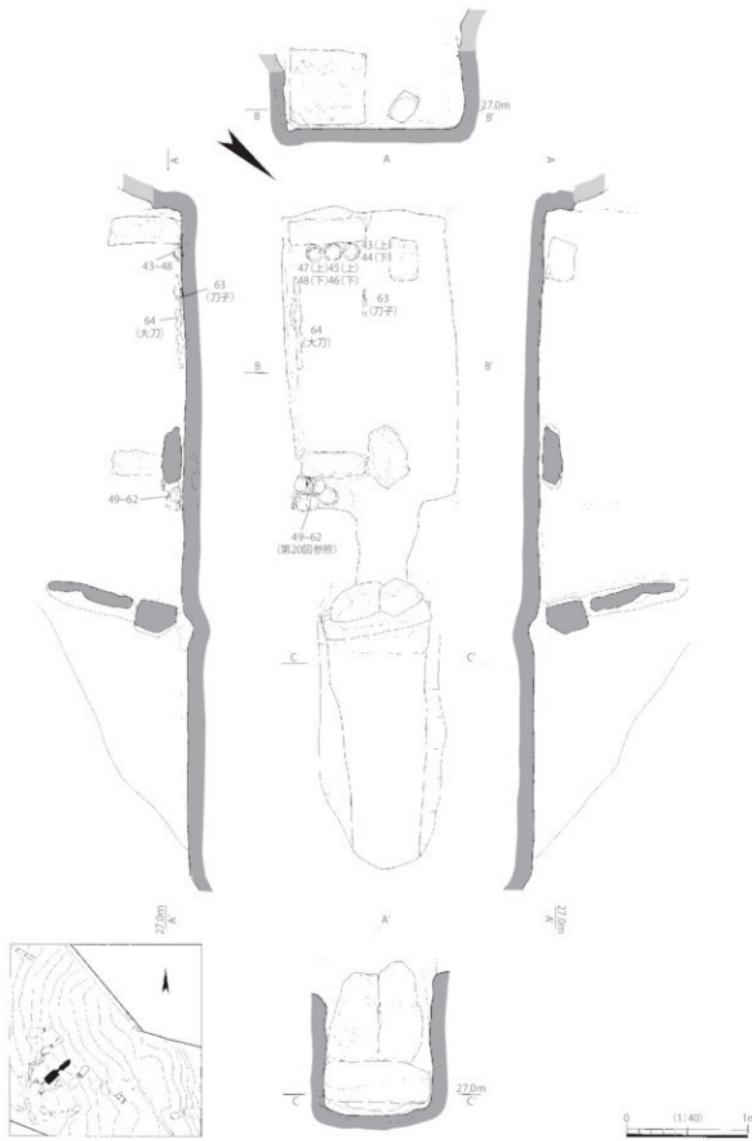
（3）14号横穴墓（第17～21図、図版5～7・14・15・19）

立地 13号横穴墓の南東に隣接して存在し、標高も13号横穴墓とほぼ同一である。

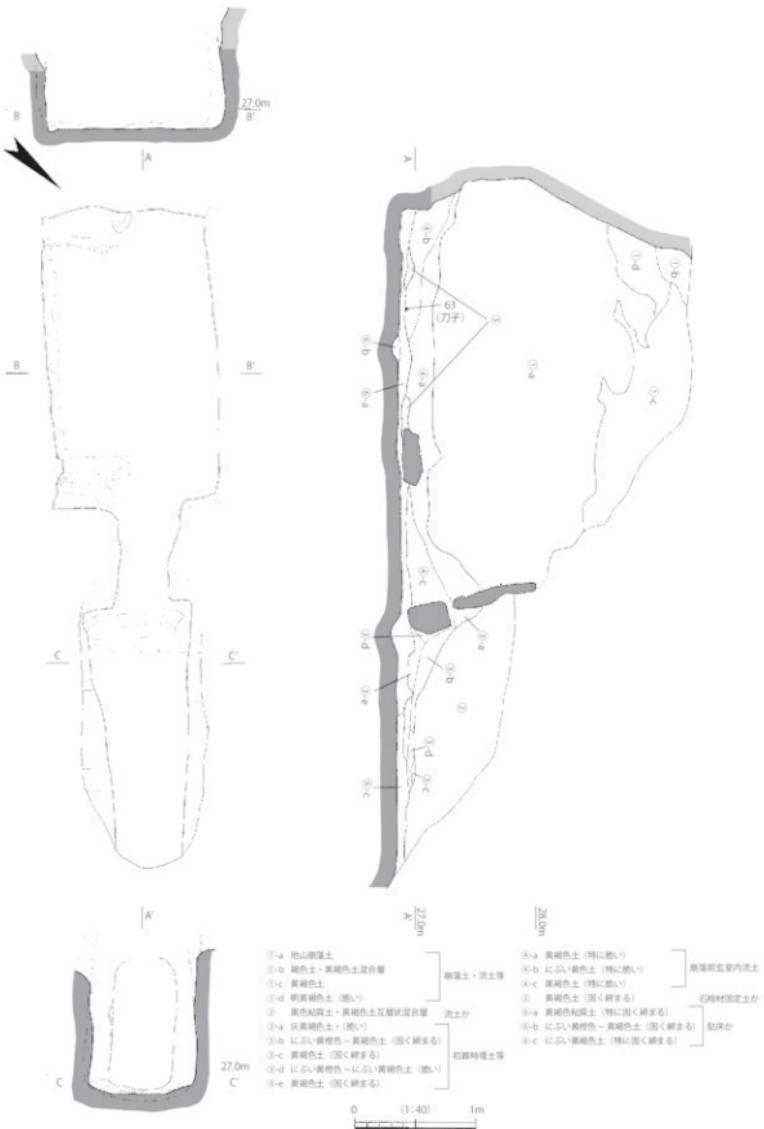
墓道・閉塞部（第17・18図）N-50°-E方向に開口し、床面幅0.55m～0.8m、残存長2.2mを測る。閉塞部には幅35cm、深さ10cm前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。

玄門（第17・18図）床面幅0.4～0.55m、長さ0.8m、残存高1.05mを測る。天井部は残存していないが、残存部の形状から高さ1.1m前後のアーチ形の断面形だったと考えられる。

玄室（第17・18図）平面形は幅1.35m、奥行2.5mの長方形である。墓道から玄室までの残存長は5.5mとなる。天井部は残存しておらず、断面形も不明である。残存高0.8m。玄室左側壁に沿って



第17図 14号横穴墓遺構図1



第18図 14号横穴墓遺構図2 (▲は金属製品)

組合式石棺が確認されている。その他、石棺の両側石下と左袖部の床面に深さ15cm前後の掘り込みが、左側壁沿いに幅10cm、深さ3cm程度の溝が設けられている。

石棺（第19図） 組合式石棺とした埋葬施設は床石・奥石・蓋石を持たないものであるが、奥石に相当する位置には溝が掘り込まれており、木製の奥壁が存在したものと考えられるほか、設置後の両側石の高さがほぼ一致することから、木製の蓋も存在したものと推定し、石棺として報告する。木製の蓋を使用した石棺の存在については、隣接する上塙治横穴墓群第40支群の調査においても複数確認されている（出雲市教育委員会2016）。

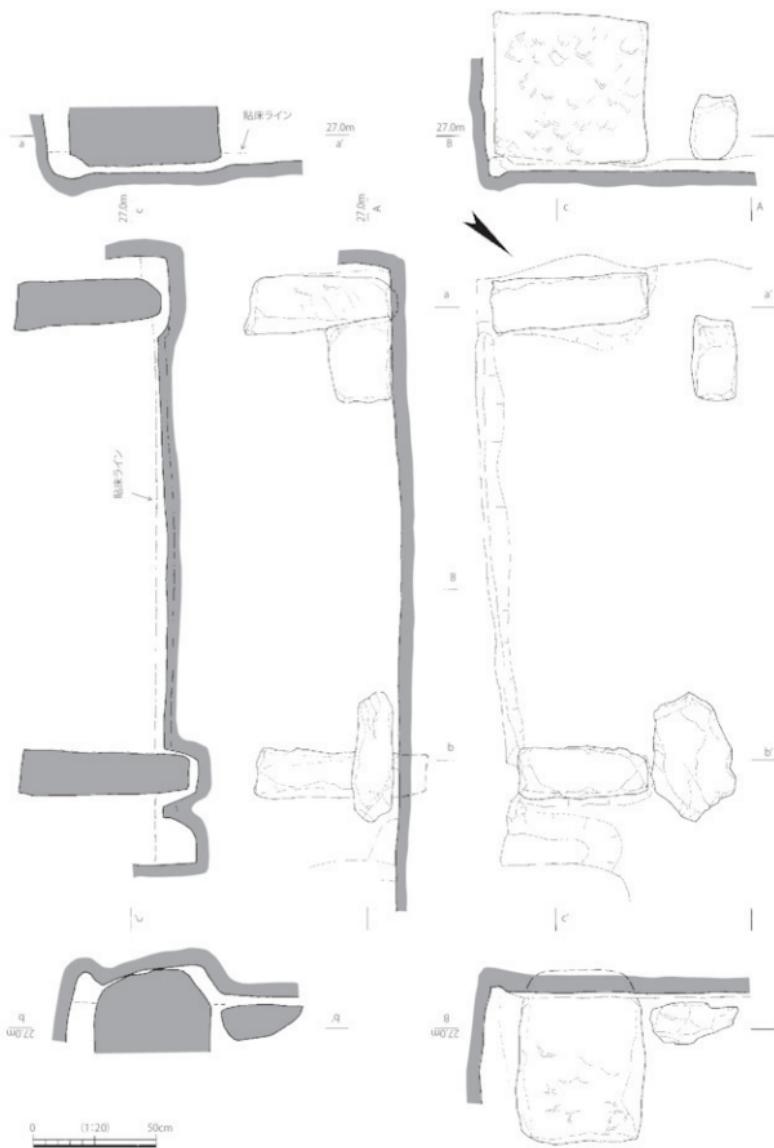
組合式石棺に使用された石は側石2点、前石2点である。各石の石材は両側石が凝灰質砂岩、右前石が砂岩、左前石が玄武岩である。各石の法量は左側石で高さ70cm×幅52cm×厚さ18cm、右側石で高さ63cm×幅63cm×厚さ20cm、左前石で高さ16cm×幅52cm×厚さ35cm、右前石で高さ24cm×幅35cm×厚さ17cmを測る。側石については、玄室床面に掘形を掘削し、貼床土と同様の上でその側石基部を埋め込んで設置している。玄室左袖部の床面掘り込みも、本来は側石設置のための掘形であったと思われるが、掘り直して設置位置を調整したものであろう。埋葬時には既に埋められていたものと思われる。貼床面を棺の下端とし、前石端までを幅として計測すると、石棺全体の法量は長さ約2.1m（内寸約1.75m）×幅1m（内寸約0.8m）×高さ約0.55mを測る。

閉塞石（第17図） 閉塞部には凝灰質砂岩の閉塞石が良好な状態で残存していた。最下部に主軸と直交した位置に長さ90cm×幅25cm×高さ35cm程度の角柱状に加工した石材を敷き、その直上に板状に加工した石材を2枚並べて設置している。板石の法量は、左側で長さ40cm×幅10cm×高さ80cm程度、右側で長さ20cm×幅12cm×高さ90cmを測る。また、最下部の石材は床面から浮いているが、玄室から続く貼床と考えられる土の直上から設置されており、左右の側面も墓道側壁に接している。初葬時からの移動を示すものではない。

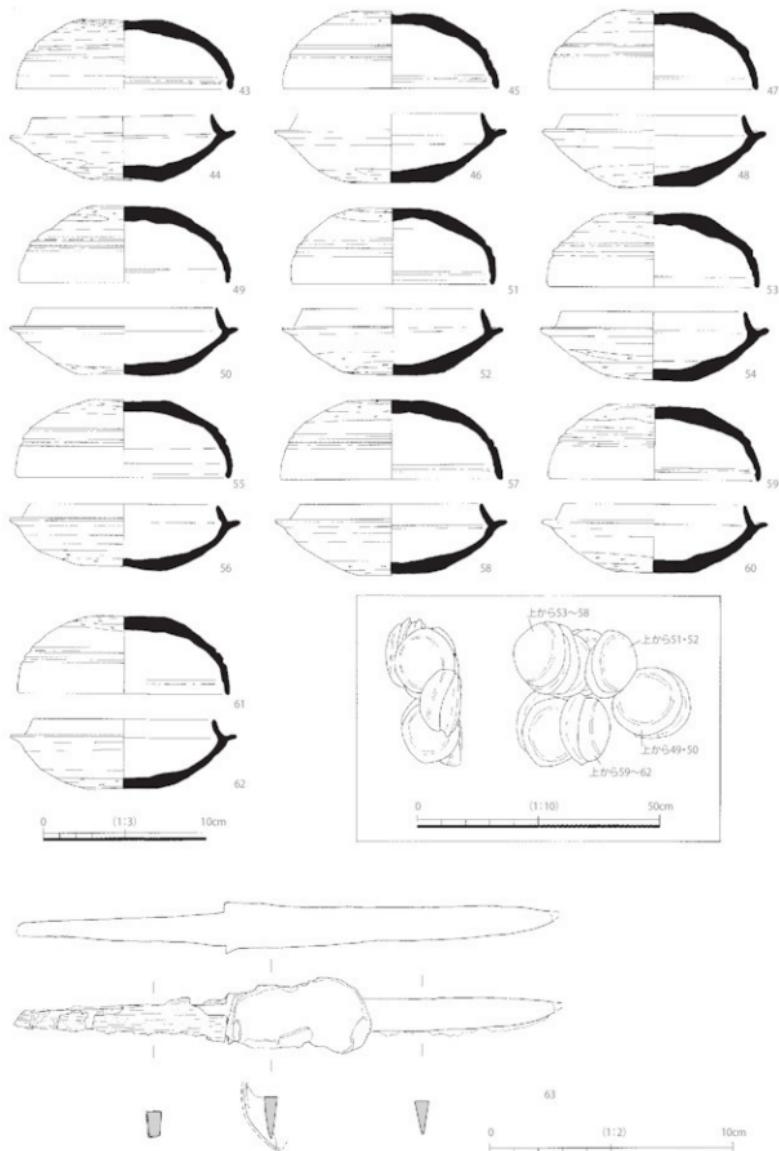
土層堆積状況（第18図） ①層は玄室内崩落土及び崩落後の流土である。②層は褐色土と黒褐色粘質土が互層状に混合する特徴的な土層である。これも墓上からの流土等であろうか。③層は初葬時の埋土等と考えられるものである。③層上面においては玄室内への再進入を試みた形跡があり、その延長線上の閉塞石に打痕も見られるが、再進入には至らなかったようである。④層は天井崩落前の玄室内流土等である。⑤層は石棺前石付近にのみ確認される縮まった土質の土層で、石棺前石を固定するための盛土であろうか。⑥層は特に固く縮まったく土質であり、副葬品・閉塞石共に全てこの上面から原位置を保った状態で検出されている。貼床と考えられる。以上の状況から、初葬後、墓道においては再掘削の形跡が確認されるものの、玄室内への再進入は為されていないものと思われる。玄室内は追葬による攪乱も受けていないと考えられ、初葬時の状況を保つ横穴墓と思われる。

遺物出土状況（第17・18・20・21図） 出土遺物は全て玄室内の貼床面⑥層直上付近から確認されている。墓道上からは遺物は出土していない。

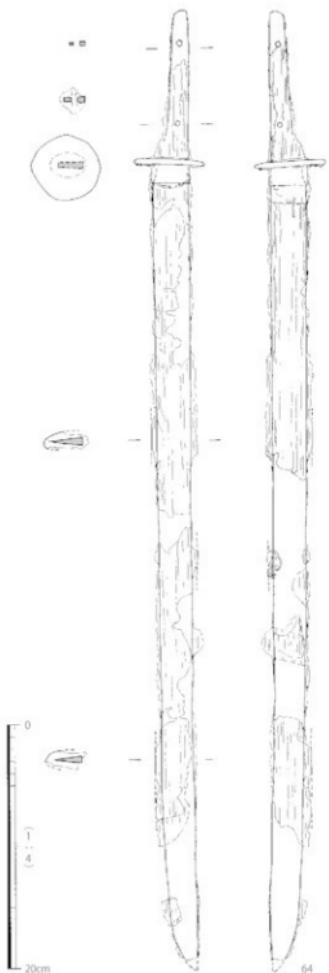
石棺内には遺物配置・石棺幅の広狭から見て玄室奥壁側頭位で遺体が埋葬されていたと思われるが、その頭部にあたる位置に須恵器蓋杯3セット（43～48）が整然と並び、右腕沿いにあたる位置に大刀1振（64）が、左肩沿いにあたる位置にやや大形の刀子（63）が配置されていた。なお、須恵器蓋杯



第19図 14号横穴墓石棺復元図



第20図 14号横穴墓遺物実測図1



第21図 14号横穴墓遺物実測図2

され、木製鞘口の捺えがあったものと思われる。

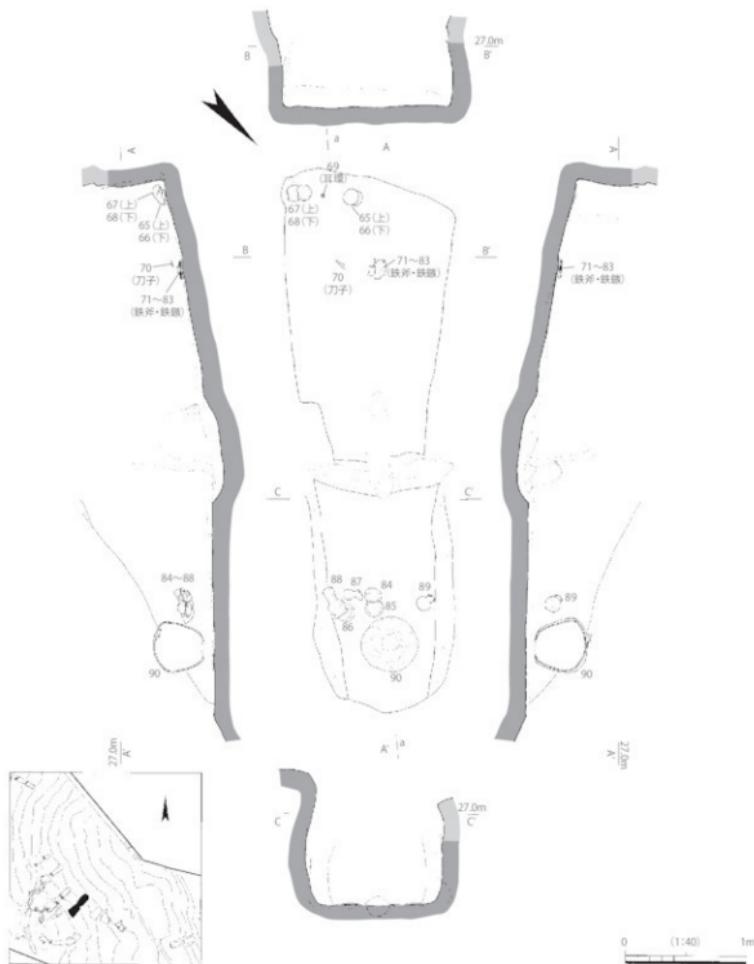
時期 玄室内出土須恵器蓋杯は全て大谷4期の特徴を示す。よって、横穴墓の築造、埋葬も大谷4期の中で終了しているものと考えられる。

はその全てが身を下に、蓋を上にいずれも口縁部側を下に伏せて重ねた状態で出土しており、土器枕と考えられる。大刀・刀子はいずれも刃部を遺体側に、柄部を頭位方向に向けて出土している。

石棺外においては、玄室左袖部に須恵器蓋杯が7セット(49~62)積み重ねて集積された状態で出土している。全て上から杯蓋→杯身→杯蓋→杯身の順番に口縁部側を下に伏せて積み重ねて集積されており、そのセット関係も良好に確認できる。葬送儀礼に使用した土器を閉塞前に集積して片付けたものであろうか。

出土遺物(第20・21図、図版14・15・19) 43~62は玄室内出土の須恵器蓋杯である。それぞれ遺物番号順にセットとして出土したものである。いずれも外面に粗雑なヘラケズリが施されるが、杯蓋53・57、杯身54ではやや丁寧なケズリとなっている。

63・64は玄室内出土の金属製品である。63は両闇の刀子である。鞘木と柄木の一部が残存している。切先をわずかに欠くが、刃部残存長13.6cm、茎部長8.6cm、全残存長22.2cmを測る。欠損部を復元すると、全長22.5cm程度となるやや大方品である。鞘木には一部漆状の膜が残存しており、少なくとも3層の漆状塗膜が存在したことが観察できる。64は片闇の大刀である。鉄製の锷・鍔が残存しているほか、目釘穴2孔。鞘木と柄木の一部が確認できる。切先をわずかに欠くが、刃部残存長65cm、茎部長12.5cm、全残存長77.5cmを測る。欠損部を復元すると、全長78~78.5cm程度となると思われる。锷は円形に近い倒卵形の平面形をした鉄製無窓锷である。鞘木には一部漆状の膜が残存しているほか、推定される柄尻端から3cmの部分に明確な境界が観察

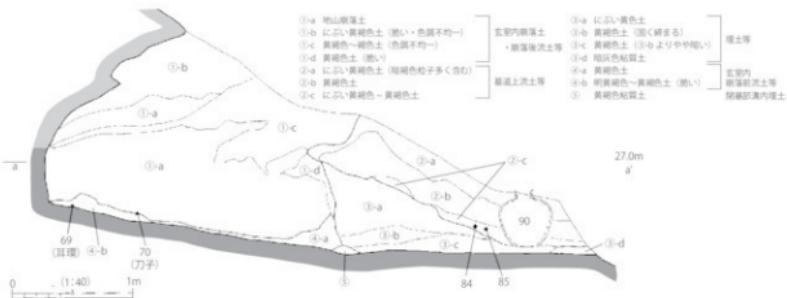


第22図 15号横穴墓遺構図1

(4) 15号横穴墓 (第22～26図、図版8・15・16・19・20)

立地 14号横穴墓の南東に隣接して存在し、標高約26.3mと14号横穴墓よりやや低い。

墓道・閉塞部 (22・23図) N - 45° - E 方向に開口し、床面幅 0.65 ~ 1.05 m、残存長 2.1 mを測る。



第23図 15号横穴墓遺構図2 (●は土器、▲は金属製品)

閉塞部には幅30cm、深さ5cm前後の浅い溝が主軸方向に直交して掘り込まれているほか、玄門部から続く溝が主軸方向中央に掘り込まれている。閉塞石は無かった。

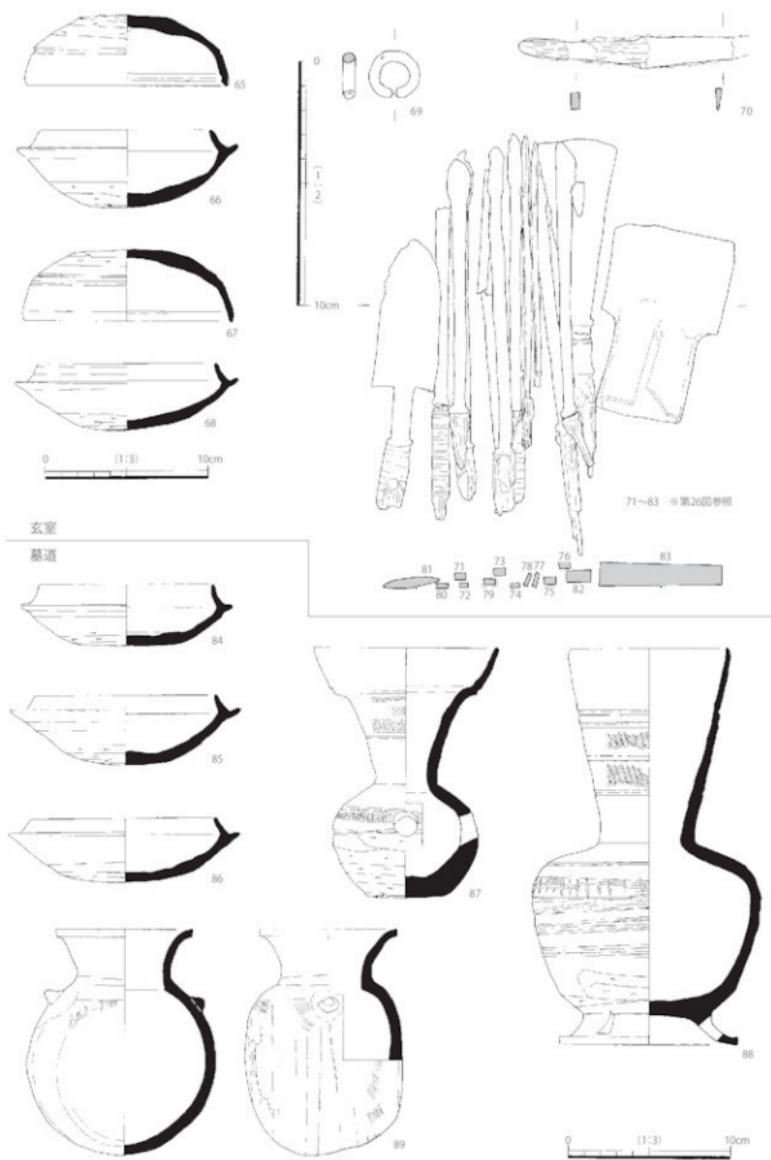
玄門 (第22・23図) 床面幅0.75～0.9m、長さ0.45m、残存高0.5mを測る。天井部は残存していないが、残存部の形状からアーチ形の断面形になると推定される。幅20cm、深さ約10cm前後の溝が主軸方向中央に掘り込まれている。

玄室 (第22・23図) 平面形は幅1.05～1.4m、奥行1.9mの奥が広がる台形状である。墓道から玄室までの残存長は4.45mとなる。左袖のみの片袖式である。天井部は残存していないが、残存部の状況からアーチ形の断面形になると推定される。残存高0.55m。

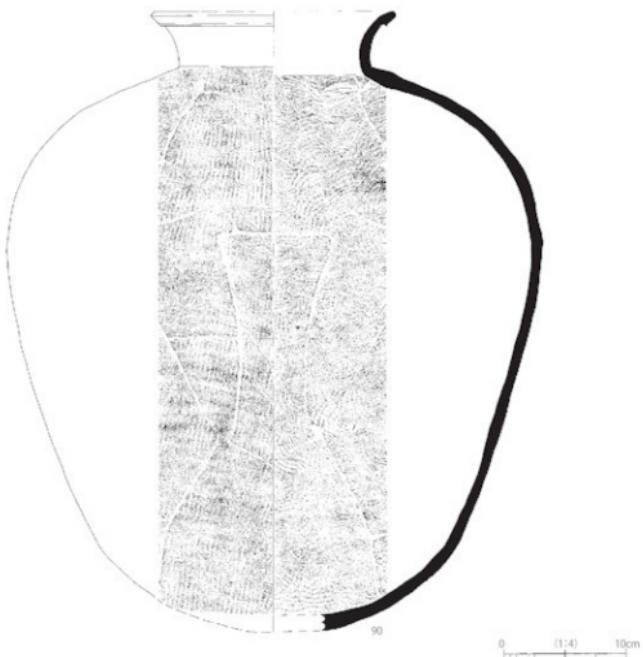
土層堆積状況 (第23図) ①層は玄室内崩落土及び崩落後の流土等、②層が墓道上流土等である。③層は墓道埋土等で、その上面付近において須恵器がまとまって出土している。④層は玄室崩落前の流土・攢乱土等、⑤層が閉塞部溝内堆積土である。玄室内出土遺物に床面直上出土のものと④層上面付近出土のものが存在するが、天井崩落等に伴う移動の可能性もあり、初葬後の追葬等の痕跡も明確でない。後世の盗掘等は受けていない。

遺物出土状況 (第22～26図) 玄室内においては、左側壁寄りの奥壁沿いで須恵器蓋杯2セット(65～68)、銀環1点(69)が、玄室中央部付近で刀子(70)1点、鉄鏃12点(71～82)、鉄斧1点(83)が出土している。この内、蓋杯については、若干の移動が見られるものの土器枕と思われ、いずれも杯身を下に杯蓋を上に、いずれも口縁を下に向けて重ねている。一部床面に接地しつつ斜めに浮いた状態で出土した。天井の崩落等によって移動したものであろうか。また、鉄鏃と鉄斧については、ほぼ床面直上で刃部を玄門方向に向け、整然とまとめられた状態で出土した。胡錘等に収めて副葬されていたものであろうか。埋葬時の副葬配置を保つものであろう。その他、銀環についてはほぼ床面直上から、刀子については④層上面からの出土である。

墓道上においては、墓道上の最終埋土と思われる③層上面において、底部穿孔された須恵器壺1点(90)が正位置に据え置かれた状態で出土したほか、その背面付近において須恵器蓋杯3点(84～86)、甕1点(87)、長頸壺1点(88)、提瓶1点(89)がまとまって出土している。甕を除く墓道上出



第24図 15号横穴墓遺物実測図1



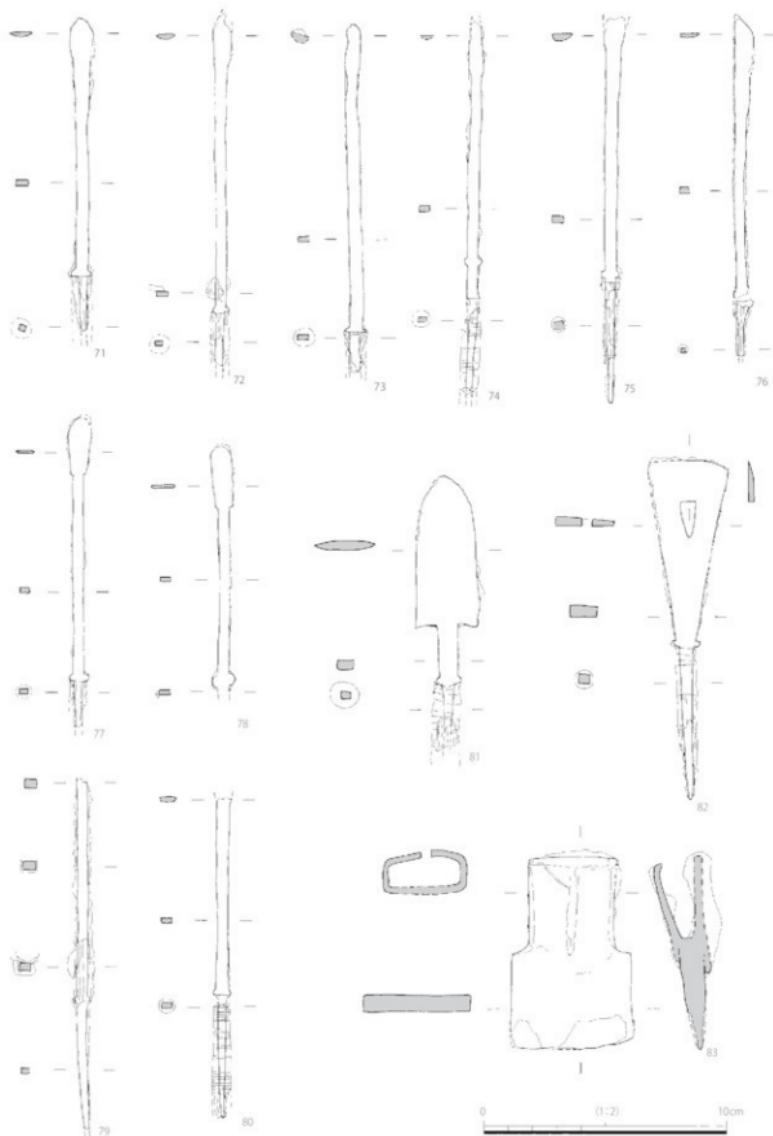
第25図 15号横穴墓遺物実測図2

土須恵器は全て乱雜な出土状況であり、最終埋土後の墓道上に土器を集積したものと思われる。前述の13号横穴墓と類似した遺物出土状況である。

出土遺物 (第24～26図、図版15・16・19・20) 65～68は玄室内出土の須恵器蓋杯で、65と66、67と68がそれぞれセットで出土するものである。いずれも外面に粗雜なヘラケズリが施されるものであるが、65・66についてはやや丁寧なケズリとなっている。

84～90は墓道上出土の須恵器である。84～86は蓋杯で、全て杯身である。外面には84に粗雜なヘラケズリが、85に周辺ヘラケズリが、86に周辺ヘラケズリ後ナデが施されている。87は題で、頸部と体部に粗雜な波状文が施される。88は長頸壺で、3方向の三角形スカシを持つ低い脚が付き、頸部に2段の波状文が、肩部に刺突文が施される。89は提瓶で、肩部に瘤状の把手を持つ。体部外面には平行タタキ後ナデが施されている。90は壺で、底部穿孔が施されている。

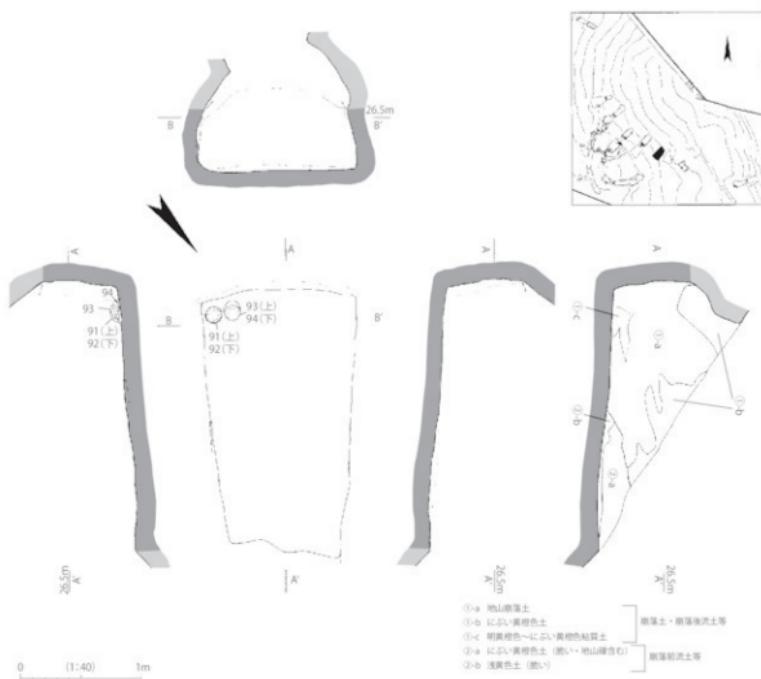
69～83は玄室内より出土した金属製品である。69は銅芯銀板貼の銀環で、断面円形に近く、開き端には銀板を折り込んだシワの痕跡が観察できる。70は両闘の刀子である。刃部の一部を欠損し、柄木の一部が残存している。71～80は長頸鎌である。71～75が断面片丸造りの柳葉形鎌身部を持



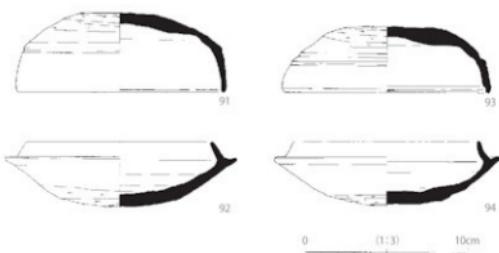
第26図 15号横穴墓遺物実測図3

76が片刃形鎌身部を持つもの、77・78が直角関を持つ柳葉形鎌身部を持つもの、79・80が鎌身部を欠くものである。各形態において棘状関、矢柄が確認できる。また、79については頭から関部にかけて三片を包み込むように有機質が残存していた。79は出土時には鎌身部に相当する位置に茎部が配置されていたもので、矢柄も確認できない。他の鉄鎌と異なり副葬時には矢柄も付属していないかったと思われる。81・82は平根系の鉄鎌で、81が長三角形鎌、82是有窓の方頭鎌である。各形態において棘状関、矢柄が確認できる。方頭鎌については、鎌身部先端の縦断面が片切刃造りとなる形態である。83は有肩袋状鉄斧である。

時 期 須恵器蓋杯は全て大谷4期の特徴を示し、その他の出土須恵器も全て大谷4期の範疇に捉えられる。横穴墓の築造、埋葬も大谷4期の中で終了しているものと考えられる。ただし、玄室内出土蓋杯に比べ墓道上出土蓋杯はヘラケゼリ等にやや新しい様相を示し、埋葬と最終埋土後の祭祀には若干の時期差がある可能性がある。



第27図 16号横穴墓遺構図



第28図 16号横穴墓遺物実測図

(5) 16号横穴墓

(第27・28図、図版9・16)

立地 15号横穴墓の南東に隣接して存在し、標高は奥壁床面で約26.1mと15号横穴墓よりやや低い。後世の削平を受けしており、玄室の一部のみが残存していた。

玄室 (第27図) N-37°-E方向に開口し、袖部付近は破壊されている。残存部の平面形は幅1.3m、奥行2.1m以上の長方形である。天井部の大部分は残存していないが、残存部の形状から高さ0.6~0.7m程度のアーチ形の断面になると推定される。

土層堆積状況 (第27図) ①層は玄室内崩落土及び崩落後の流土、②層玄室崩落前の玄室内流土等である。初葬後の追葬や盗掘の痕跡は明確ではない。

遺物出土状況 (第27・28図) 玄室内左奥の床面付近で須恵器蓋杯が2セット(91~94)出土した。なお、須恵器蓋杯はいずれも身を下に、蓋を上にいずれも口縁部側を下に伏せて重ねた状態で出土しており、土器枕と考えられる。

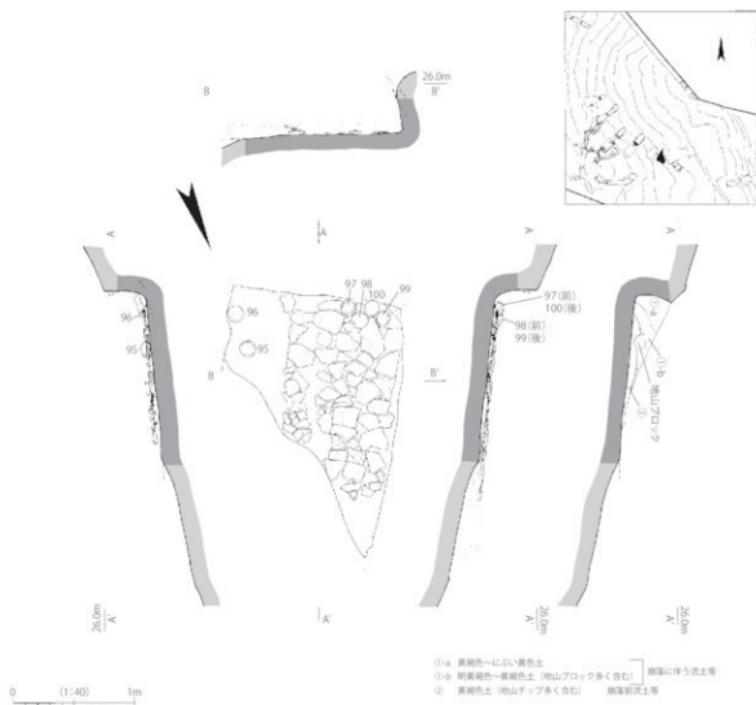
出土遺物 (第28図、図版16) 91~94は玄室内から出土した須恵器蓋杯である。91と92、93と94がそれぞれセットで出土するものである。外面ヘラケズリについては91の杯蓋に丁寧なヘラケズリ、92の杯身にやや丁寧なヘラケズリ、その他は粗雑なヘラケズリが施されている。また、杯蓋口縁端部は91がシャープに取まるもので、93が緩い段状に仕上げるものである。

時期 玄室内出土の須恵器蓋杯は、大谷3~4期の特徴を持つ。特に杯蓋(91・93)について見ると、基本的には大谷3期に近い特徴を示すが、両者共に口径がやや小さく、93についてはヘラケズリにも新しい特徴も見られる。ここでは大谷3期と4期の過渡的な段階として捉えておきたい。横穴墓の築造、埋葬についても同様な時期と考えられよう。

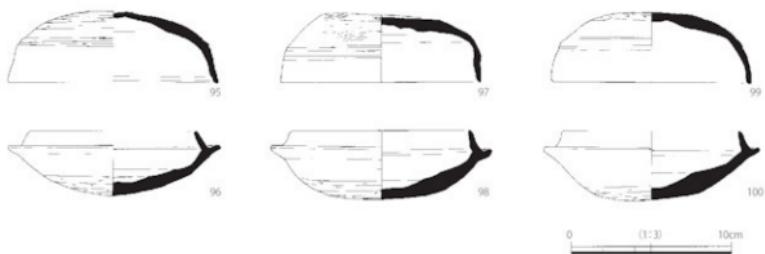
(6) 17号横穴墓 (第29~31図、図版9・16・17)

立地 16号横穴墓の南東に隣接して存在し、標高は奥壁床面で約25.6mと16号横穴墓よりやや低い。後世の削平を受けおり、玄室の一部のみが残存していた。

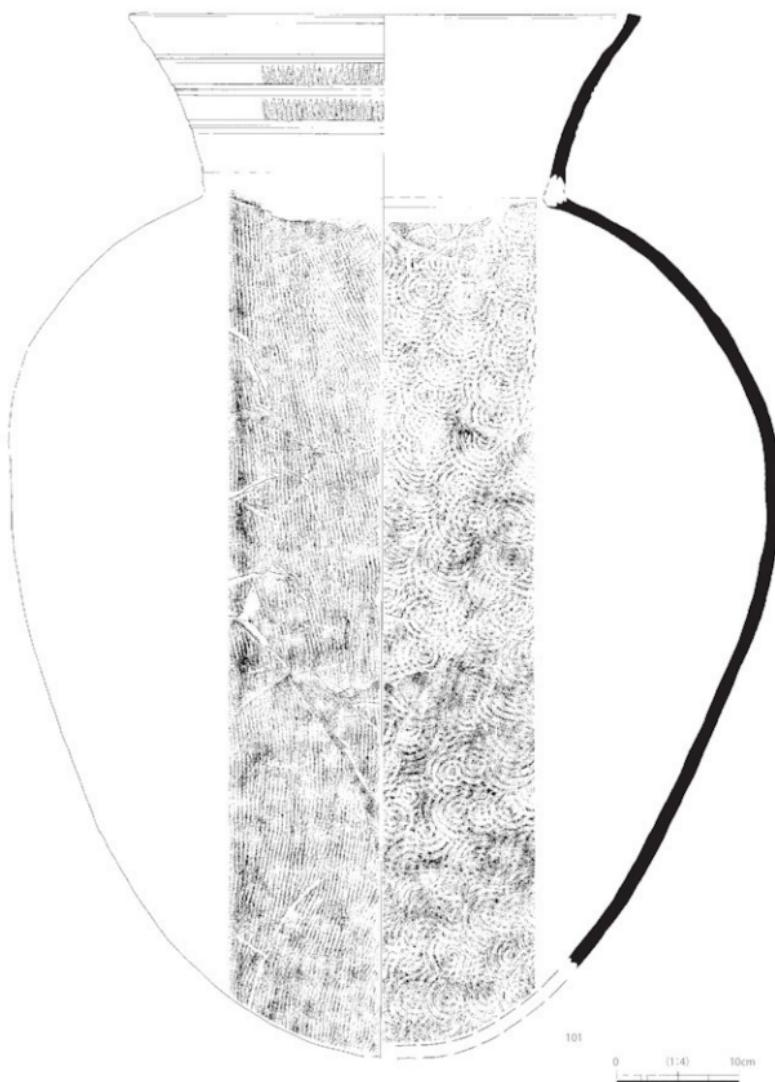
玄室 (第29図) N-28°-E方向に開口する。袖部付近から左側壁側にかけて大きく破壊されているが、右側壁側に袖部の痕跡と思われる変換点がわずかに残る。残存部の状況から、平面形は幅1.4m程度、奥行2.0mの長方形、右袖が狭い形状であったと思われる。天井部の大部分は残存していない。アーチ形の断面形であろうか。残存高約0.4m。玄室内右側壁寄りには須恵器壺を破碎して敷き詰めた須恵器床が確認された。須恵器床の平面形を復元すると0.95×1.65m程度の整った長方形であったようである。



第29図 17号横穴墓遺構図



第30図 17号横穴墓遺物実測図1



第31図 17号横穴墓遺物実測図2

土層堆積状況（第29図）①層は地山ブロックを含む地山由来の流土等で、天井の崩落に伴うものであろう。②層は玄室内流土である。基本的には須恵器床の上に堆積するが、左側壁寄りでは須恵器床を含む出土遺物下に若干の堆積が確認される。堆積土からは初葬後の追葬や盗掘の痕跡は明確ではないが、出土遺物の一部は移動を受けている可能性がある。

遺物出土状況（第29～31図）玄室内より須恵器蓋杯3セット、須恵器床として配置された壺1点が出土した。左側壁際で出土した蓋杯1セット（95・96）はやや乱雑な配置であり、杯蓋95が床面よりやや浮いた状態で、杯身96が床面のはば直上より出土している。いずれも口縁端部を下に向け伏せた状態で出土した。玄室右奥で出土した蓋杯2セット（97～100）は須恵器床直上に左から杯蓋（97）→杯身（98）→杯身（100）→杯蓋（99）の順で互い違いに整然と配置されていた。いずれも口縁端部を下に向け伏せた状態で出土した。やや変則的な配置であるが、須恵器床に伴う土器枕と考えて良いであろう。須恵器床壺（101）は玄室右側壁寄りの地山直上付近に敷かれ、基本的には内面を下に向けて相互の重なりを避けるように配置されていた。ただし、玄室中央ライン付近には若干の空白が認められ、これより左側の須恵器床では床面から若干浮いたものが多く、外面を下に向けた破片や破片同士の重なりが目立つ。空白部分に敷かれていた壺片を追葬時に移動して重ねたものかもしれない。

出土遺物（第30・31図、図版16・17）95～100は玄室内より出土した須恵器蓋杯である。95と96、97と98、99と100がそれぞれセットで出土するものであるが、焼成や色調等に顕著な違いがあり、本来のセット関係かは疑問が残る。基本的には全て外面に粗いヘラケズリを施すものである。また、杯蓋95の口縁端部は緩い段状に仕上げるもの、杯蓋97の口縁端部はシャープに取まるものである。

101は玄室の須恵器床を接合した壺である。口縁端部は平坦に納め、頸部に2段の刺突文が施される。底部付近の欠損部は破面が摩耗しており、欠損部に対応する破片も存在しない。破碎前から底部穿孔が施されていたものと思われる。

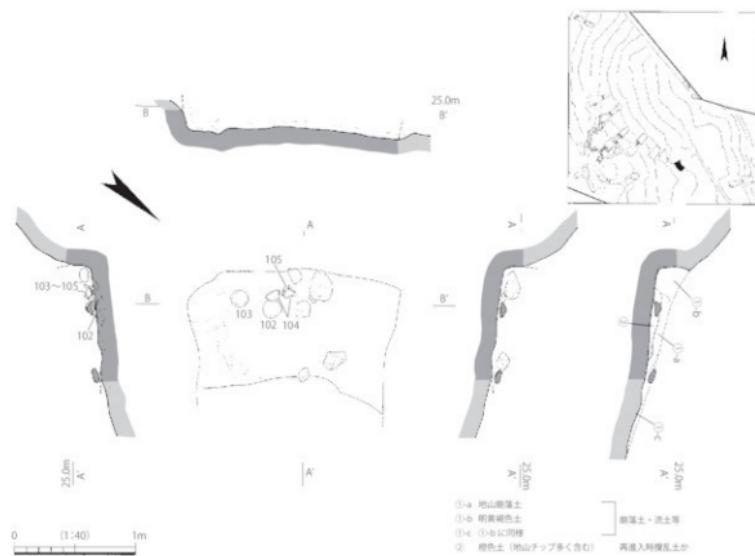
時期 玄室内出土の須恵器蓋杯は、基本的に大谷4期の特徴を持つが、95・97の杯蓋については口縁端部に大谷3期に近い様相を示す。よって、横穴墓の築造は大谷3期末～4期初頭頃、埋葬も4期の中終了しているものと思われる。

（7）18号横穴墓（第32・33図、図版10・16）

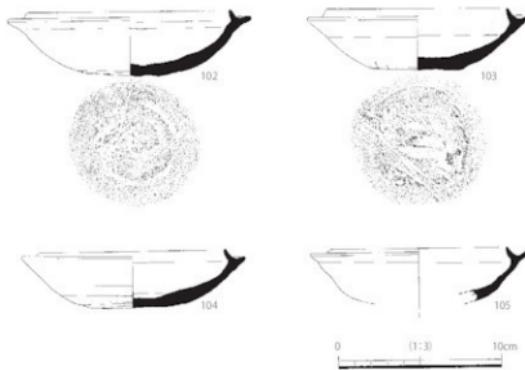
立地 17号横穴墓の南東に隣接して存在し、標高は奥壁床面で約248m、17号横穴墓奥壁床面と比べ1m弱低くなる。後世の削平を受けており、玄室の奥壁付近のみが残存していた。

玄室（第32図）N-50°-E方向に開口する。大部分が破壊されているが、床面の残存部で幅1.5～1.75m、残存長1.2m程度である。天井部は残存していない。残存高約0.2m。左側壁沿いに幅30cm深さ5cm前後の溝が確認されたが、ややいびつな形状であり築造当初のものは不明である。また、玄室内には数点の礫が見られる。閉塞石の転石であろうか。

土層堆積状況（第32図）①層は崩落土及び流土等、②層は再進入時の攪乱土等であろうか。②層上面付近～②層中で転石と破損した須恵器が確認される。以上の状況から、最低1回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。



第32図 18号横穴墓遺構図



第33図 18号横穴墓遺物実測図

遺物出土状況（第32・33図）

玄室内奥壁付近より、須恵器杯身4点（102～105）が出土している。内、102・103はほぼ完形品で、床面付近～②層中から口縁を下に向けて左側壁寄りに並んで出土した。土器枕として使用されたものであろうか。104・105は、②層上面付近の最も奥壁寄りの位置から破損した状態で乱

雜に出土している。再進入時に移動を受けたものであろう。

出土遺物（第33図、図版16） 102～105は玄室内出土の須恵器杯身である。いずれも外面にヘラケ

ズリが残らず、ナデ調整が施されるもので、底部外面に 102 にはヘラ記号「|」が、103 には不規則なヘラ傷とナデが確認される。

時 期 玄室内出土の須恵器杯身はいずれも大谷 5 期の特徴を示す。よって、横穴墓の築造、埋葬も大谷 5 期の中で終了しているものと考えられる。今回の調査で確認された最も新しい横穴墓である。

3 横穴墓群 C 群

B 群（12～18 号横穴墓）の東南東方向、東北東向き斜面標高約 19 m に立地する 19 号横穴墓である。現状では 1 基のみの単独築造として確認されるが、周辺地形は大きく改変されており、本来は複数の横穴墓からなる小群を形成していたものと思われる。

過去に 19 号横穴墓南方の麓部を中心に確認されていたとされる 10 基の横穴墓（1～10 号横穴墓）についても、同一の小群を形成していた可能性があるが、すでに破壊されているようであり、正確な位置は不明である。

（1）19 号横穴墓（第 34 図、図版 10）

立 地 18 号墓の東南東約 10 m、標高約 18.7 m の東北東に向く丘陵斜面に位置し、今回の発掘調査区内において、最も南東寄りの低所で確認された横穴墓である。

墓道・閉塞部（第 34 図） N - 74° - E 方向に開口し、床面幅 1.0 ~ 0.85 m、残存長 2.0 m を測る。閉塞部には高低差 5 cm 前後の段を設けて玄門側を高くし、閉塞部側壁も削り込み状に若干削り込まれている。閉塞石は無かった。

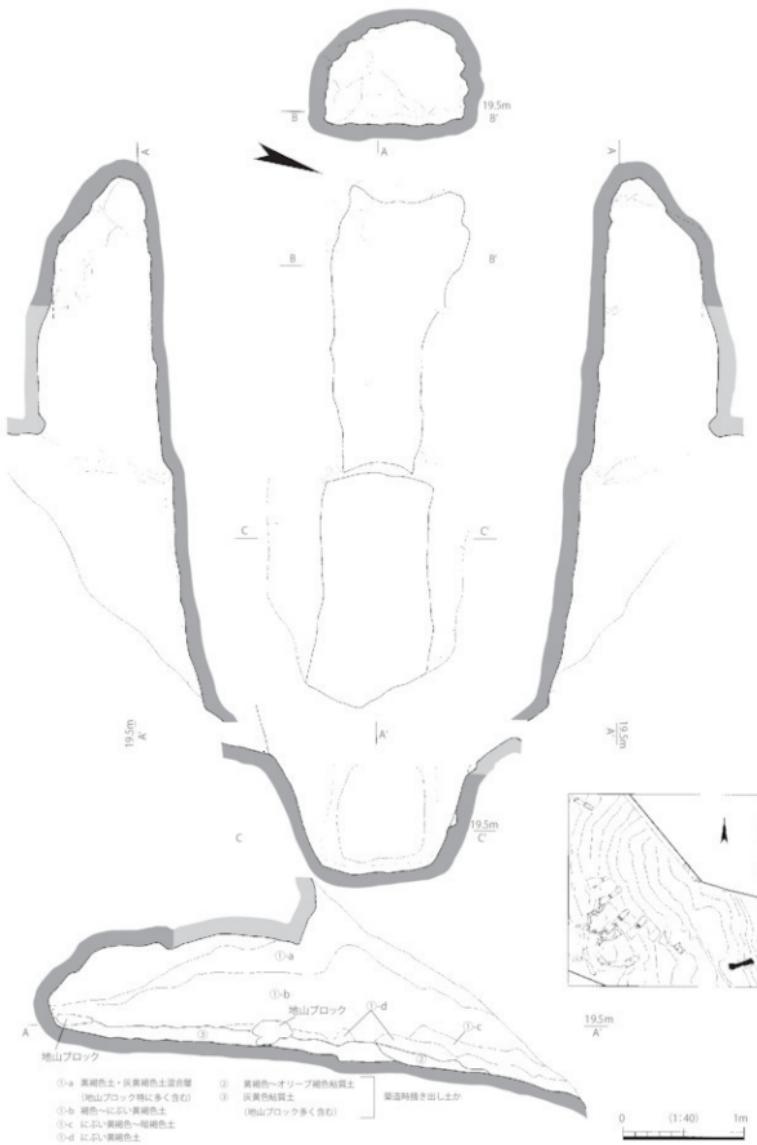
玄門・玄室（第 34 図） 平面形は玄門部入口付近の幅約 0.55 m、現状の奥壁付近の幅約 0.9 m、最大幅約 1.1 m、奥行約 2.35 m の歪な長台形状で、墓道から玄室までの残存長は約 4.3 m となる。天井は最奥部で一部残存しており、現状で高さ 0.8 m 前後のやや歪なアーチ状の断面形となる。また、玄門入口付近の断面形も、残存部の形状から高さ 0.8 m 前後のアーチ状となるものと思われる。

造墓途中的横穴墓と考えられ、玄門・玄室の区画は明瞭でないが、閉塞部より 1.0 ~ 1.25 m 付近で床面幅が広がり、特に閉塞部より 1.25 m 付近から奥は粗い加工痕が良好に残るなど、造墓工程の変化が認められる。この付近が玄門と玄室の境界部となるものであろう。閉塞部より 1.25 m を玄門・玄室の境界とした場合には、玄門部が幅 0.55 ~ 0.85 m 程度、長さ 1.25 m 程度、高さ 0.8 m 前後、玄室が幅 1.1 m 以上、奥行 1.1 m 以上、高さ 0.8 m 以上の法量を意図したものということになろう。

玄門・玄室を一体的に使用した場合には被葬者を埋葬するに十分なスペースを有しているが、実際に埋葬に使用された痕跡は確認できなかった。

土層堆積状況（第 34 図） ① 層は流土等と思われる。②③ 層は横穴墓掘削時の掻き出し土等であろうか。②③ 層上面では連続する面を確認でき、初葬後の再進入面である可能性も考えられるが、いずれの土層中からも遺物が全く確認されていないことから、埋葬等には使用されなかつた可能性が高いと思われる。

出土遺物 出土遺物は全く確認されていない。



第34図 19号横穴墓遺構図

時期 出土遺物が存在せず、時期についても不明である。ただし、既に消失したものと思われる過去に確認されたC群付近の横穴墓に家形形状の天井形態、正方形プランの玄室平面形態の横穴墓が存在したこと、今回の調査区において最も近い横穴墓が大谷5期の須恵器を出土することなどから、C群そのものがA・B群より比較的新しい小支群であった可能性を窺わせる。

第3節 その他の遺構と遺物

1 その他の遺構

横穴墓以外の遺構としては、19号横穴墓北方の谷部中腹に土坑SK1が、13～15号横穴墓上方の北東向き斜面に横坑群が確認された。いずれの遺構も遺物は全く確認されておらず、その性格も不明である。以下に個々の遺構についての詳細を述べる。

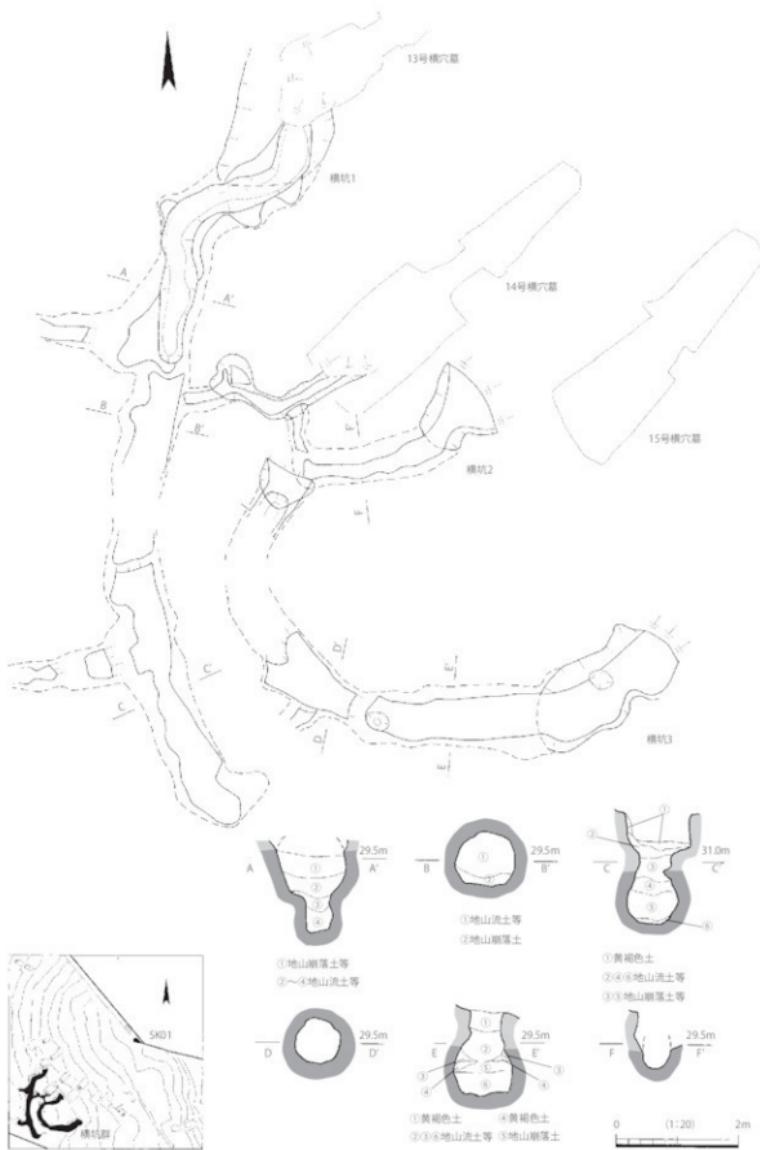
(1) 横坑群（第35図、図版11）

13～15号横穴墓上方の北東向き斜面で確認された不規則な横坑群である。掘削開始時の開口部に近いものとして確認できたのは3カ所であり、それぞれの開口部から続く横坑を開口部の北から横坑1～3とした。

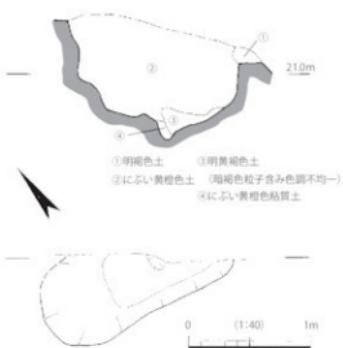
横坑1は、現状の開口部から南へ蛇行して伸びる、約12mの奥行を持つ横坑である。最奥部では、天井崩落に伴い丘陵頂部に向けて開口した状態で検出された。中間部は崩落の危険性が高いため完掘していないが、貫通確認調査を行っており、一連の横坑であることは確実である。横坑側面の各所に幅0.5m前後的小穴が確認される。開口部側では最大幅1～1.5m程度、高さ0.8m以上を測り、床面には更に幅40cm前後、深さ40cm前後の溝が確認される。奥側では最大幅0.8～1m前後、高さ0.9m前後を測る。奥へ向って床面高が高くなっている。開口部付近の床面標高は約28m、最奥部の床面標高は約30mを測る。

横坑2は、現状の開口部から南西へ蛇行して伸びる、約3.5mの奥行を持つ横坑である。その上部は調査前に地形が破壊されていたため、天井は残存しておらず、大部分が溝状の検出となった。残存部で最大幅0.6m以上、高さ0.4m以上を測る。最奥部では北へ伸びる幅0.3m程度の小穴が確認され、横坑1から続く小穴と繋がっている。床面の標高は約29.2mである。

横坑3は、現状の開口部から西へ大きく屈曲して伸びる、10m以上の奥行を持つ横坑である。最奥部は坑道2付近で崩壊して開口状態となっている。中間部は崩落の危険性が高いため完掘していないが、貫通確認調査を行っており、一連の横坑であることは確実である。横坑1・2と同様、横坑側面の各所に幅0.4～0.5m前後的小穴が掘削されていたようで、現況の最奥部に隣接する西方に伸びる小穴もこの横坑に伴うものと思われる。開口部側で最大幅1～1.2m程度、高さ1m前後、中間部で最大幅0.7m～1m程度、高さ0.7m前後、現状の最奥部で最大幅0.9m程度、高さ0.7m前後を測る。基本的には奥に向って床面高が高くなっている。開口部付近の床面標高は約28.8m、現況の最奥部の床面標高は約29.5mである。



第35図 横坑群(横坑1～3)遺構図



第36図 SK 1 遺構図

の共通性は看過できない。西谷横穴墓群第2支群の調査においては、横坑群の多くが横穴墓に達していることから、後世の盜掘に伴う横坑群の可能性が指摘されている。今回調査を行った横坑群においては、横穴墓に達するものが一つも存在しないが、横坑1・2の開口部は横穴墓崩落後の陥没部付近に存在しており、こうした地形を意識して掘削を行った可能性は高いと思われる。

(2) SK 1 (第36図、図版11)

19号横穴墓の北北西約15m、標高約21.5m付近の東向き谷部中腹で確認された土坑である。一部は調査区外へと続いており全形を確認できなかったが、長径1.65m以上、短径0.8m前後、深さ0.8m前後を測る。性格は不明であるが、土坑内には均一な埋土と思われる土が確認され、掘削後に意図的に埋めたものであると思われる。遺物は出土しておらず、時期についても不明である。

2 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物については、残存状況の良好なもの、特徴的なもののみを図示した。弥生土器、須恵器、円筒埴輪が確認されている。この内の円筒埴輪については、平成26年度までに調査を実施した調査区西方斜面、上塙治横穴墓群第40支群の調査で出土した資料と併せて報告する。以下に遺物についての概略を述べる。

(1) 弥生土器 (第37図、図版18)

106・107は弥生土器壺もしくは壺の底部である。厚手の平底形状であり、弥生時代後期以前のものと思われる。調整は風化著しいが、106にはわずかにミガキの痕跡が観察できる。いずれも12・13号横穴墓西方の丘陵頂部の表土層から出土したものである。

基本的には側面が膨らむ最大幅1m前後、高さ0.7~1m程度を測り、坑の側面に小穴を持つ横坑群と言える。いずれの横坑からも天井崩落土以下の土層からは遺物が出土しておらず、掘削時期も不明であるが、少なくとも横坑1については13号横穴墓の崩落後に掘削が行われている。その性格も不明と言わざるを得ないが、近隣地域の類例として、西谷横穴墓群内に存在する西谷横穴墓群第2支群（出雲市大津町）の調査で確認された同様な時期不明の横坑群があげられる（出雲市教育委員会2007）。奥行については今回の調査で確認された横坑の方がはるかに大規模なものであるが、類似遺跡内における類似遺構という面ではそ

同一丘陵の西に隣接する上塩治横穴墓第40支群の調査（出雲市教育委員会2016）においても麓部付近で弥生時代終末期の土器が少量確認されている。丘陵頂部を含む広い範囲に弥生時代の遺跡が存在したものと思われるが、上塩治横穴墓群第3支群・第40支群の両調査を通じ、遺構等の痕跡は全く確認できなかった。両調査区内においては、弥生時代の遺構等は既に破壊されているようである。

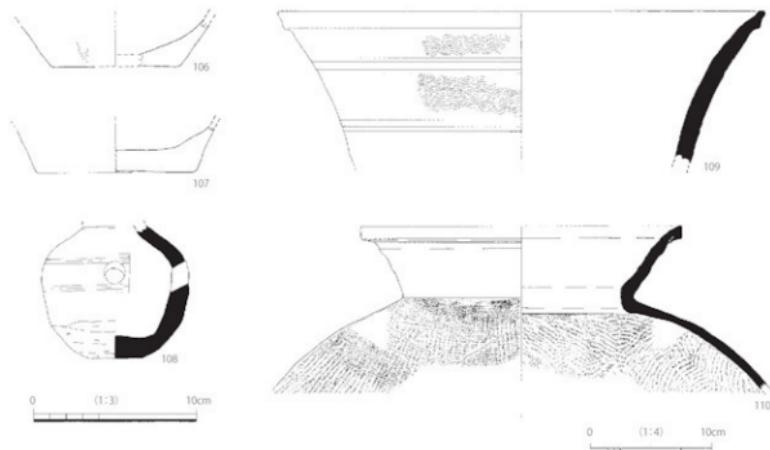
(2) 須恵器（第37図、図版18）

108は甌の体部である。やや丸みを持った形態で、体部の文様は沈線のみを残し省略されている。大谷5期を中心とする時期のものであり、横穴墓の造営時期に併行する。18・19号横穴墓付近の表土掘削中に出土した。

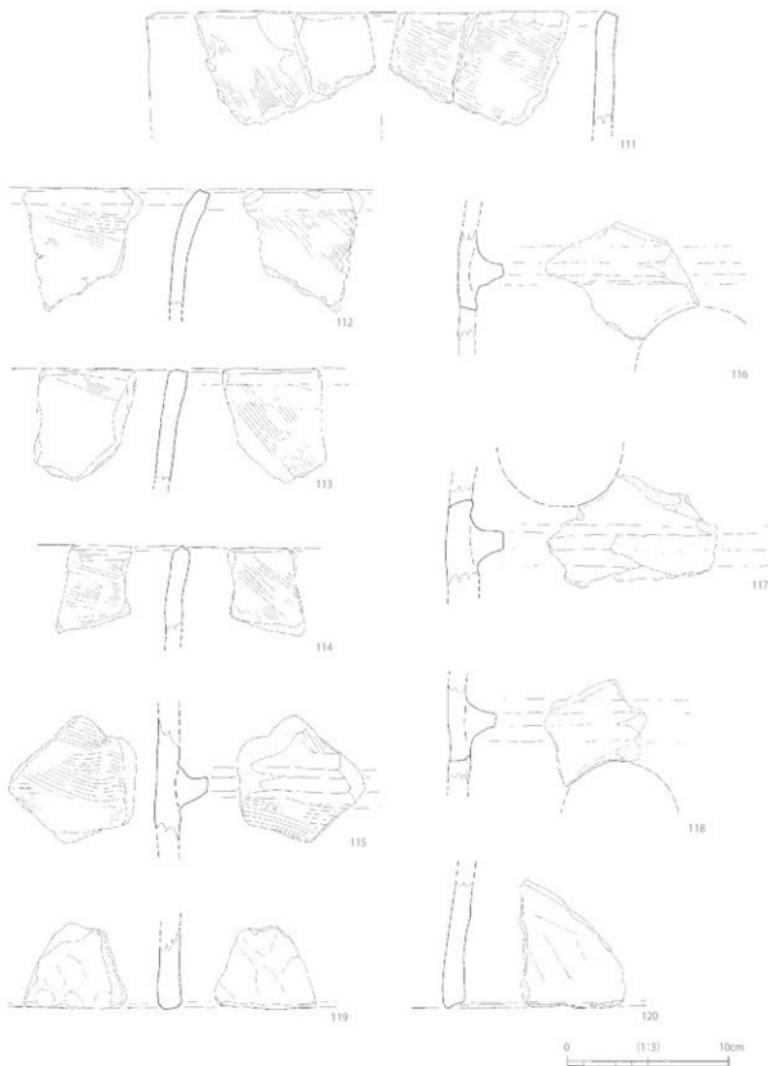
109・110は甌である。109では頸部に波状文が確認される。いずれも13・14号横穴墓西方の丘陵頂部表土中から出土した資料で、110については丘陵の東西両斜面にも接合資料が散在していた。丘陵頂部において使用されたものであろう。横穴墓の造営期に近い時期の資料と思われる。

(3) 円筒埴輪（第38・39図、図版18）

111～120は上塩治横穴墓群第3支群・第40支群の両調査区から出土した円筒埴輪である。111～114が口縁部、115～118が胴部、119・120が基底部の破片である。基本的には内外面にナナメハケを施し、胴部に発達したタガと円形スカシを持つもので、基底部には再調整が確認できる。基底部再調整の技法は風化により明瞭ではないが、119で端部付近にナデオサエ痕が、120では外面に円柱状



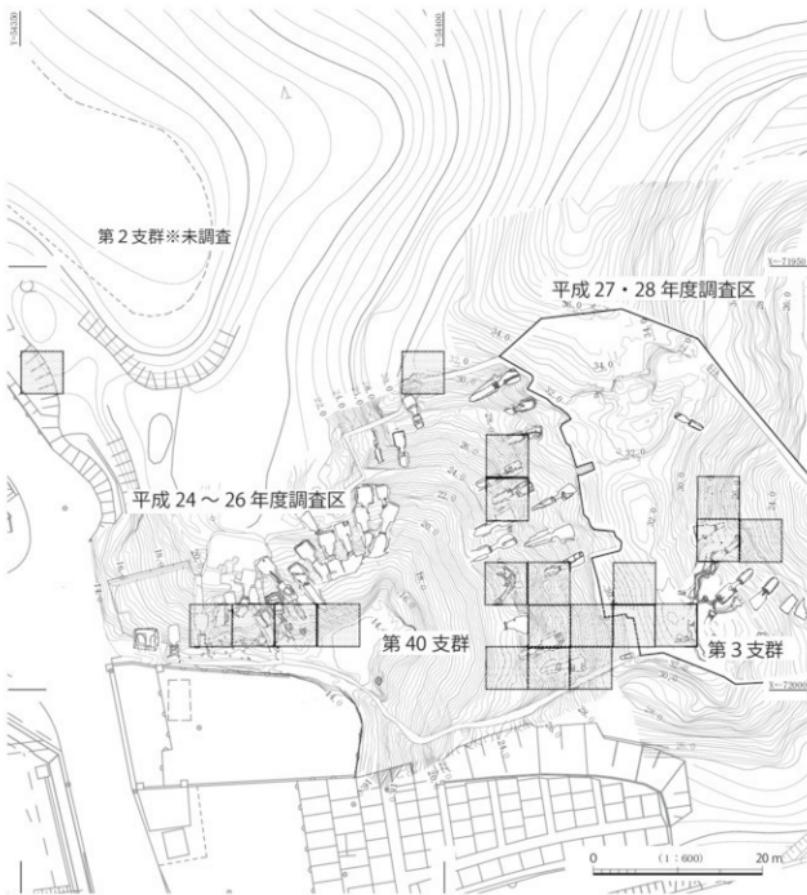
第37図 遺構外出土遺物実測図1



第38図 遺構外出土遺物実測図2

工具によるタタキ痕（大谷2003）と思われる痕跡が確認できる。図化しなかった小片資料を含め、基本的には全て類似した特徴を持つものと思われる。出雲の円筒埴輪編年5期（藤永1997）にあたるものであり、須恵器編年大谷3・4期を中心に行なう形態である。横穴墓の造営期に併行する。

また、出土地点は広域であり、調査区南端丘陵頂部付近の表土中、12・13号横穴墓付近の表土・流土中ほか、調査区西方、上塙治横穴墓群第40支群の調査区ほぼ全域の表土・流土中から出土している（第39図）。丘陵頂部からも出土すること、分布範囲が広域にわたることから、本来は丘陵上の複数箇所で使用されていた円筒埴輪が破損し流出したものと思われる。古墳、または横穴墓に伴う後



第39図 円筒埴輪片出土位置図

背墳丘などが丘陵上に複数存在していた可能性も考えられるが、調査区内においてはその痕跡を留めていない。

〔参考文献〕

- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第11集 鳥根考古学会
- 大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」「上石堂平古墳群」平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 平田市教育委員会
- 大谷晃二 2003「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」「宮山古墳群の研究」鳥根県古代文化センターほか
- 門脇俊彦 1980「上塙治横穴墓群」「上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」鳥根県教育委員会ほか
- 鹿野和彦・竹内圭史 1991「IV. 新第三系」「今市地域の地質」地域地質研究報告5万分の1地質図幅岡山(12) 第16号 地質調査所
- 藤永照隆 1997「出雲の円筒埴輪編年と地域制」「鳥根考古学会誌」第14集 鳥根考古学会
- 出雲市教育委員会 2007「西谷横穴墓群第2支群発掘調査報告書」
- 出雲市教育委員会ほか 2009「築山遺跡IV」県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市文化財報告6
- 出雲市教育委員会ほか 2016「上塙治横穴墓群第40支群」県道出雲三刀屋線上塙治工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1
- 山陰横穴墓研究会 1995「第1回山陰横穴墓調査検討会横穴墓築造に伴う掘削技法」「鳥根考古学会誌」第12集 鳥根考古学会

第5章 総括

第1節 上塩治横穴墓群第3支群の時期と特徴

上塩治横穴墓群第3支群における今回の調査では、新たに9基の横穴墓を発見した。これにより、既に消失している10基と合わせ、19基以上からなる支群となり、上塩治横穴墓群の中でも有数の横穴墓数を誇る支群であったことが確認できた。

以下に上塩治横穴墓群第3支群の特徴について、その概要をまとめる。各横穴墓の基本的な特徴と時期、配置については第40図、表2・3を参照していただきたい。時期の標記については、出雲の



第40図 横穴墓と小群の配置図

須恵器編年（大谷1994・2001）を使用する。

上塙治横穴墓群第3支群は、大谷3期に築造された横穴墓（11号横穴墓）を最古とし、少なくとも大谷5期までの築造が確認される。隣接する第40支群と並び、上塙治横穴墓群において最も古くから築造が開始された支群の一つである。

今回の調査において確認された横穴墓（11～19号横穴墓）の各時期については、大谷3期の築造が11号横穴墓、大谷3期末～4期の築造が12～17号横穴墓、大谷5期の築造が18号横穴墓、築造時期不明のものが築造途中の横穴墓である19号横穴墓である。その大半が大谷4期に築造時期が集中し、玄室形態も出雲西部地域において古相の玄室形態とされる。長方形プランにアーチ形の天井形態が主流であった。しかしながら、過去の記録にある麓部付近に築造された1～10号横穴墓については大部分が大谷5期以降に見られる家形の天井形態であったとされており、本支群は少なくとも大谷5期までは盛行していたものと思われる。また、大谷4期以前の横穴墓は丘陵中腹以上に多く築造され、大谷5期以降の横穴墓は麓部付近に多く築造される傾向が強く表れている。

特筆すべき横穴墓としてあげられるのが、14号横穴墓とその両脇に隣接して築造された13・15号横穴墓である。これらは全て大谷4期の横穴墓で、第3支群の中でも豊富な副葬品を有するものである。3基の横穴墓の中央に位置する14号横穴墓では組合式石棺に大刀が副葬され、鐵鎌・耳環は副葬されていなかったに対し、両脇に位置する13・15号横穴墓では特別な埋葬施設を持たず、鐵鎌・耳環が副葬され、大刀は副葬されていなかった。また、13・15号横穴墓において更に興味深い共通点としては、墓道に据え置かれた底部穿孔が施される壺と最終埋土後に集積された土器群の存在である。一方、14号横穴墓の墓道上では全く遺物が出土していない。中央に位置する14号横穴墓とその両脇に位置する13・15号横穴墓における埋葬形態・遺物出土状況の明確な対比については、同一集団の同一時期における被葬者の階層性を示すものである可能性が高く、一つのモデルタイプとして興

表2 第3支群横穴墓一覧表

横穴墓番号	玄室形態		玄室法量		玄門法量		浜道法量		墓道前壁法量		埋葬施設	開窓施設	その他の施設等	出土遺物	備考	築造時期 (大谷編年)
	幅長	プラン	幅	長	幅	長	幅	高	幅	長						
11号	アーチ	幅長 145 (0.5~0.6)	0.7~0.75 1.45 —	0.4~0.5 0.5 —	0.35~0.65 1.75 —	—	—	—	—	—	開窓部溝	—	須恵器	—	—	3期
12号	アーチ	台形 185	1.3~1.8 —	0.7~0.9 0.55 —	0.45~0.60 1.2 —	—	—	—	—	—	開窓部溝	—	須恵器	—	—	4期
13号	アーチ	幅長 175 (0.8)	0.8~1.05 0.5 —	0.5 0.3 —	0.45~0.8 2.4(3以上)	—	—	—	—	—	開窓部溝 開窓部側石閉塞	副罐2・鉄鎌6以上 刀子2・須恵器・土器 鏡形	墓道底部穿孔裏設置 最終埋土後土器集積	—	—	4期
14号	アーチ?	幅長 25	1.36 0.68 (1.1)	0.4~0.55 0.68 —	0.55~0.8 0.22 —	—	—	—	—	—	開窓部溝 開窓部側石閉塞	大刀1・大形刀子1 須恵器	—	—	—	4期
15号	アーチ	幅長 19	1.05~1.4 —	0.75~0.9 0.45 —	0.65~1.05 2.1 —	—	—	—	—	—	開窓部溝 排水溝	開窓1・鉄鎌12・ 刀子1 刀子1	墓道底部穿孔裏設置 最終埋土後土器集積	—	—	4期
16号	アーチ	幅長 21 (0.6~0.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	須恵器	—	—	3期末~ 4期初
17号	アーチ?	幅長 20	—	—	—	—	—	—	—	—	須恵器床	—	須恵器	—	—	3期末~ 4期初
18号	?	?	—	—	—	—	—	—	—	—	副石?	—	須恵器	—	—	5期
19号	造墓途中	(11) (10) (0.85)	(0.6~0.85) (1.4) —	(0.9 2.0 —)	0.9 2.0 —	—	—	—	—	—	開窓部段・側込 渠	—	—	—	—	—

味深い調査成果となった。

また、上塙治横穴墓群第3支群は、尾根を挟んで隣接する第40支群（出雲市教育委員会2016）の様相と非常に類似した支群である（表3）。中でも特徴的な共通点としては、上塙治横穴墓群最古段階の大谷3期からその築造が開始される点、そして特異な埋葬施設である木蓋を使用したと見られる棺が存在するという点があげられる。そのどちらの特徴も、上塙治横穴墓群内において他に確実な例は無く、第3支群と第40支群のみで確認されるものである。両支群に挟まれた丘陵尾根上等で使用されたと思われる須恵器甕や円筒埴輪の存在も無視できない（第4章第3節）。両支群は一体的に造営された一連の墓域であったと考えて良いであろう。

第3支群と第40支群を合わせると、横穴墓の確認数は55基にものぼる。東西約1km、南北約1.5kmにわたる広大な上塙治横穴墓群内において、実に4分の1近くの横穴墓がこの場所に集中して確認されるのである。少なくとも遺跡の前半期（大谷3～4期）において、第3・40支群はその中核を為す特別な墓域であったと考えられる。

表3 第3・40支群横穴墓主要要素一覧表

支群	小群	横穴墓番号	埋葬形態年				窓穴形態	葬具設置	玄門具	閉塞石	主な副葬品	備考
			3期	4期	5期	6a期～						
3	A	11号	●	●	●	●	丸井	アーチ	複数	中		
		12号					アーチ	複数	複数	中		
		13号					アーチ	複数	複数	短	閉塞部削石	○ ○ ○
		14号					アーチ?	複数	×	木蓋複合式石棺	中	● 通過孔開孔無設計
	B	15号					アーチ	複数	複数	短	閉塞部削石	● ○ ○ ○
		16号					アーチ	複数	?	?	?	○ ○ ○ ○ 通過孔開孔無設計
		17号					アーチ?	複数	?	須恵器甕	?	?
		18号					?	?	?	?	?	石棺?
40	C	19号	?	?	?	?	造墓後中			長		
		(2号)	?	?	?	?	家	長方形?				
		(6号)	?	?	?	?	アーチ	正方形?	?			
		1号	●	●	●	●	アーチ	複数	×	複数	●	○ ○ ○ ○ ○
		2号					アーチ	複数	×	複数		
		3号	?	?	?	?	造墓後中			中?		
		4号					アーチ	複数	?	?		
		5号					家	正方形?	?	?		●
A	A	6号					アーチ	複数	○	長	閉塞部削石	△
		7号					アーチ	複数	?	長	玄門部削石	○
		8号					平	複数	?	中	玄門部削石	
		9号					?	複数	?	短	閉塞部削石	
		10号					家	正方形?	?	長	閉塞部削石	○
		11号					アーチ	正方形?	?	長	閉塞部削石	●
		12号					家	正方形?	?	長	閉塞部削石	
		13号					家	正方形?	○	石槨縫合?	?	●
	B	14号	?	?	?	?	アーチ	複数	?	長	閉塞部削石	不明鉢器
		15号					家	正方形?	?	中	閉塞部削石	
		16号					家	正方形?	○	?	?	閉塞部削石
		17号					アーチ	正方形?	?	中	?	
		18号	?	?	?	?	?	複数	?	短	?	石見地方の埋葬形
		19号	?	?	?	?	?	?	?	?	?	
		20号					アーチ	複数	?	?	?	○ ○
		21号					アーチ	複数	?	?	?	○ ○ △
C	B	22号					アーチ	複数	?	?	?	
		23号					アーチ	複数	?	?	?	
		24号					アーチ	複数	?	?	?	
		25号					アーチ	複数	?	?	?	石見地方の埋葬形
		26号					アーチ	複数	?	?	?	● 事例・要統計取扱
		27号					アーチ	複数	?	木蓋複合式石棺	中	木門部削石
		28号					アーチ	複数	?	木蓋石竹格	中	木門部削石
	C	29号					アーチ	複数	?	木蓋石竹格	?	?
		30号					アーチ	複数	?	?	?	要統計
		31号					アーチ	複数	?	?	?	安満片
		32号					アーチ?	正方形?	?	木蓋石竹格（須恵）	中	?
		33号					アーチ	複数	?	須恵家形石棺	中	木門部削石
		34号					アーチ	複数	?	石槨縫合	中	閉塞部削石

◆外門具 短：65m未満 中：65～12m 長：12m以上

◆大刀 ● 刀部60cm以上 ○：刀部30cm前後

◆首環 ● 金環 ○：銀環 △：不明

第2節 上塩治横穴墓群における横穴墓築造の動向

今回の発掘調査終了段階において、上塩治横穴墓群は41支群235基の横穴墓が確認されたこととなった。県道出雲三刀屋線道路改良工事に伴う発掘調査では、これまで調査例の少なかった大谷4期以前の横穴墓も多数発見されており、新たな知見も増えている。これまでの調査を踏まえて、遺跡全体の様相を整理しておきたい。

1 上塩治横穴墓群の変遷（第41図・表4）

以下に、上塩治横穴墓における横穴墓について、その分布状況及び、玄室形態、埋葬施設、副葬品等の様相について時期別に整理し、現段階で把握できるその変遷をまとめる。

大谷3期の様相

遺跡の初現期にあたる。現在のところ大井谷北部の第3・40支群で7基の横穴墓が確認されているのみである。極めて限定的な範囲の墓域として築造が開始されている。

基本的な玄室形態は、長方形プラン天井アーチ形で、特別な埋葬施設を持たないものであるが、平天井の玄室（第40支群8号横穴墓）や刳抜式小型家形石棺（同33号横穴墓）を持つ横穴墓も存在する。副葬品については、金銅製歩搖（同26号横穴墓）など特殊な遺物を出土する横穴墓も存在するものの、装飾大刀は確認されていない。

大谷3期末～4期の様相

遺跡の拡散期にあたる。現在のところ、6つの支群（第3・8・14・33・34・40支群）で約30基の横穴墓の築造が確認されている。この内22穴が第3・40支群の横穴墓である。大井谷周辺エリア南部へ墓域がやや拡張するほか、三田谷周辺エリア西部にも新たな墓域（第33支群）が出現する。

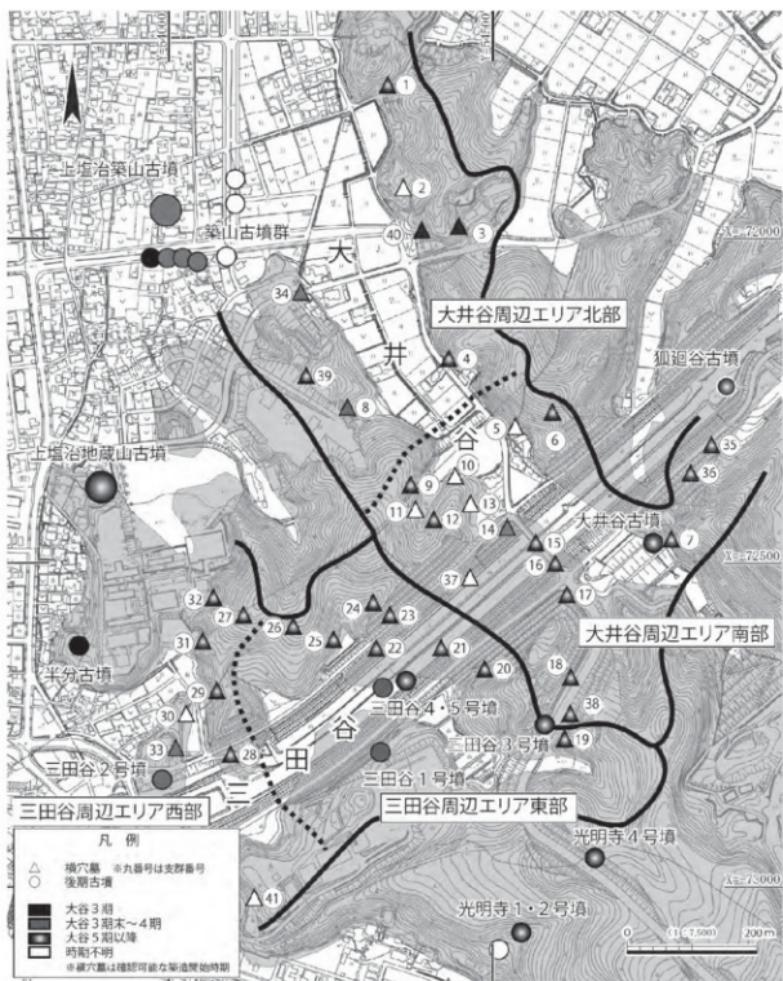
基本的な玄室形態は出現期とほぼ同様であるが、多様な埋葬施設（組合式家形石棺・異形家形石棺・木蓋組合式石棺・木蓋石柱・羅床・須恵器床・屍床）が確認される（出雲市教育委員会ほか2016・鳥根県教育委員会ほか1998）。およそ5割の横穴墓で何らかの埋葬施設が付属されており、前代の様相とは明かに異なる。一部の横穴墓では、副葬品に銀装の装飾大刀（第8支群3号横穴墓出土銀象嵌鉄・第33支群7号横穴墓銀装大刀）も確認されている。

この段階においても築造の中心はあくまで大井谷周辺エリア北部であるが、新たな墓域である三田谷周辺エリア西部において、家形石棺や銀装大刀を持つ横穴墓（第33支群6・7号横穴墓）が確認されていることは注目される。

大谷5・6期の様相

遺跡の最盛期にあたる。ほぼ全ての支群において横穴墓の築造が確認されるようになる。最低でも

120基以上の横穴墓が当該期に築造されており、築造数・築造エリア共に急速な拡大を見せる。第3・40支群でも計20基程度の横穴墓が築造されたと推定されるが、三田谷周辺エリア東部にまとまる第20～23支群においては計40基以上の横穴墓が築造される。なお、当該期の横穴墓は盜掘を受けているものが多く、副葬品のみでの時期判定が困難であるため、家形天井の玄室が確認できた支群については、当該期に造営されていた支群としてとらえている。



第41図 上塩治横穴墓群と周辺後期古墳の分布

玄室形態は方形プランが増え、家形天井のタイプが出現するほか、羨道部を付設した横穴墓も出現しており、「意字型」と呼ばれる出雲地方東部の横穴墓（出雲考古学研究会 1987）の影響がうかがえる。埋葬施設は組合式家形石棺・石床・屍床の3種にはば限定されるようになる。埋葬施設が付属する横穴墓についても、組合式家形石棺が第31・32支群のみ、石床が第22・32支群のみでしか確認できず、屍床についても大半が20～23支群で、三田谷周辺エリアに集中している。大井谷周辺エリアでは南部の第6・17支群のわずか3基で屍床が確認されているのみである。また、副葬品については、第22・33・36支群で金銅装大刀の副葬が⁴、第22・23支群で銀装大刀の副葬が確認される。装飾大刀を出土する横穴墓の分布状況も三田谷周辺エリアに集中している。

表4 上塙治横穴墓群と関連古墳の築造状況

立地	支群番号	築造時期（須恵器編年）				築造 数計	関連古墳	
		3期	3末～4期	5期	6a期～		近接古墳	墓域類似古墳
北部 (谷入口)	1					1		
	2					2		
	3	□◇				19		
	40	●	□◇△			36		
	34	□◇				6		
	39					3		
	4					2		
	8	☆□				7		
	5					2		
	6					5		
大井谷周辺周辺エリア	9					1		
	10					5		
	11					2		
	12			■		11		
	13					4		
	14			△		10		
	37					1		
	35					1		
	36				★	3	狐廻谷古墳（6期？）	
	7					4		
南部 (谷奥)	15					4		
	16					3	大井谷古墳（6期）	
	17			△		14		
	18					2		
	38				■	3	三田谷3号墳（6期）	
	19				△	4		
	20			△		5		
	21			△		10		
	22		★☆■△			21	三田谷1・4・5号墳（4・5期）	
	23		☆△			7		
三田谷周辺エリア	24					1		
	25					2		
	26					1		
	28					2		
	29					2		
	30					1	三田谷2号墳（4期）	
	33	☆●○		★		8		
	27					4		
	31				●	2		
	32			(☆) ●■		12		
	41					2		

★金銅装大刀 ●家形石棺 ○異形家形石棺
 ☆銀装大刀 ○異形家形石棺
 ■有縁石床

□その他の石製埋葬施設
 ◇須恵器床・櫛床等
 △屍床

※支群番号の並びは立地順
 ※玄室天井家形の横穴墓は5～6期としている

<上塙治丘陵北部>
 上塙治築山古墳（4期）
 築山古墳群（3・4期）

<上塙治丘陵西部>
 平分古墳（3期）
 上塙治地蔵山古墳（5期？）

いずれの要素においても三田谷周辺エリアの優位性が顕著であり、当該期における横穴墓群の中核を為していたものと考えられる。

大谷7期以降の様相

遺跡の終焉期にあたる。複数の支群で当該期の須恵器が確認されるが、第14支群9号横穴墓以外は確実に追葬等に伴う須恵器であり、新規築造の横穴墓はほとんど無かったものと思われる。

以上の様相をまとめると、築造エリアについては、初現期（大谷3期）に第3・40支群周辺の大井谷北部のみで横穴墓の築造が開始され、拡散期（大谷3期末～4期）には大井谷周辺エリア南部・三田谷周辺エリア西部の一部に、最盛期（大谷5・6期）には遺跡全城にまでその墓域が拡大することとなる。また、築造数・埋葬施設・副葬品等から見ても、初現期に大井谷周辺エリア北部にあった優位性が、三田谷周辺エリアへと移行していく様相が見て取れる。

2 周辺古墳の築造状況と上塩治横穴墓群（第41図・表4）

上塩治横穴墓群が築造されはじめた大谷3期以降、遺跡の立地する丘陵上及びその隣接地においては、上塩治築山古墳（鳥根県古代文化センター 1999）・上塩治地蔵山古墳（鳥根県教育委員会ほか 1980）といった地域を代表する首長墳のほか、築山古墳群（出雲市教育委員会 2009）・三田谷古墳群（出雲市教育委員会ほか 2000・鳥根県教育委員会ほか 1994・1998・2000）などの中小古墳も數多く築造されている。同時期の大型古墳・中小古墳・横穴墓が近接して築造された墓域として注目される。

大井谷周辺エリアにおける古墳の築造状況を見ると、まず、上塩治丘陵北部の隣接地に築山古墳群の築造が大谷3期に開始され、大谷4期には上塩治築山古墳の築造とともに古墳群の最盛期をむかえており、大井谷周辺エリア北部における横穴墓の開始期及と盛行期は、古墳築造状況とはほぼ一致している。続く大谷5期の古墳は現在のところ確認されておらず、古墳築造に一旦の断絶が見られるが、大谷6期になると大井谷周辺エリア南部で再び築造が確認される。横穴墓の築造エリアも、大谷5期以降大井谷周辺エリア南部を中心に大幅に拡大しており、少なくとも大谷6期には古墳・横穴墓とともに築造の中心が大井谷周辺エリア南部へ移っていることがわかる。

三田谷周辺エリアにおいては、大谷4期以降6期まで三田谷古墳群が継続して築造されている。基本的には西部の谷入口付近から東部の谷奥部へ向って築造エリアが徐々に移動していくようで、大谷5期以降の古墳は三田谷周辺エリア東部のみに限られている。三田谷周辺エリアにおける横穴墓の築造時期は、三田谷古墳群の築造時期とはほぼ一致しており、西部で築造が開始され、その後東部へ築造エリアが拡大する点においても非常に類似した変遷をたどる。大谷5・6期における横穴墓築造の中心となるエリアである。その他、上塩治丘陵西部において、大谷5・6期の上塩治地蔵山古墳も確認されている。横穴墓の築造エリアからやや離れているが、比較的近い場所ではほぼ同時期に築造される第31・32・33支群で家形石棺や装飾大刀が集中して確認されており、この古墳も横穴墓の築造に影

響を与えた可能性が高い。

以上のように、上塩治横穴墓群における前半期（大谷3・4期）の中心地である大井谷周辺エリア北部では築山古墳群の影響が、後半期（大谷5・6期）の中心地である三田谷周辺エリアでは三田谷古墳群の影響が特に強く表れており、それぞれが一体的な古墳群として意識されて築造が開始したものと思われる。また、築山古墳群は上塩治築山古墳を盟主墳とする古墳群であり、三田谷古墳群は上塩治地蔵山古墳に時期・立地共に近い古墳群である。上塩治横穴墓群は、これら地域を代表する首長墳の築造に直接的な影響を受けて造営された横穴墓群と見て良いのではないだろうか。

第3節 結 語

上塩治横穴墓群は、東西約1km、南北約1.5kmの範囲の丘陵地に41支群235基以上の横穴墓が築かれた山陰を代表する大横穴墓群である。上塩治横穴墓群の横穴墓は、周辺の首長墳・中小古墳群の築造状況と連動するかのように築造されており（第2節）、地域政権と密接なつながりのある人々が多く葬られた墓域であったと考えられる。

上塩治横穴墓群第3支群は、遺跡が分布する丘陵地の北東部、東向き斜面に横穴墓が築造された支群である。今回の調査で新たに9基の横穴墓が発見されたことにより、計19基の横穴墓からなる支群となった。丘陵尾根を挟んだ西向き斜面にも、上塩治横穴墓群の支群で最大数となる36基の横穴墓（第40支群）が確認されており、立地環境・築造時期・埋葬施設等の類似性から、第3支群と第40支群は一体的な支群として造営されたものと思われる（第1節）。第3・40支群で計55基、上塩治横穴墓群の横穴墓の4分の1近くもの横穴墓が密集する特異な墓域であることが確認された。

第3支群における横穴墓の築造開始時期は、11号横穴墓の大谷3期である。上塩治横穴墓群において、大谷3期に築造された横穴墓は、第3支群のはかは、隣接する第40支群で確認されるのみであり、大谷3期末～4期に築造された横穴墓も総数の3分の2以上の横穴墓が第3・40支群に集中して築かれている。少なくとも遺跡の前半期（大谷3～4期）において、第3・40支群周辺は上塩治横穴墓群の中核を為す墓域であったと言えよう。

県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事に伴う上塩治横穴墓群の調査は、本報告の調査を以て一旦の終焉を迎えた。平成24～26年（2012～2014）度にかけて断続的に実施した第40支群の調査、平成27・28年（2015・2016）度に実施した第3支群の調査を通じ、これまで極めて調査例が少なかった、大谷4期以前の横穴墓を数多く確認し、更に当該期の遺跡の中核エリアを特定にできたことは大きな成果であった。また、上塩治横穴墓群最古、大谷3期に築造された横穴墓の発見は、上塩治横穴墓群のみならず出雲平野周辺地域における横穴墓導入時期の見直しを迫る重要な発見となった。出雲平野周辺地域における横穴墓導入期の実態を解明する上でも貴重な成果であり、横穴墓研究の更なる進展が期待される。

〔参考文献〕

- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第11集 鳥根考古学会
- 大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 平田市教育委員会
- 出雲考古学研究会 1987『石棺式石室の研究』
- 出雲市教育委員会ほか 2000「上塙治横穴墓群第17・18・19・38支群 大井谷Ⅲ遺跡 石切場跡1・2 三田谷3号墳」斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書I
- 出雲市教育委員会ほか 2009『築山遺跡IV』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 出雲市教育委員会ほか 2016「上塙治横穴墓群第40支群」県道出雲三刀屋線上塙治工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I
- 鳥根県教育委員会ほか 1980「上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」鳥根県教育委員会ほか
- 鳥根県教育委員会ほか 1998「上沢II遺跡 狐廻谷古墳 大井谷城跡 上塙治横穴墓群（第7・12・22・23・33・35・36・37支群）」斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書IV
- 鳥根県教育委員会ほか 1994「三田谷II遺跡 上沢I遺跡」斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書I
- 鳥根県教育委員会ほか 2000「三田谷III遺跡」斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X
- 鳥根県古代文化センター 1999「上塙治築山古墳の研究」鳥根県古代文化センター調査研究報告書4

※上塙治横穴墓群の各支群についての参考文献は第3章に同じ

遺 物 觀 察 表

表5 出土土器観察表

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土、焼成・ 色調	型式、その他 ※組合型式は大谷1991による	
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他				
11号横穴墓												
1	1号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯蓋	134	37				変形	内：天井下部なヶズリ、 肩部破 内：ナデ・口縁段	真 硬質 灰色	蓋杯A3 蓋みあり 土器枕
2	1号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯蓋	134	39				変形	外：粗雑なヶズリ・肩 部破 内：ナデ・口縁段	真 硬質 灰色	蓋杯A3～4 土器枕
3	1号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯身	118	41	142		変形 かえり長：1.5	外：底丁寧なヶズリ 内：ナデ	真 硬質 灰色	蓋杯A3 蓋みあり 土器枕	
4	1号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯身	12	4	144		ほぼ変形 かえり長：1.4	外：底粗雑なヶズリ 内：ナデ	真 硬質 灰色	蓋杯A3～4 蓋みあり 土器枕	
12号横穴墓												
5	2号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯蓋	128	42				ほぼ変形	外：やや粗雑なヶズリ、 肩部破 内：ナデ	やや粗い 硬質 灰色	蓋杯A4 土器枕
6	2号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯蓋	126	4				変形	外：粗雑なヶズリ・肩 部破 内：ナデ	真 硬質 灰黄色	蓋杯A4 土器枕？
7	2号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯身	104	4	134		変形 かえり長：1.3	外：底やや粗雑なヶズ リ 内：ナデ	やや粗い 硬質 灰色	造作A4 土器枕？	
8	2号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯身	112	41	14		ほぼ変形 かえり長：1.4	外：底粗雑なヶズリ 内：ナデ	真 硬質 灰黄色	蓋杯A4 土器枕？	
13号横穴墓												
9	3号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯蓋	126	36				変形	外：特に粗雑なヶズリ、 肩部破 内：ナデ・口縁沈縛	真 硬質 灰～灰黄色	蓋杯A4 天井外周格子状ヘラ記号
10	3号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯蓋	128	39				変形	外：粗雑なヶズリ・肩 部破 内：ナデ・口縁沈縛	真 硬質 灰～灰黄色	蓋杯A4
11	3号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯蓋	124	47				変形	外：粗雑なヶズリ・肩 部破 内：ナデ	やや粗い 硬質 灰色	蓋杯A4
12	3号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯蓋	13	4				変形	外：特に粗雑なヶズリ、 肩部沈縛 内：ナデ・口縁沈縛	真 硬質 灰～灰白色	蓋杯A4
13	3号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯蓋	128	38				ほぼ変形	外：粗雑なヶズリ・肩 部破 内：ナデ・口縁沈縛	真 硬質 灰色	蓋杯A4
14	3号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯身	106	45	134		変形 かえり長：1.5	外：底粗雑なヶズリ 内：ナデ	真 硬質 灰～灰白色	蓋杯A4	
15	3号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯身	112	39	14		変形 かえり長：1.0	外：底特に粗雑なヶズ リ 内：ナデ	真 硬質 灰黄色	蓋杯A4～5	
16	3号横穴墓 玄室 内	須恵器	杯身	11	37	136		変形 かえり長：1.1	外：底特に粗雑なヶズ リ 内：ナデ	真 硬質 灰～灰白色	蓋杯A4～5	
17	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯蓋	128	4				ほぼ変形	内：やや粗雑なヶズリ、 肩部破 内：ナデ・口縁浅い沈 縛	真 硬質 灰色	蓋杯A4 天井外周ヘラ記号「」
18	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯蓋	124	38				変形	外：やや粗雑なヶズリ・肩 部破 内：ナデ・口縁沈縛	真 硬質 灰～灰黄色	蓋杯A4
19	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯蓋	12	42				変形	外：粗雑なヶズリ・肩 部破 内：ナデ・口縁沈縛	真 硬質 灰色	蓋杯A4
20	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯蓋	126	43				変形	外：やや粗雑なヶズリ、 肩部破 内：ナデ	真 硬質 灰～暗灰色	蓋杯A4
21	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯蓋	122	43				口縁の1/4欠損	外：粗雑なヶズリ・肩 部破 内：ナデ・口縁沈縛	真 硬質 暗灰色	蓋杯A4
22	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯身	106	39	132		変形 かえり長：1.0	外：底やや粗雑なヶズ リ 内：ナデ	真 硬質 灰色	蓋杯A4	
23	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯身	106～112	33	130～134		ほぼ変形 かえり長：1.2	外：底やや粗雑なヶズ リ 内：ナデ	真 硬質 灰～灰黄色	蓋杯A4 蓋みあり	
24	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯身	116	4	142		ほぼ変形 かえり長：1.4	外：底やや粗雑なヶズ リ 内：ナデ	真 硬質 灰～灰白色	蓋杯A4	
25	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯身	108	41	14		変形 かえり長：1.3	外：底やや粗雑なヶズ リ 内：ナデ	真 硬質 灰～灰白色	蓋杯A4	
26	3号横穴墓 墓道上 2層	須恵器	杯身	107	36	135		約1/2残存 かえり長：1.1	外：底周辺ヶズリ 内：ナデ	真 硬質 灰白色	蓋杯A5 底外面ヘラ記号「×」	

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	形式・その他 ※復元部は大半を付記する
				口径	器高	底径	脚底径	残存率・その他			
27	3号横穴墓 墓道上2層	須恵器	縦	10.8 ~11.7	14 ~14.9	体9.0	底36	ほぼ完形 外:頭部成次文・沈縫 内:各 体部刻文・沈縫2 条・半ケズリ 内:ナデ	直 硬質 灰~灰白色	縫A5 並みあり	
28	3号横穴墓 墓道上2層	須恵器	接瓶	9.6	16.6	瓶12.6 厚11.8		口縁部一部欠損	外:ナデ・背面ケズリ 内:ナデ 把手状	直 やや軟質 灰白色	縫瓶B3
29	3号横穴墓 墓道前 上段上1層	須恵器	壺	20.2	(48.2)	40		口縁・体部の一部と底 部欠損	外:体部タキ・カキ 内:体部タキ	やや粗い 硬質 灰白色	
30	3号横穴墓 墓道上2層	土師器	高杯	(17.5)	13.2		14.4	口縁端部の大部分と脚 部の一部欠損	外:杯底付近ハケ	直 軟質 灰白色	風化著しい
31	3号横穴墓 墓道上2層	土師器	高杯	(17.6)	13.5		14.1	口縁端部の大部分欠損	外:杯底付近ハケ	直 軟質 灰白色	風化著しい
14号横穴墓											
43	4号横穴墓 玄室右柱内	須恵器	杯蓋	13	42			ほぼ完形	外:粗雑なケズリ・肩 部接合部 内:ナデ・口縁沈縫	やや粗い 硬質 灰白色	蓋杯A4 上置枕
44	4号横穴墓 玄室左柱内	須恵器	杯身	11	4	13.8		完形 かえり長:12	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	蓋杯A4 並みあり 上置枕	
45	4号横穴墓 玄室左柱内	須恵器	杯蓋	13	47			完形	外:粗雑なケズリ・肩 部接合部 内:ナデ・口縁沈縫	蓋和A4 上置枕	
46	4号横穴墓 玄室右柱内	須恵器	杯身	11.4	42	14		完形 かえり長:12	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	蓋杯A4 上置枕	
47	4号横穴墓 玄室右柱内	須恵器	杯蓋	12.6	47			完形	外:粗雑なケズリ・肩 部接合部 内:ナデ・口縁沈縫 の残一部	やや粗い 硬質 灰~灰黄色	蓋杯A4 上置枕
48	4号横穴墓 玄室右柱内	須恵器	杯身	11.2	43	13.8		完形 かえり長:13	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰~灰黄色	蓋杯A4 上置枕
49	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13	47			完形	外:粗雑なケズリ・肩 部接合部 内:ナデ・口縁沈縫 の残一部	直 硬質 灰~灰黄色	蓋杯A4
50	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	4	14		完形 かえり長:14	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	直 硬質 灰~灰黄色	蓋杯A4
51	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.4	46			完形	外:粗雑なケズリ・肩 部接合部 内:ナデ・口縁太い沈 縫	直 硬質 灰白色	蓋杯A4
52	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	42	13.6		ほぼ完形 かえり長:12	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	直 硬質 灰~灰白色	蓋杯A4
53	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.8	46			完形	外:やや粗雑なケズリ 肩部接合部 内:ナデ・口縁沈縫 の残一部	直 硬質 灰白色	蓋杯A4
54	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	41	13.8		完形 かえり長:12	外:底やや粗雑なケズ リ 内:ナデ	直 硬質 灰白色	蓋杯A4
55	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13	47			完形	外:粗雑なケズリ・肩 部接合部 内:ナデ	直 硬質 灰白色	蓋杯A4
56	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.4	37	14		完形 かえり長:11	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	直 硬質 灰~灰黄色	蓋杯A4~6
57	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13.4	48			完形	外:やや粗雑なケズリ 肩部接合部 内:ナデ・口縁沈縫	直 硬質 灰白色	蓋杯A4
58	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	43	14.2		完形 かえり長:13	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	直 硬質 灰白色	蓋杯A4
59	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.7	45			完形	外:粗雑なケズリ・肩 部接合部 内:ナデ・口縁沈縫	直 硬質 灰白色	蓋杯A4
60	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	41	13.8		完形 かえり長:12	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	直 硬質 灰白色	蓋杯A4
61	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.8	47			完形	外:粗雑なケズリ・肩 部接合部 内:ナデ・口縁沈縫 の残一部	直 硬質 灰~灰黄色	蓋杯A4
62	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	42	13.8		完形 かえり長:12	外:底粗雑なケズリ? 風化 内:ナデ	直 硬質 灰~灰黄色	蓋杯A4~6
15号横穴墓											
65	5号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.2	43			完形	外:やや粗雑なケズリ 肩部接合部 内:ナデ・口縁沈縫	直 硬質 灰~灰黄色	蓋杯A4 上置枕

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※細部記述は大型による	
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他				
66	5号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.4	47	13.4		変形 かえり長:14	外:底粗雫なケズリ 内:ナデ・口縁沈雫様 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 4 上器柱	
67	5号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.6	44			ほぼ変形	外:底粗雫なケズリ・解 裂様 内:ナデ・口縁沈雫様 の後一段	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 4 上器柱	
68	5号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.6	41	13.6		ほぼ変形 かえり長:14	外:底やや粗雫なケズリ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 4 上器柱	
84	5号横穴墓 墓道上層上段	須恵器	杯身	(10.6)	37	(13.0)		ほぼ変形 かえり長:13	外:底粗雫なケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 4 蓋あり	
85	5号横穴墓 墓道上層上段	須恵器	杯身	11	42	14		ほぼ変形 かえり長:13	外:底周辺ケズリ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 5	
86	5号横穴墓 墓道上層上段	須恵器	杯身	11.2	39	14.2		ほぼ変形 かえり長:11	外:底周辺ケズリ後 ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 6	
87	5号横穴墓 墓道上層上段	須恵器	縦	11.2	15.2	体8.8	底4.2	口縁部約1/2欠損	外:面部波状文・沈雫 1条 体部波状文・沈雫2 条下半ケズリ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	縦A 5	
88	5号横穴墓 墓道上層上段	須恵器	脚付長縦	(9.6)	24	14	脚 (10.8)		脚部約1/3欠損	外:面部波状文2段・ 沈雫4条 刻剥夷文・ 沈雫2条 体部カキナ ナタケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰~灰黃色	蓋あり
89	5号横穴墓 墓道上層上段	須恵器	提瓶	8.4	13.8	幅11.6 厚9.6		口縁部の約1/3欠損	外:タタキ抜ナデ 内:ナデ	真 やや軟質 灰~灰白色	提瓶B 3	
90	5号横穴墓 墓道上層上段	須恵器	縦	19.6	(50.6)	43.8		口縁・体部の一端破 部欠損	外:体部タタキ 内:体部タタキ	やや粗い 硬質 灰~灰白色	底部穿孔	
16号横穴墓												
91	6号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	12.6	48			ほぼ変形	外:丁寧なケズリ・解 裂様 内:ナデ・口縁瀬シヤーブ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 3~4 上器柱	
92	6号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	39	14		変形 かえり長:11	外:底やや粗雫なケズ リ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 4 上器柱	
93	6号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.4	4			変形	外:粗雫なケズリ・解 裂様 内:ナデ・口縁	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 3~4 上器柱	
94	6号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	39	13.8		変形 かえり長:12	外:底粗雫なケズリ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 4 上器柱	
17号横穴墓												
95	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.9	44			ほぼ変形	外:やや粗雫なケズリ・解 裂様 内:ナデ・口縁瀬シヤーブ	真 硬質 灰~灰白色	蓋杯A 3~4	
96	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.2	41	13.2		変形 かえり長:14	外:底粗雫なケズリ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 4	
97	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.3	42			ほぼ変形	外:ケズリ風化・解 裂 内:ナデ・口縁瀬シヤーブ	真 軟質 灰~灰白色	蓋杯A 3~4 上器柱	
98	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	43	13.6		変形 かえり長:14	外:底やや粗雫なケズ リ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰褐色	蓋杯A 4 上器柱	
99	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.2	43			変形	外:粗雫なケズリ・解 裂 内:ナデ・口縁	真 硬質 灰~灰褐色	蓋杯A 4 上器柱	
100	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	43	13.4		変形 かえり長:13	外:底粗雫なケズリ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰褐色	蓋杯A 4 上器柱	
101	7号横穴墓 玄室内	須恵器	縦	(42)	(85)	62.4		体部の一部・口縁約 2/3・頭部・底部欠損	外:口縁波状文2段・ 沈雫2条・体部タタキ 内:体部タタキ	真 硬質 灰~灰白色	須恵器底 底部穿孔	
18号横穴墓												
102	8号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	12.2	39	14.8		変形 かえり長:0.6	外:ナデ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 7 底外面ヘラ記号「1」	
103	8号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	37	13.6		ほぼ変形 かえり長:1.0	外:ナデ 内:ナデ	真 やや軟質 灰~灰黃色	蓋杯A 7 底外面不規則なヘラ傷 ナデ	
104	8号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	(11.2)	35	(13.6)		口縁約2/3欠損 かえり長:0.8	外:ナデ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 7 蓋あり	
105	8号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	(10.8)		(13.2)		口縁付近のみ約1/3 残存 かえり長:0.9	外:ナデ 内:ナデ	真 硬質 灰~灰黃色	蓋杯A 7	

番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm)					調整等	勘定・焼成・色調	型式・その他 ※報告書型式は大分表記による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
遺構外											
106	丘陵頭部 表土	弥生土器	壺・甌				底 (7.6)	底部小片	調整風化 外削にわずかにミガキ 状の擦跡	良 秋質 黄褐色～灰褐色	風化著しい
107	丘陵頭部 表土	弥生土器	壺・甌				底 9.5	底部破片	調整風化	稍 秋質 黄褐色	風化著しい
108	18・19支群 表土・土被り	埴輪器	甌			体 9.0	底 3.4	口縁～頭部欠損	外：全体丸縁 2箇 手ケツリ 内：ナデ	直質 灰褐色～灰白色	甌 A 7
109	丘陵頭部 表土	埴輪器	甌	(40)				口縁小片	外：口縁波状文 2段 沈模 4 条	良 秋質 灰褐色～灰白色	風化著しい
110	丘陵頭部 表土・土被り	埴輪器	甌	(26.4)				口縁～肩部の一端のみ 残存	外：全体タタキ・カネ 内：全体タタキ	良 秋質 硬質 灰褐色	第3支群斜面・第4支 群斜面出土埴輪と接合
111	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪	(29)				口縁破片	外：ナナメハケ 端部約1/6残存	良 秋質 明赤褐色	
112	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪					口縁小片	外：ナナメハケ 内：ナナメハケ	良	
113	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪					口縁小片	外：ナナメハケ 内：ナナメハケ	良 秋質 棕色	函雲市 2016 122 - 347
114	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪					口縁小片	外：ナナメハケ 内：ナナメハケ	良 秋質 棕色	
115	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪				胴部小片 タガ高：17		外：ナナメハケ 内：ナナメハケ	良 やや秋質 明赤褐色	函雲市 2016 122 - 348
116	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪				胴部小片 タガ高：17	調整風化 内削スカシ	良 秋質 棕色		
117	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪				胴部小片 タガ高：18	外削：ナデ・タテハケ 内削：ナデ 内削スカシ	良 やや秋質 に赤い褐色		
118	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪				胴部小片 タガ高：16	調整風化 内削スカシ	良 秋質 棕色		
119	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪				基底部小片	内削ナデ・オサエ 基底部再調整	良 秋質 棕色		
120	第3・40支群 表土・流土	埴輪	円筒埴輪				基底部小片	外削：円柱状工具によ るタタキ削か 内削・風化・調整時 の圧迫により下端部分 向に伸びる 基底部内削	良 秋質 棕色	風化のため調整不明瞭	

表6 出土金属器観察表

番号	出土地点	種別	法量(cm)				備考	
			長	幅	厚	その他		
13号横穴鑿								
32	13号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	左右 (30) 26	上 下 (27) 26	0.7	開き部厚 0.8 × 0.6	一部欠損	鋼芯銀板貼
33	13号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	左右 (30)	上 下 (26)	0.7	開き部厚 0.8 × 0.5	表面一部欠損	鋼芯銀板貼
34	13号横穴鑿 玄室 内	刀子	残 30.2	1.7	0.4	刃部長 7.0 茎部残長 3.2 頭部 0.7 厚 1.2	茎端部欠損	両面 頭部残存 柄の木質一部残存
35	13号横穴鑿 玄室 内	刀子	残 12.0	1.2	0.4	刃部長 8.3 茎部残長 3.5	茎端部と開部欠損	精、葉の木質一部残存
36	13号横穴鑿 玄室道上 2層	鉄鑿		0.9	0.15	刃部長 2.2 頭部残長 8.7 茎部残長 0.7	頭部と茎部の一部欠損	長頭鑿 長三角形、直角両開 茎部欠柄一部残存
37	13号横穴鑿 玄室道上 2層	鉄鑿	残 12.2	0.9	0.3	刃部長 2.1 頭部長 8.85	茎部一部欠損	長頭鑿 複数刃、直角両開 茎部欠柄一部残存
38	13号横穴鑿 玄室道上 2層	鉄鑿	残 12.2	0.9	0.25	刃部長 2.2 頭部長 9.2	茎部一部欠損	長頭鑿 複数刃、無開 茎部欠柄一部残存
39	13号横穴鑿 玄室道上 2層	鉄鑿	残 11.9	0.9	0.3	刃部長 2.3 頭部長 9.6	茎部欠損	長頭鑿 複数刃、無開
40	13号横穴鑿 玄室道上 2層	鉄鑿		(0.9)	0.3	刃部長 2.2 頭部長 8.8 茎部残長 0.7	刃部～茎部の一部欠損	長頭鑿 複数刃、無開 茎部欠柄一部残存
41	13号横穴鑿 玄室道上 2層	鉄鑿	残 3.6	0.7	1.5	刃部長 2.2 頭部残長 1.4	刃部周辺のみ残存	複数刃、無開
42	13号横穴鑿 玄室道上 2層	鉄鑿	残 30.4		0.3	刃部長 8.4 茎部残長 2.0	刃部と茎端部欠損	長頭鑿 茎部欠柄一部残存
14号横穴鑿								
63	14号横穴鑿 玄室 内	刀子	残 22.2	2.05	0.55	刃部残長 13.6 茎部長 8.6	切先端わずかに欠損	両面 精、葉の木質一部残存 頭部に3層の漆状被膜
64	14号横穴鑿 玄室 内	大刀	残 77.5	2.8	0.6	刃部残長 45.0 茎部長 12.5 頭部 1.56 厚 2.9 厚 20 鷹長 5.7 厘 53 厘 0.3	切先端わずかに欠損	両面 目貫穴 2 所 頭部残存 精、葉の木質一部残存 頭部漆状被膜 無意貫付属
15号横穴鑿								
69	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	左右 26	上 下 19	0.5	開き部厚 0.5 × 0.3	尖形	鋼芯銀板貼
70	15号横穴鑿 玄室 内	刀子	残 8.8	1.3	0.4	刃部長 2.9 茎部長 4.9	刃部一部欠損	両面 精、葉の木質一部残存
73	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 12.7	1.0	0.25	刃部長 2.9 頭部長 8.8 茎部残長 2.2	茎部一部欠損	長頭鑿 複数刃、無開 茎部欠柄一部残存
72	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 14.4	0.8	0.2	刃部長 2.1 頭部長 10.1 茎部残長 2.2	刃部と茎部の一部欠損	長頭鑿 複数刃、無開 茎部欠柄一部残存
73	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 14.3	0.6	0.25	刃部長 2.3 頭部長 10.3 茎部残長 1.7	茎部一部欠損	長頭鑿 複数刃、無開 茎部欠柄一部残存
74	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 (15.1)	0.6	0.25	刃部長 2.3 頭部長 7.7 茎部残長 (5.1)	刃端部と茎部の一部欠損	長頭鑿 複数刃、無開 茎部欠柄一部残存
75	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 15.7	(1.0)	0.3	刃部長 1.3 頭部長 9.3 茎部長 5.1	刃部一部欠損	長頭鑿 複数刃、無開 茎部欠柄一部残存
76	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 13.5	0.8	0.3	刃部長 2.2 頭部長 9.4 茎部残長 2.0	刃部と茎部の一部欠損	長頭鑿 刃端部、無開 茎部欠柄一部残存
77	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 12.6	0.9	0.2	刃部長 2.3 頭部長 8.4 茎部残長 1.9	茎部一部欠損	長頭鑿 複数刃、両開 茎部欠柄一部残存
78	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 9.7	0.9	0.2	刃部長 2.5 頭部長 7.2 茎部残長 0.2	茎部一部欠損	長頭鑿 複数刃、両開
79	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 14.3		0.4	刃部長 9.2 頭部長 5.1	刃部と茎端部欠損	長頭鑿 頭部に有機物付着
80	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 (13.0)		0.2	刃部長 0.2 頭部長 7.8 茎部残長 (5.0)	刃部と茎部の一部欠損	長頭鑿 無開 茎部欠柄一部残存
81	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	残 10.4	2.5	0.4	刃部長 6.0 頭部長 2.5 茎部残長 1.9	茎端部欠損	長三角形 茎部欠柄一部残存
82	15号横穴鑿 玄室 内	鉄鑿	13.9	3.2	0.5	頭部長 7.7 頭部長 6.2	(ほぼ完形)	有疤痕頭部 茎部欠柄一部残存
83	15号横穴鑿 玄室 内	鉄斧	8.1	5.1	1.8	尖形	有疤痕頭部 斧部断面直方形	

写 真 図 版

●遺物の縮尺については以下のとおりである。

土 器：S ≈ 1/3 を基本とし、その他の縮尺の場合は各図版に表示。

金属器：各図版に表示。

●図版中の遺物番号は挿図・遺物観察表の番号に対応する。



上塙治横穴墓群第3支群全景（東より）



11号横穴墓



11号横穴墓玄室



12号横穴墓



12号横穴墓玄室



13号横穴墓



13号横穴墓閉塞状況



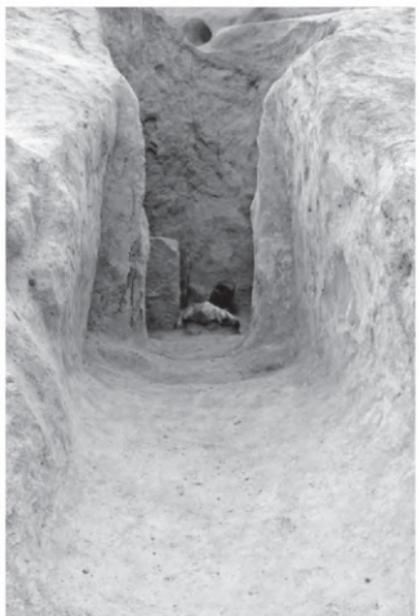
13号横穴墓玄室



13号横穴墓遺物出土状況－1



13号横穴墓遺物出土状況－2



14号横穴墓



14号横穴墓閉塞状況



14号横穴墓玄室完掘状況



14号横穴墓石棺



14 号横穴墓玄室内遺物出土狀況—1



14 号横穴墓玄室内遺物出土狀況—2



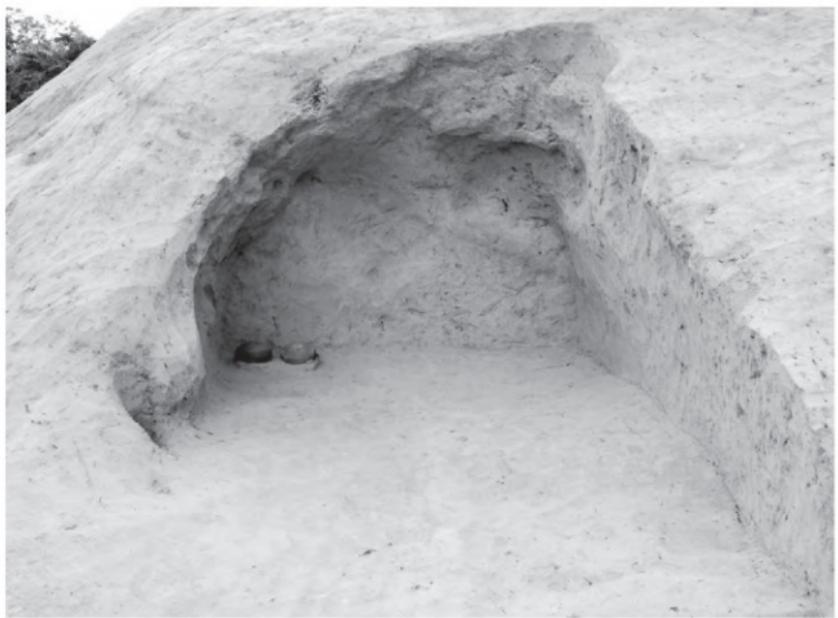
15号横穴墓



15号横穴墓 墓道上遗物出土状况



15号横穴墓玄室



16号横穴墓



17号横穴墓



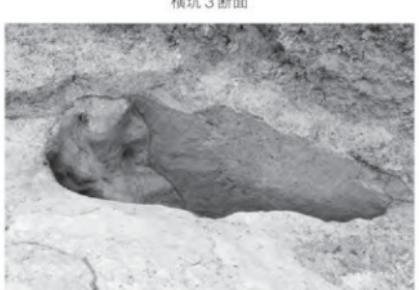
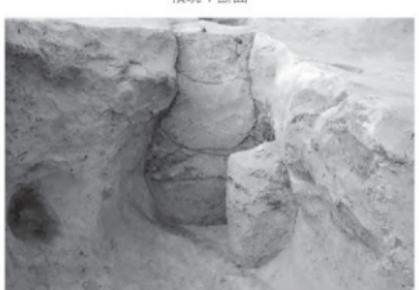
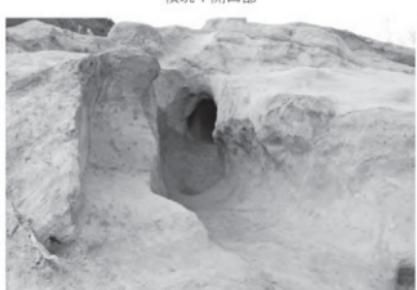
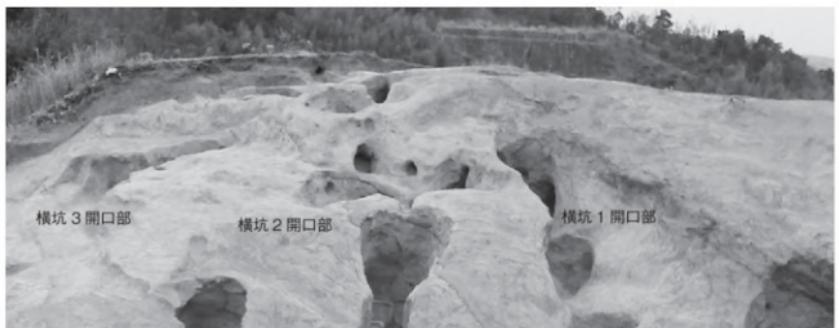
18号横穴墓

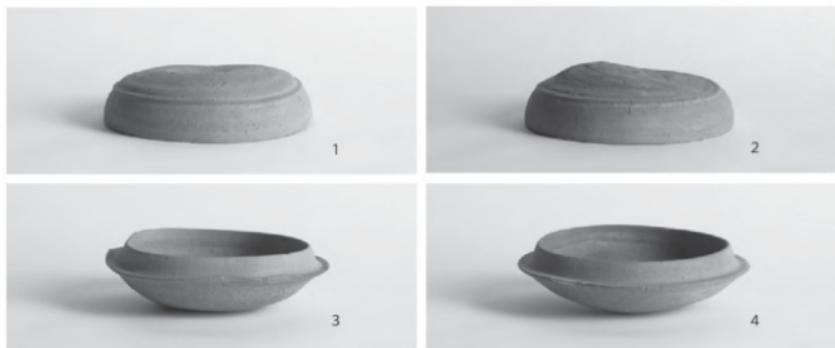


19号横穴墓

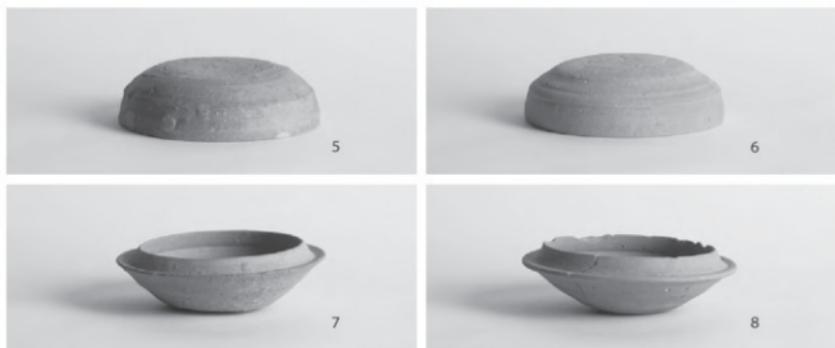


19号横穴墓玄室

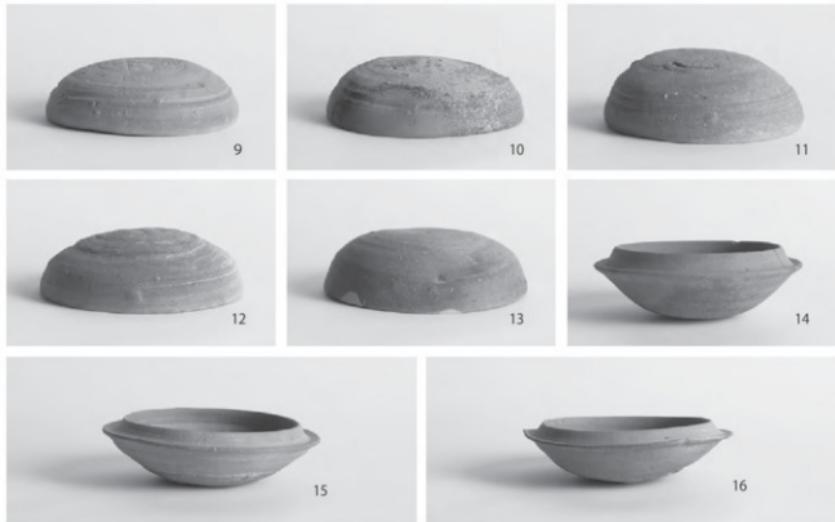




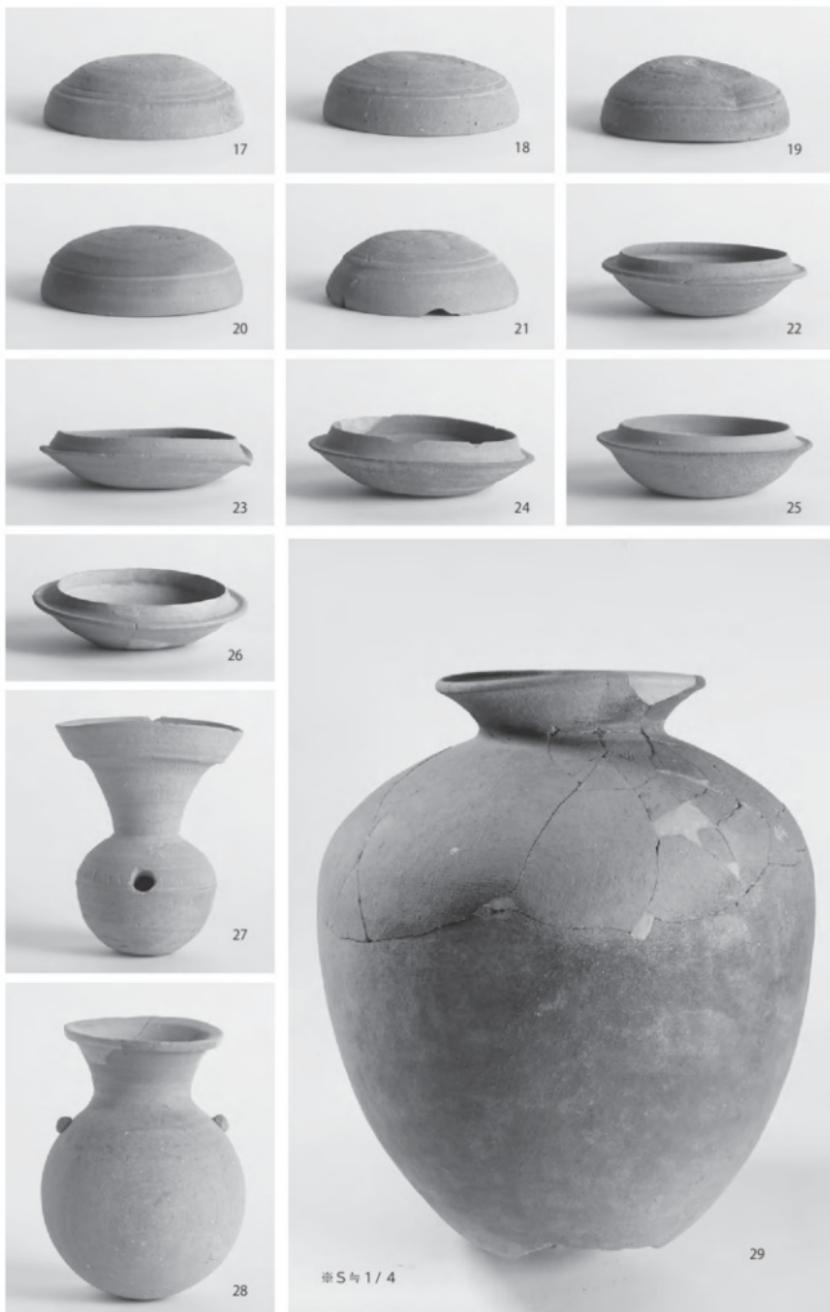
11号横穴墓出土土器



12号横穴墓出土土器



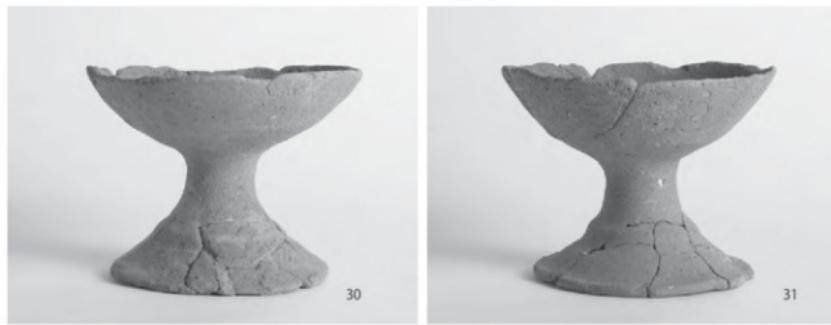
13号横穴墓出土土器—1



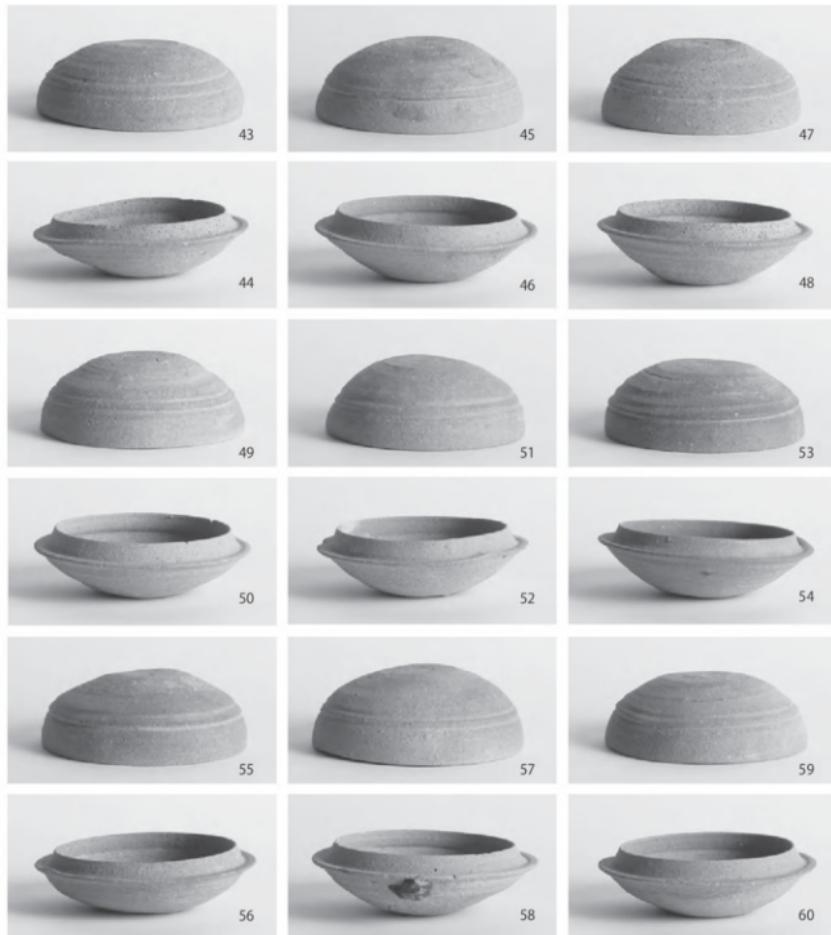
13号横穴墓出土土器一2

29

※S与1/4



13号横穴墓出土土器－3



14号横穴墓出土土器－1



61



62

14号横穴墓出土土器-2



65



67



66



68



84



87



85



88



86



89

15号横穴墓出土土器-1



※S与1/4

15号横穴墓出土土器—2



16号横穴墓出土土器



18号横穴墓出土土器



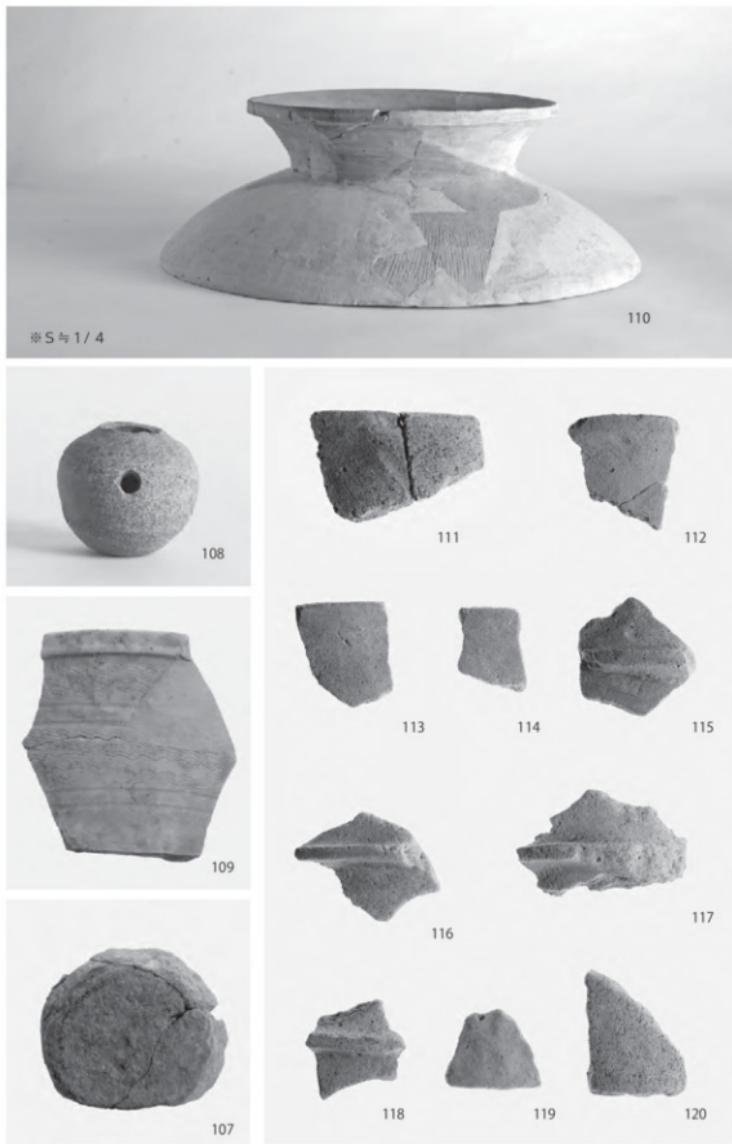
17号横穴墓出土土器—1



101

※5与1/4

17号横穴墓出土土器—2



道横外出土土器・円筒埴輪



32



33



69

※S与1/1



※S与1/2

※S与1/4

64

※S与1/2



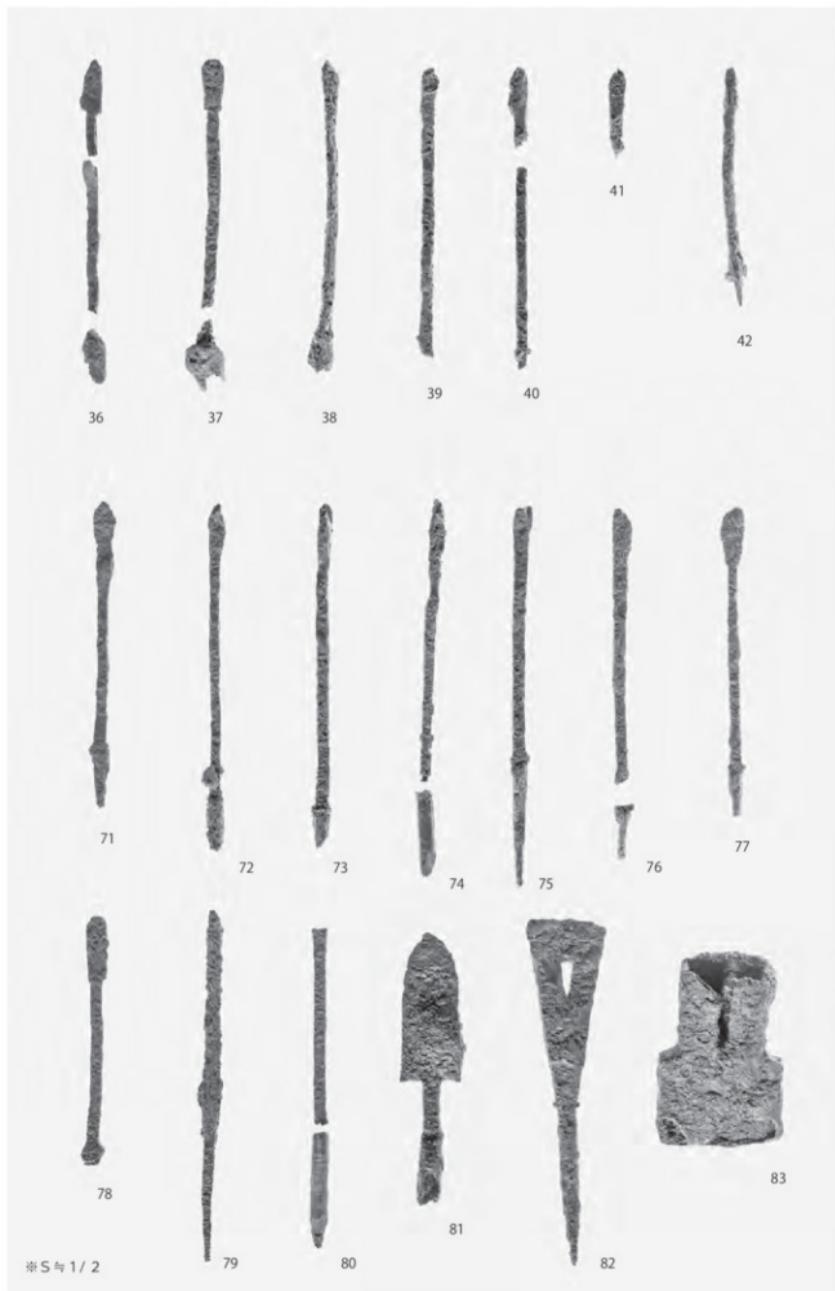
34



70

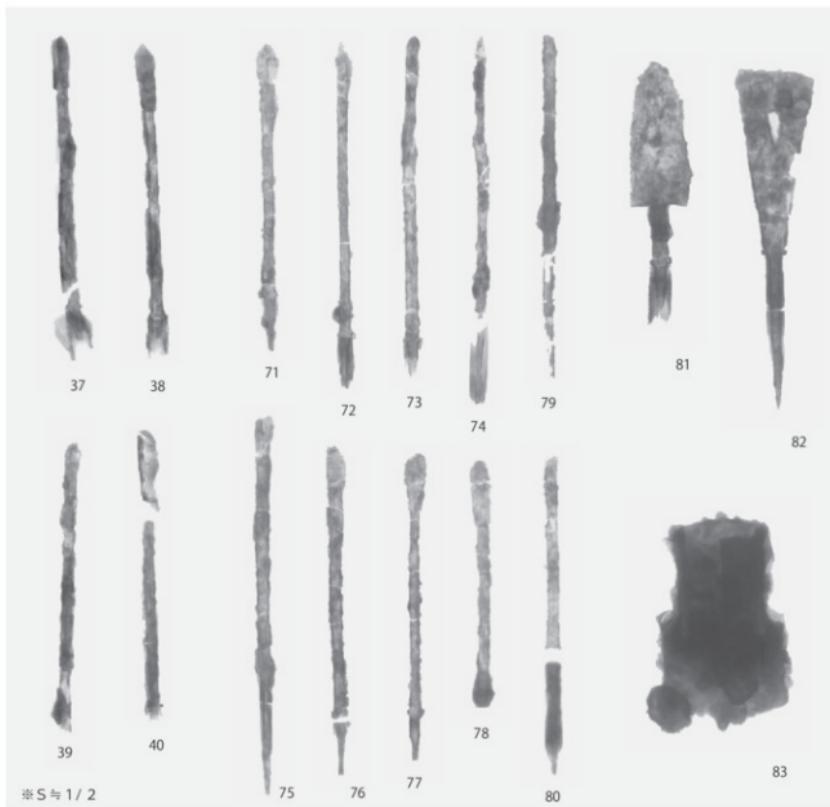
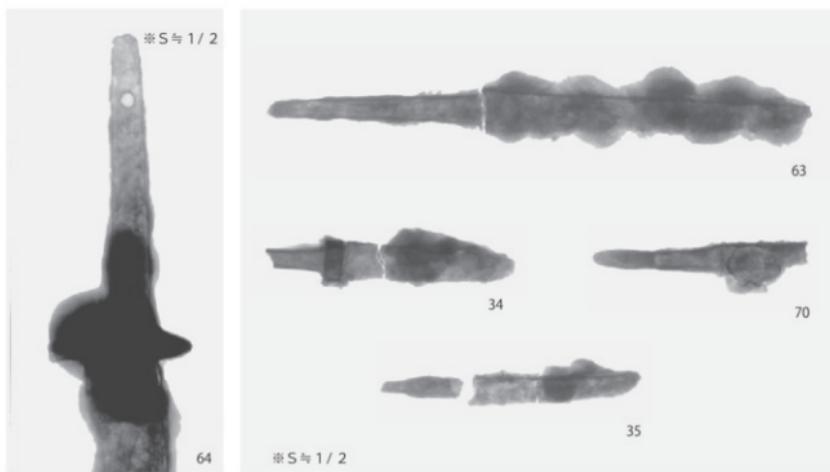


63



※ 5 与 1 / 2

出土金属器-2 (36~42:13号桶穴墓, 71~83:15号桶穴墓)



出土金属器 X線写真 (34・35・37 ~ 40: 13号横穴墓, 63・64: 14号横穴墓, 71 ~ 83: 15号横穴墓)

報告書抄録

表 紙：レザック 66 四六判 260 kg

見返し：上質紙 A判 70.5 kg

本 文：マットコート A判 57.5 kg

図 版：アート紙 菊判 62.5 kg

出雲市の文化財報告 36

県道出雲三刀屋線土塙治工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

上塙治横穴墓群 第3支群

平成30(2018)年3月

編 集：出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760
TEL (0853) 21-6893

発 行：出雲市教育委員会
印刷・製本：有限会社 西村印刷